

# 目次

巻頭言			
パノラマ館の360度円筒パノラマアート	北海学園大学教授	手塚 薫	1
《特集》 奥尻島での学び			
奥尻島研修を終えて	人文学部日本文化学科3年	中村 美月	3
奥尻島研修での学び	人文学部日本文化学科3年	出崎 真帆	9
奥尻島の記憶と自然からの学び	工学部生命工学科2年	楠本 玲来	15
奥尻島での研修を通して	工学部生命工学科1年	藤林ひかる	20
奥尻研修を終えて	人文学部日本文化学科1年	山木 敬太	25
奥尻島研修を終えて	法学部1年	渡邊 大貴	33
奥尻島における祭礼の廃止および統合と存続に向けた取り組み	文学研究科博士(後期)課程・小樽市総合博物館学芸員	蟬塚 咲衣	37
《特別寄稿》			
奥尻町の文化財行政に関する他機関・団体等との協力・連携と課題	奥尻町教育委員会事務局 主任学芸員	稲垣 森太	45
2024年度課程科目学生レポート			
ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授	手塚 薫	55
博物館経営論課題ミニミュージアム制作を終えて	人文学部日本文化学科3年	飯田ゆき乃	56
博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて	経済学部地域経済学科4年	伊藤 赳	62
博物館経営論 ミニミュージアムの作成を終えて	人文学部日本文化学科3年	中村 美月	69
『博物館の形態の変化』と講評	北海学園大学講師	水崎 禎	74
博物館資料ドキュメント『ミニーマウスのポーチ』	法学部法律学科2年	若杉 彩花	76
博物館資料ドキュメント『アイドルホース・ディープボンドのぬいぐるみ』	人文学部日本文化学科2年	荒屋敷詩乃	80
博物館資料ドキュメント『E-Pencil (イー・ペンシル)』	人文学部英米文化学科1年	浅井 博子	86
博物館資料ドキュメント『モルモットの埴輪 (モニワ)』	工学部生命工学科1年	藤林ひかる	92
博物館資料ドキュメント『外来生物法許可標章』	法学研究科法律学専攻修士課程1年	加賀谷朋伽	98
編集後記			104

\* 学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。



## 巻頭言

### パノラマ館の 360 度円筒パノラマアート

北海学園大学教授 手塚 薫

2024 年 11 月中旬にドイツへ出張する機会があった。主要な目的は、ベルリン王宮（フンボルト・フォーラム）内にある民族学博物館の先住民関連コレクションの調査であった。王宮の原型は 18 世紀には完成し、その後プロイセン国王の居城として使用され、王家のコレクションをも保管していたが、第二次世界大戦により大きな損壊を受けた。戦後ドイツ民主共和国により遺構は撤去され、共和国宮殿が新たに建設されたが、ドイツ再統一後に取り壊された。ファサードのバロック彫刻やクーポラは時代考証に基づいて再構成され、東ベルリン時代の記憶を排除し、プロイセン王国の繁栄と誇りを象徴的に取り戻そうとした試みと解釈されている〔アライダ・アスマン 2011 年『記憶のなかの歴史 個人的経験から公的演出へ』磯崎康太郎訳、松籟社、京都〕。



写真1 フンボルト・フォーラムの通用口

王宮周辺のムゼウムスインゼル（博物館島）とよばれるウンター・デン・リンデン通りとシュプレー川が交差する地区一帯は、市内の名だたる博物館・美術館群が集中する一角で、ユネスコの世界遺産に登録されている。コレクション調査で疲れた頭をいやすために周囲を散策すると、ベルリン大聖堂の特徴的な緑色のドームやネオバロック様式のボーデ博物館に交じって、ガラス張りのドイツ歴史博物館ペイ館など、新旧の建築物の対比も楽しめる。曇りがちで肌寒い陰鬱な日が多かったが、観光シーズンからは外れており、観光客の姿もまばらで思いのほか快適であった。

古代ギリシアのペルガモンで発掘された「ペルガモンの大祭壇」を展示の呼び物にしているペルガモン博物館は改修工事のために閉鎖中であったのは残念だったが、その西北に位置するペルガモン博物館の別館であるパノラマ館に行ってみた。古代ローマのハドリアヌス帝が西暦 129 年のとある日にエーゲ海に面した小アジアのペルガモン（現トルコ）に訪ずれた様子を、円筒形の展示室に配置された 360 度のパノラマアート上に再現したものである。ハドリアヌス帝が、ディオニソスの祭典を僧侶、高官らと楽しんでいる情景が活写されている。

再現プロジェクトの責任者ヤデガール・アッシジは、ペルガモン遺跡に実際に足を運び、遺跡を見下ろす地点から多数の写真を撮り、それにデジタル処理を施してパノラマアート上に組み込んだもので、地上から眺めると歪みを感じられて不自然に見えるが、展望台に上れば、情景のディテールが一層リアルに迫ってくる。

紀元前 2 世紀の半ばにペルガモンのアクロポリスに建てられた本物の大祭壇とそれを取り巻く大理石の壁に延々と続く神々と巨人族との戦いのレリーフは、ドイツの発掘チームが分解してベルリンへ運び、現在閉館中のペルガモン博物館の本館内に再現されている。パノラマ館では、パノラマアートの中心に据えられた約 30 メートルの展望台の各階からこのアートを楽しみながら、ハドリアヌス帝が見たのと同じ日の情景を眺めることができる。情景は平面ではなく、丘の低層から高層まで多種多様な人間の営みが描写されており、見飽きることがない。詳細を確認するためには、階段を上ってそれが一番よく見える場所に陣取って眺めればよい。臨場感を引き立たせるのは、日中から夜までの時間経過を表現する照明の調節と人声などの音響効果である。

博物館における鑑賞の現状については、もっぱら視覚に頼ることが多いと言われる。そのため、アクセシビリティと包摂性の観点から、触覚、聴覚、嗅覚、味覚、体性感覚、固有感覚等を含めた多感覚に注目した展示が考案されつつある。ハード及びソフトの両面から障害者に対する博物館の対応を考慮するのもその一環である。しかし、パノラマ館のように、視覚情報がメインの展示であっても、視覚の垂直移動や時間の流れを再現し、聴覚情報を加えるなどの工夫によって、単調な博物館展示を避けるという試み自体もまだまだ改善の余地があるといえそうだ。



写真2 ペルガモン博物館のパノラマ館



写真3 展望台と 360 度パノラマアート

# 奥尻島研修を終えて

人文学部日本文化学科 3年 中村 美月

## 1. はじめに

2024年の夏に私自身三度目となる奥尻島での研修を終え、非常に多くの貴重な経験を得ることができた。

このレポートでは、特に印象深かった宮津地区の記憶地図作りの取り組みと、福島大学による発掘調査への参加について詳しく述べる。また、13日に青苗地区でおこなった防災施設調査の経験を通じて得られた知識を基に、次年度に執筆する卒業論文で深掘りする予定である奥尻島の防災に関する考察も展開する。



写真1 晴天の中奥尻についてのフェリー

今回の奥尻島研修は2024年8月11日から15日にかけて行われ、私自身がグループリーダーを務めた。北海学園大学としての研修は全体的に順調に進行したが、同時期に研修を行っていた福島大学のメンバーは、悪天候によるフェリーの運航停止で予期せぬ延泊を余儀なくされ、不運に見舞われた様子であった。その中で私たちが天候の影響から逃れ、スムーズに活動を行うことができたのは、手塚先生の長年にわたる経験に裏打ちされた絶妙な時期設定のおかげといえる。今年のグループは、とてもチームワークがよいメンバーであったといえる。全員が力を合わせ、優れたチームワークを発揮できた背景には、今回の参加メンバーの調和が大いに寄与していたと考える。

移動日をのぞく実際の研修の日程は、12日から14日までの三日間にわたって集中して行われた。初日には、島の名物である寿司を初めて味わうことから始まり、12日には宮津弁天宮での清掃ボランティア活動を行った。その後、地元の漁師である三上さんへのインタビューを通じてフィールドワークを深化させ、記憶地図の作成を進めた。さらに、その晩には広島出身の出崎さんが腕を振るったお好み焼きをいただく機会にも恵まれた。

翌13日には、青苗地区を訪れ、元消防職員であった山下さんの話を伺い、記憶地図を深掘りし、地域の歴史や文化をより深く知ることができた。

14日には福島大学のメンバーと一緒に青苗地区の遺跡調査を実施し、初めての遺跡発掘調査では、戸惑う場面が多々あったものの、専門的な知識を直接学ぶことができたことは非常に貴重な経験であった。現場では、経験豊富な福島大学の菊地先生や奥尻島の学芸員である稲垣さんからの指導を受け、細かな作業の重要性や遺物の扱い方について深く理解する機会に恵まれた。また、福島大学の学生と協力しながら調査を進める中で、過去の歴

史に触れ、それを解明していくことの奥深さと魅力を実感し、学問的好奇心を大いに刺激される貴重な時間となった。

今回の研修では、地域の歴史と文化を理解するだけでなく、防災の視点から地域社会の重要性についても深く考える機会が得られたことを、本稿を通じて報告する。

## 2. 記憶地図作り

宮津地区の記憶地図作りは、地域の歴史や住民の生活を深く掘り下げて理解するための極めて有意義な活動であった。地元住民から直接話を伺いながら、彼らの経験や土地に対する思いを地図に反映させることで、その地域の文化と歴史がどのように形作られ、伝承されてきたのかを深く実感できた。今回は、現在も宮津で漁師として活躍している三上さんや、元消防士で現在は青苗に在住している山下さんの貴重な話をもとに、記憶地図の作成を行った。

住民との対話を通じて得られた情報は、単なる過去の事実を超え、今の地域への深い理解を促進するものであった。主な内容としては、住民の生活に関する詳細や、宮津弁天で行われる祭りについてが挙げられる。生活面では、宮津の最盛期と人口が減った現在を比較して、かつてこの町がどれだけ賑やかで、祭りを催せるほどに活気に満ちていたかを改めて知ることができた。当時は多くの町の機能が整っており、郵便局なども存在していたため、役場がない点を除いては生活にはさほど支障がなかったという話が特に印象に残った。また、当時の海岸は砂利浜で、絶景が広がっていたことだろうと想像させられた。

こうした昔の話を聞く中で、奥尻島の特徴として挙げられる「団結力」が、この小さな島に多様な地名と集落が点在することからもたらされるものであることを実感した。各地区が小規模であることから生まれる独自の結束力が、この地域の強みとして大きな役割を果たしているのだろうと考えさせられた。このように、宮津での記憶地図作りを通じ、地域の独特の強みと歴史的背景を深く理解する機会を得たことは非常に貴重であり、今後の地域理解に多大なる示唆を与えてくれるものとなった。

記憶地図の作成を通じて、失われた祭りの記憶や生活の様子をしっかりと記録し、次世



写真2 宮津弁天宮



写真3 宮津弁天を清掃する

代に伝えるための貴重な保管ができる」と強く感じた。この取り組みを通じ、過去の地域文化や住民の暮らしぶりをより豊かに保存し、地域の歴史と伝統を後世に伝える礎とすることができたらと期待している。記憶地図は、かつての賑わいやコミュニティの絆を鮮やかに描き出し、地域のアイデンティティを強化する重要な手段として機能することができる」と感じた。



写真4 記憶地図と奥尻島研修のメンバー

### 3. 発掘調査

昨年から福島大学が主導で行っている奥尻島の青苗遺跡の発掘調査に、今年は北海学園大学から私を含め三人の学生が参加した。初めての発掘調査に臨む際の高揚感を抑えきれないものであった。発掘調査は、天候の影響で福島大学の到着が遅れたことと、研修の日程の関係で14日のみの実施となったが、多くの貴重な見聞を得ることができた。13日の夜に行われた福島大学菊地芳朗教授が主催したミーティングに参加した際、皆が真剣に取り組む雰囲気は漂っており、その熱意が強く印象に残っている。



写真5 ジョレンをかける私（中央）

福島大学の学生にもリーダーがいた。奥尻島にやってきた学生の人数は、北海学園大学は学生6人での参加であったのに対し、福島大学は約25人の大人数で、全体をまとめる大変さも垣間見えるようであった。会議後の夕食では、同じリーダーという立場もあり、発掘や就職活動やについて、様々な交流もできた。

14日、いよいよ発掘調査が始まり、私は昨年の発掘時に出た廃土の整理から取り掛かった。ブルーシートを掘り起こす作業では、土の重さを改めて実感し、発掘調査がマンパワーを必要とする重労働であることを痛感した。夏のため、気温や湿度に体力を持っていかれながらおこなわれる作業は大変厳しかった。しかし、ジョレンをはじめとする多くの道具を駆使し、見事に遺跡をきれいに整えることができたのは大きな収穫であった。特に、近世の遺物や土器が発見されたことは興奮を覚えた要素である。

実際に手を動かし、現場での作業を通じて、火山灰層の扱いや注意すべき点について学

ぶことができ、考古学を専攻する先生の指導の下、疑問を解消できたことはとても有意義であった。この発掘調査経験を通じて、私は考古学の実践的な側面を深く理解し、めったに得られない貴重な経験であった。この経験で得られて学びは、今後大いに役立てたいと考えている。



写真6 掘り出した土を運ぶ一輪車(ネコ)



写真7 きれいに整地された遺跡

#### 4. 奥尻島の防災

奥尻島は自然災害のリスクを抱える地域であり、その防災策について学ぶことは欠かせない課題である。2023年は避難路の調査を行ったが(中村 2024)、今回の研修では、1993年の北海道南西沖地震の教訓を活かして行われている防災設備に注目し、多くの情報を得ることができた。これらの取り組みは、来年度の卒業論文のテーマである奥尻島の防災に関する重要な資料として活用する予定であり、また地域の備えの重要性を広めるためにも大いに役立つと考えている。

今回確認したのは、青苗支所、青苗の避難路、望海橋、青苗地区漁業集落環境整備事業概況図であった。今後の卒業論文では、奥尻島の避難路に関する修繕や取捨選択を行うための基準を検討していきたいと考えており、今回の視察は現状の確認という面が大きいものであった。

青苗支所では多種多様な防災グッズが準備されており、避難時においても住民が安心して過ごせる環境が整え



写真8, 9, 10 青苗支所に用意されている非常時用の設備

られていると感じた。一方で、避難路については、急こう配であるために大学生でも登るのが難しいことが判明しており（中村2024）、実用性について再考が必要であると考えた。

漁業集落環境整備事業概況図の看板については、薄くて見づらく、修繕が必要な状態であることを確認した。



写真 11, 12, 13 望海橋

望海橋に関しては、通常時は立ち入り禁止になっており、柱がさびている事からも、老朽化の兆しが見受けられた。しかし、施設自体はしっかりとした構造であるため、必要な修繕を施して実用性を向上させるべきだと考える。また、もし美しく修繕を行えば見晴らしが良く、観光資源としての活用も期待できると感じた。

この視察を通じて、今後の防災対策の改善点や可能性について多くの示唆を得ることができた。来年の卒業研究においては、今回得たこれらの知見を活用し、調査をより有意義に進めていきたいと考えている。これまでの経験と学びを基に、地域の防災対策に関する具体的な課題を深く掘り下げ、効果的な改善策を提案できるよう努めていく所存である。



写真 14, 15 青苗の避難路

## 5. おわりに

2024年の夏に行われた奥尻島研修では、地域の歴史や防災について深く学ぶ貴重な経験を得ることができた。特に宮津での記憶地図作りや福島大学との発掘調査、防災施設の視察は印象深く、それぞれの活動を通じて地域の文化や防災への理解が深まった。

初めての発掘調査では、出土遺物に直接触れ、考古学の実践的側面を学び、奥尻島の防災策を検討する上で多くの示唆を得た。

今後の卒業論文では、これらの知見を基に具体的な課題を掘り下げ、効果的な改善策を提案していきたい。

今回で十周年を迎えた奥尻島研修は、多くの学びをもたらす有意義なものであった。この研修が与えてくれる貴重な経験と知見は、参加するすべての人にとって大きな財産であると確信している。今後もこの研修が長く続き、多くの後輩たちが同様の貴重な学びを得られる機会が確保されることを心から願っている。

研修では、5日間を通して指導いただいた手塚先生、奥尻島の学芸員で我々の研修を様々な面でサポートしてくださった奥尻町教育委員会事務局学芸員稲垣森太さん、先輩として近くで支えていただいた小樽市総合博物館の蟬塚咲衣学芸員、遺跡発掘調査でご指導をいただいた菊地芳朗先生に心から感謝申し上げます。さらに、奥尻島研修のメンバーである出崎さん、楠本さん、藤林さん、山木くん、渡邊くんのサポートのおかげで、リーダーとしても充実した5日間を過ごすことができ、感謝いたします。ありがとうございました。

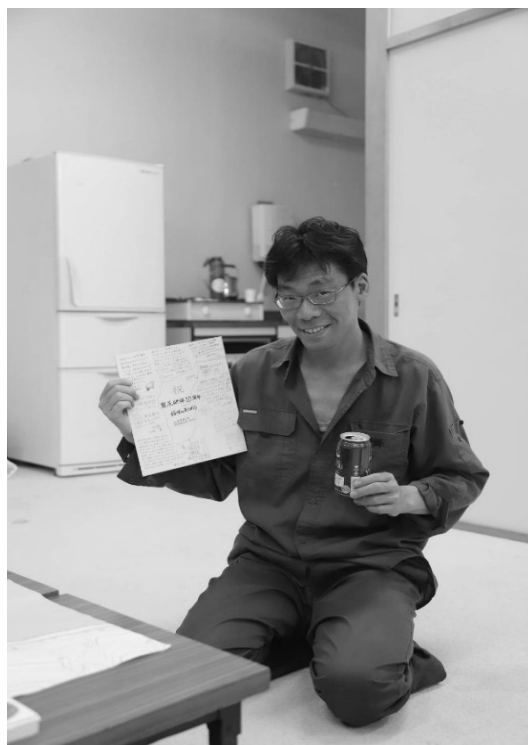


写真 16 十周年の色紙を持つ稲垣学芸員

# 奥尻島研修での学び

人文学部日本文化学科 3年 出崎 真帆

## 1. はじめに

私は2024年8月11日から15日までの5日間で奥尻島研修に参加した。私がこの研修に参加した目的は、実際に奥尻島で学芸員として働いていらっしゃる奥尻町教育委員会事務局の稲垣森太さんに学芸員の仕事について学ぶこと、奥尻島に暮らす住民にとって学芸員とはどのような存在なのかを知ること、奥尻島の文化や歴史について調査することの3点である。奥尻島で実際に島の方々と交流することで、座学では知ることのできないお話や体験も多く、貴重な経験を得ることができた。さらに、4日目には福島大学の学生と青苗地区で発掘調査を行い、発掘中の現場の様子や実態をすることができた。次章から研修について詳細に述べていく。

## 2. 研修1日目

1日目の早朝、大学に集合した後、バスで江差にあるフェリーターミナルへと向かった。江差港に今回初めて訪れたが、お盆の帰省時期のためか人が多く、奥尻島へ向かうフェリーにも乗客が多く乗船していた。江差港から約2時間程度で奥尻島に到着した。港では多くの迎えの車や人々にぎわい、奥尻町のマスコットキャラクターであるうにまるくんがお出迎えしてくれていた。その光景に奥尻島へ来たことの実感を抱いたことを今でも鮮明に覚えている。そこで稲垣森太さんと合流し、まず奥尻海洋研修センターへ向かった。

海洋センターでは奥尻島の紹介や稲垣さんの仕事についてのお話などを聞き、研修に参加したメンバーの自己紹介を行った。海洋センター内をじっくり見て回れなかったが、図書室や多目的ホールなどを利用することができ、町民の生涯学習の場として整備されているとのことだった。



次に、北の岬さくらばなで昼食をとった。そこで前回の研修の様子や奥尻島の最近の出来事などを稲垣さんから聞き、奥尻島の様子を理解することができた。

写真2 うにまるくんとフェリー

その後、賽の河原へ向かった。賽の河原は奥尻島の最北端に位置し、広い岬一帯が大小無数の石塔で埋め尽くされ、海難犠牲者や幼少死亡者、身内の故人の冥福を祈る慰霊の地である。1993年7月12日に起こった北海道南西沖地震の慰霊碑も建てられており、災害による爪痕が現在も残っているということを痛感した。また、毎年6月に開催される奥尻三大祭りのひとつである「賽の河原祭り」の会場にもなっており、住民にとって重要な場所であることがうかがえる<sup>1)</sup>。



写真2 賽の河原にある慰霊



写真3 稲穂ふれあいセンター内の様子

それから稲垣さんが働く稲穂ふれあいセンターへ移動した。ふれあいセンターは稲穂小学校の跡地を使用しており、展示物はどれもガラスケースなどに入っておらず、来館者の積極的なふれあいが重視されていた。ハンズ・オン展示にすることで来館者により身近に感じてもらうことができ、視覚だけでなく触覚によって展示物を感じることができる。ふれあいセンターには地元の小学生が「昔の道具調べ」という名目で来館し、様々な展示物を実際に触って体験することもある。私は展示物や展示方法などを通して、この施設が地域住民に寄り添った場所であると感じた。遠方からの来館者もいるが、主軸は地域住民であることを念頭に構成されている。一通り稲垣さんの説明を聞いた後、新聞を切り抜く作業に取り組んだ。稲垣さんは自分の興味のある新聞記事を切り抜き、ジャンル分けして保存しているようで、そのお手伝いをした。新聞は事前に用意されており、切り抜く箇所も指定されていたため、その部分を切り抜いてジャンル分けするというのが主な作業内容であった。この作業は一見単純に思えるが、実は興味深いということを実感した。ある特定のジャンルの記事を時系列順にまとめておくと、いつにどのような出来事があったかを一目で理解できるうえ、どのような流れで変化したのかがわかるのである。また、同じ内容の記事だとしても新聞社が異なると書き方も変わり、捉え方が異なっていた。新聞の切り抜きを通して、同じ事柄においても様々な見解を知ることができ、自分の考えをさらに深めることができると感じた。

### 3. 研修2日目

2日目の朝、奥尻島の北西に位置する宮津弁天宮の清掃を行った。宮津弁天宮は急斜面がある高台の上に社があり、急な階段の上り下りが必要不可欠である<sup>ii</sup>。清掃内容として、その階段周りや社周りの草むしりを行った。急な階段であることから参拝者が草で滑らないように、階段へはみ出た草を刈り取った。清掃の途中に北海道マラソンに出場した宮津出身の男性の方が声を掛けてくださった。宮津弁天宮は修理費用のため、2024年4月から同年6月までクラウドファンディングを実施していたというお話を伺った。結果クラウドファンディングによって約330万の支援金が寄せられた<sup>iii</sup>。しかし、その男性はクラウドファンディングを実施して資金が集まっても人手不足のため、修理になかなか着手できないとおっしゃっていた。奥尻町の人口は2024年11月29日現在、男性1,140人、女性1,026人の計2,166人となっている。<sup>iv</sup>奥尻の文化財を守るためにも人手不足を迅速に解決する必要があると思われる。



写真4 宮津弁天



写真5 社の損傷部分

宮津弁天宮の清掃を終えた後、宮津地区にお住まいの三上十四三さんにお話しを伺った。幼少期の宮津の様子や宮津弁天宮で行われていた祭りのことなど興味深いお話を聞くことができた。現在の宮津の様子とお話で聞く昔の宮津の様子を比べると大幅に変化しており、人口減少の理由など詳しい情報を知りたいと感じた。また、お話を聞くうえで事前知識を身に付けておくことで理解がより深めることができたと感じることもあった。したがって、次回このような機会があれば事前に知識を身につけておきたいと反省した。そして、昔の話を聞くことということは語り手が自分の記憶を遡りながら語ることになる。それによって話が錯綜しがちになってしまうため、聞き手の認識能力がいつも以上に必要になると感じた。語り手も記憶が曖昧な部分があるため、聞き手の調査が求められる。

宮津の話聞いた後は夕食の買い出しに行き、聞いた宮津の話を研修生で整理しまとめる作業を行った。まとめ作業を行うことで自分が聞き取れなかった部分を補うことができ

たり、曖昧なところを正確なものにすることができたりする。さらにそれらをブラッシュアップし、奥尻の地図に付箋を貼り、記憶地図を制作した。

この日の夕食は私が広島県出身であったため、広島のお好み焼きを研修メンバー人数分作った。研修の現状や奥尻のこと、大学の学びなどメンバーで様々な話をし、交流を深めることができた。

#### 4. 研修3日目

3日目の朝は奥尻島津波館に訪れた。津波館の職員の方にガイドを依頼し、1993（平成5）年に発生した北海道南西沖地震について説明を受けた。私は北海道南西沖地震についてほとんど知っておらず、今回の研修で詳しい情報を知ることになった。なぜ奥尻島が甚大な被害を受けたのかという点について、奥尻島の地形など地理的な要因に言及されており、奥尻島をよく知らない人も理解しやすい内容であったと感じた。1983（昭和58）年に発生した日本海中部地震の際にも奥尻は津波の影響を受けていたため、南西沖地震でも津波が来ることを多くの人が予測していた。しかし、津波が到達する時間が非常に早く対策することができなかったという。北海道南西沖地震を受けて、様々な対策が講じられることとなった。例えば、高台への住宅の移動、避難路の確保、津波の被害を少なくさせるための高床式の建築方法への変更などが実際に行われた。展示方法は当時の写真と説明が中心となっており、人形で当時の様子を作ったものも展示されていた。職員の方の解説を聞いた方がより詳しくことができるが、来館者自身でも理解できるように奥尻島の成り立ちや歴史の展示が工夫されていた。

実際に避難路がどのように設置されているのかを確認したところ、長いスロープで手すりが付いており高台へと繋がっていた。途中階段が数か所スロープへと繋がっており、高台への避難路はいくつか確保されているように見えた。しかし、坂が急であることやスロープ前に階段が数段あること、雨漏りしていることなど問題点が残っている。



写真6 避難路内部の様子

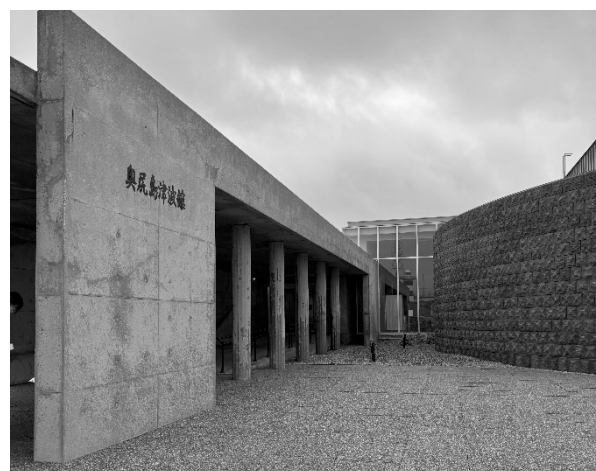


写真7 奥尻島津波

午後から宮津出身の山下孝一さんに宮津での暮らしや北海道南西沖地震についてのお話を中心にお話を伺った。山下さんは2日目にお話しを伺った三上さんと同年代であり、同じ地域で暮らしていたが、所々異なるエピソードがあった。三上さんのお話で不明であった部分を聞くことができたため、詳細に当時の宮津の様子を知ることができた。しかし、今回2人のお話しか聞けなかったため、より正確な情報にするには多くの方々に話を聞く必要があると思われる。

## 5. 研修4日目

朝の9時頃から青苗地区において福島大学の方々と発掘調査を行った。KOD層と呼ばれる火山灰の層が非常に重要であり、当日はこの層を出すことを目標に取り組んだ。私にとってこれが初めての発掘調査であり、非常に勉強になることが多かった。発掘調査は思った以上に繊細な作業であった。作業をするうえで「壁」が重要になり、この「壁」を壊さないように常に足元に気をつけておかなければならなかった。壁を掘り進めていく人、土を運ぶ人など役割を決めてメンバーと連携することが重要で、時間も限られているため効率的に作業を進めることが求められた。調査を進める上で、表面に出ている層がどのように成り立っているのか、KOD層がどこにあるのかなど層の構造を理解しておく必要もあった。



写真8 発掘調査の様子



写真9 調査終了後の現場の様子

その日の夕食は福島大学の方々と一緒に食べて交流を深めることができた。現在の研究テーマや大学の様子などの話は北海道とは異なる点が興味深く感じ、多くの学びを得るとともに楽しい時間を過ごすことができた。

## 6. おわりに

今回の奥尻島研修は多くの学びを得ることのできたものだったと感じた。私は今回初めて奥尻島を訪れたため、奥尻島での文化や歴史は新たな発見であり、強く印象に残った。学芸員である稲垣さんのお話を多く聞いたことで、学芸員とは何かを考える機会が多く、自分の考えを深めることができた。さらに、以前より参加したかった発掘調査にも今回参加させていただいたことで、考古学について、また奥尻島について関心を高められた。奥尻島の方々、福島大学の方々などと話し、交流することで自分の中にはない新たな視点を持つことができたと感じる。

最後になりますが、このような機会をくださった稲垣森太さん、福島大学教授菊地芳朗先生をはじめとする福島大学の皆様、ご協力くださった三上さん、山下さんなどの奥尻島の方々、学生を引率してくださった手塚先生に深く感謝申し上げます。

---

### 注

<sup>i</sup> 賽の河原・稲穂岬 | 北海道奥尻町

<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00001039.html> (2024年12月26日閲覧)

<sup>ii</sup> 宮津弁天宮 | 北海道奥尻町

<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00001040.html> (2024年12月27日閲覧)

<sup>iii</sup> 宮津弁天宮のクラウドファンディングーCAMPFIRE (キャンプファイヤー)

<https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/575656> (2024年12月27日閲覧)

<sup>iv</sup> 北海道奥尻町

<https://www.town.okushiri.lg.jp/> (2024年12月27日閲覧)

# 奥尻島の記憶と自然からの学び

工学部生命工学科 2年 楠本 玲来

## 1. はじめに

私は 2024 年 8 月 11 日から 8 月 15 日までの 5 日間、奥尻島で実施された学外研修に参加した。この研修は、私にとって 2 回目の参加となる。前回の研修では、お祭りの調査や資料の整理を経験したが、今回は宮津弁天宮周辺の清掃作業や記憶地図の作成をした。5 日間の活動内容は以下の通りである。

- ・ 1 日目: 稲穂ふれあい研修センターでの実習
- ・ 2 日目: 宮津弁天宮周辺の清掃作業と宮津地区記憶地図作成のための聞き取り調査
- ・ 3 日目: 奥尻島津波館と宮津地区記憶地図作成のための聞き取り調査
- ・ 4 日目: 町民センターで記憶地図の整理
- ・ 5 日目: 帰宅のための移動

今回の研修で学んだことについて、以下で詳しく述べていく。

## 2. 骨を調べる

研修 1 日目は、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室にて学芸員の稲垣さんの指導のもと、資料整理を行った。新聞切り抜き、土器の修復、骨を調べる（同定）、青苗遺跡発掘調査の準備があった。私は骨を調べる作業を行なった。

稲垣さんからは、おそらく鳥の骨であるとのことだった。『青苗貝塚における骨角器と動物遺体～青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告～』を読み、インターネット検索などを使いどの動物でどこの骨なのか調べるようにと説明を受けた。遺跡から出てきた骨が何の動物の骨かを特定する作業を「同定作業」という。骨の同定作業<sup>1)</sup>は、奥尻島に生息していた動物が分かるとともに、動物の利用状況や当時の人々の生活の一端を知ることができる。

今回、同定作業を行った骨は 3 つである。「写真: 同定作業で扱った骨」のように、骨は必ずしも完全な状態で出土するわけではない。この実習では、ただ 1 本の骨を観察してどの動物のどこの骨なのか考えた。

骨の長さは約 11cm であった。報告書とネット検索からウミウの上腕骨（右）、尺骨、橈骨であると考えた<sup>2)</sup>。

まず、上腕骨と判断した理由は、骨の端が平たい形とグーのような形（拳を握った時のような形）であったためである。次に、尺骨と判断した理由は、一方が細くもう一方が太い（だんだん太くなっている）ためである。最後に、橈骨と判断した理由は、他の骨に比べて細く長いためである。

同定のための知識がないので合っているか分からないが、調べる作業は楽しかった。今回の経験を通じて、同定作業における観察力や資料の重要性を学んだ。同時に、より正確な判断をするためには、専門的な知識や実物の骨を直接見る経験が必要だと感じた。資料保存や考古学的な分析に興味を持った。この研修で得た学びを、今後の学習に活かしていきたい。



写真1 同定作業で扱った骨



写真2 ウミウの上腕骨、尺骨、橈骨と推定

### 3. 宮津地区記憶地図の作成

研修2日目は、宮津弁天宮周辺のゴミ拾いや草むしりを行なった。宮津弁天宮とは、江戸時代末の天保2(1831)年に島民が大漁祈願のためお社を建てたのがはじまりである<sup>3)</sup>。奥尻島の文化財として、また、観光名所として、長年親しまれてきたが、近年では建物の老朽化が進み、保存や修復の必要性が高まっている。清掃作業中、ジョギングしていた方がお参りに来ていた。その男性は宮津出身だと言っていた。クラウドファンディング<sup>1)</sup>のことや修理してくれる人がいるのか、現在の宮津弁天宮の保存状況と今後について心配していた。また、宮津地区で行なわれていたお祭りのことを知っているようだった。清掃終了後、宮津地区記憶地図の作成のため、聞き取り調査に向かった。

研修2日目と3日目に行った聞き取り調査では、宮津地区の住民に、過去のお祭りの様子や地域の変遷、宮津弁天宮にまつわる思い出について伺った。

研修2日目では、漁師をしていたという73歳の男性から海やお祭りのことを中心に聞き取り調査を行った。聞き取り調査の内容は以下の通りである。

#### ◆ 漁業に関する話

宮津地区では漁業が盛んであり、イカやホッケ、ウニ、タコ、昆布などが主に取れていた。海にはイカが豊富であったという。沖から50メートルほどで簡単に獲れるほどであったそうだ。ホッケは肥料や魚粉に加工していたという。

#### ◆ 学校や子供の生活

子供たちは学校の前後に家業を手伝う生活をしていた。朝早くから藁を編んでイカを干す仕事をしてから学校に行っていたそうだ。大漁の日には学校を休んで仕事をしていたという。また、小学校では1～3年生が一緒に教室で学ぶなど、地域ならではの教育風景も見られた。

野球をしていた男性は、漁に出るのを嫌い、野球練習を口実に仕事に行かなかったことがあると語っていた。

◆ 宮津地区のお祭り

宮津地区では、盛大な祭りが行われ、神輿を転がして祝儀を受け取る風習があった。祭りの担ぎ手は肩が剥けるほど荒々しく神輿を担ぎ、夜は提灯の明かりの中、神を納めるまで続けられたという。夜通し続く熱気あふれる行事だったようだ。昭和 45 年に神社が改装されたが、平成に入り、この祭りは終了しているとのことだった。

聞き取り調査からは、昭和初期の宮津地区では、消防団や青年団が活発で、公民館では演劇や映画上映が行われるなど、地域の交流が盛んであったことがわかった。一方で、震災や産業構造の変化とともに、漁業やお祭りなど、昔ながらの風景が少しずつ失われていった様子うかがえた。

清掃作業や聞き取り調査を通じて、宮津地区が地域住民にとっていかに重要な存在であるかを実感した。また、保存活動への関心の高まりを感じ、地域の歴史を守る活動の意義を再確認した。そして、地域の歴史や文化を次世代に伝えるためには、記録や保存活動を継続していくことが不可欠だと学んだ。



写真3 宮津弁天宮の状況

#### 4. 奥尻島津波館と宮津地区記憶地図の作成

研修3日目は、まず、奥尻島津波館を見学した。この見学は2回目であり、去年は遺跡について学んだが、今年は震災に焦点を当てた内容を学ぶことができた。特に、1993年に発生した北海道南西沖地震について、ガイドの方から詳しい説明を受けた。当時の被害状況や復興の歩みについての展示を通して、自然災害がどれほどの影響を与えたのかを学ぶ

ことができた。

その後、研修3日目の聞き取り調査では、69歳の男性から話を伺った。震災時の地域の様子や宮津地区の祭りについて詳しく語っていただいた。その中で、津波館で学んだ震災の出来事が、聞き取り調査を通じてより具体的な地域の記憶として結びついた。奥尻消防署に勤めていた時の話が、津波館で得た知識を補完するような形で語られた。津波館での学びが現地の人々の具体的な体験とリンクし、地域の歴史や文化を深く理解する貴重な機会となった。聞き取り調査の内容は以下の通りである。

#### ◆ 震災の経験

地震発生時は奥尻消防署で当直中であつたそうだ。「すごい揺れで動けなかった」と当時の様子を振り返られた。また、地震直後には津波が来ることを予感していたと語り、実際に海水が大きく引いた様子や無線での被害情報の伝達の様子を聞くことができた。男性は、洋々荘の救助専門だったという。青苗で火事だと無線があつたので、翌朝に救助の応援に行こうとしたが、鍋釣岩あたりの道路の真ん中に家があり行くことができなかつたそうだ。

#### ◆ 漁業や地域の暮らし

男性は現在、準漁師をしているとのことだつた。ウニ漁や一本釣りについて聞くことができた。特に、ウニ漁の期間の前にウニの稚魚をとって売っていたことや、磯船に乗り箱メガネを使って漁を行うといった具体的なエピソードが記憶に残つた。また、ホッケ漁やイカ漁の季節ごとの特徴や方法についても詳しく説明をいただき、地域の海産物の豊かさと工夫を知ることができた。

#### ◆ 宮津地区のお祭り

宮津地区で行われる祭りについては、神輿を担ぐ伝統や地区の結束力が強調された。男性も7年間神輿を担いでおり、「宮津の魅力は団結力である」と語るその姿から、地域の人々が祭りを通じて築く絆の深さが伝わつた。

また、聞き取り調査から野球や陸上を通じた島内の交流についても話が広がつた。同級生であるプロ野球選手・佐藤義則さんとのエピソードも印象的で、野球が島民の大きな楽しみの一つであつたことがうかがえた。

この聞き取り調査を通じて、特に印象に残つたのは北海道南西沖地震のエピソードだ。昨年、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室での資料整理では、北海道南西沖地震の写真整理を行った。その経験を踏まえ、今回の聞き取り調査によってさらに震災について深く学ぶことができたと感じている。このように、過去の研修と今回の調査がつながることで、地域の歴史や人々の記憶をより立体的に理解する貴重な経験となつた。

## 5. 研修4日目の活動まとめ

研修4日目は、町民センターで記憶地図の整理・まとめを行った。その後、佐藤義則野球展示室を見学した。また、「復興の森」を散策し、最後にウミウの観察を実施した。

復興の森では、散策路を進む中で雨と濃霧に見舞われ、途中で断念することになった。道の整備が十分ではなく、散策には適切な装備が必要であると感じた。

佐藤義則野球展示室では、研修3日目にお話を伺つた男性の話と一致する新聞記事を発見した。海で遊ぶ様子や磯船に乗る写真が展示され、地域の文化と歴史を再確認できた。

ウミウの観察では、真っ黒な個体が多く見られ、ヒメウの可能性が高いと推測される。また、カモメやカラスとの共生や棲み分けの様子も観察した。

この日の活動を通じて、地域の自然や文化にさらに触れることができた。佐藤義則野球展示室での新聞記事は、地域の生活や過去の姿を具体的に感じられるものであり、記憶地図と結びつけて考えるきっかけとなった。



写真4 記憶地図

## 6. おわりに

今回の研修では、地域の歴史や人々の記憶に触れることで、記録することの意義を深く実感する貴重な経験となった。これまでの研修で得た経験や知識が今回の活動を通じてより鮮明に感じられ、奥尻島の新たな一面を知ることができた。地域の方々の協力や、自然や文化に触れる機会に恵まれたことに感謝しつつ、これからも記録と伝承の大切さを胸に、学びを活かしていきたいと思う。

最後になりましたが、5日間の研修を通してお世話になった奥尻町教育委員会事務局学芸員の稲垣森太さん、学生を引率下さった手塚先生、ご助言くださった小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さん、第10回奥尻研修メンバーに深く感謝を申し上げます。

### 注

1) 奥尻島の文化財である、宮津弁天宮の修理のため2024年4月11日からクラウドファンディングを募集していた。2024年6月29日に募集を終了している。<https://camp-fire.jp/projects/753963/view>

2) <https://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/info2/list.files/2012.2.Vol.18-1.pdf>

3) 奥尻島の文化財である、宮津弁天宮の修理のため2024年4月11日からクラウドファンディングを募集していた。2024年6月29日に募集を終了している。<https://camp-fire.jp/projects/753963/view>

# 奥尻島での研修を通して

工学部生命工学科 1年 藤林 ひかる

## 1. はじめに

私は、2024年8月11日から8月15日の奥尻島研修に参加した。初めて体験したフィールドワークはとても貴重な体験だった。私の参加した目的は北海道であまり見られない植物を現地で観察するためである。しかしながら結論から言うと、季節や天気の問題があり観察できた植物は少なかった。その代わりに虫が多い季節であり様々な種類の虫がいた。札幌の虫と比べて島の虫はサイズ感が違っていて新たに虫に興味を持つことができた。もちろん、この研修で虫のことだけでなく奥尻島の歴史の奥深さを感じることもできた。

本書では奥尻島研修で感じたことを、奥尻島の博物館や資料館、地震対策、記憶地図、自然の順に説明する。

## 2. 奥尻島の博物館と津波館

稲穂ふれあい研修センターと奥尻島津波館を見学した。

稲穂ふれあい研修センターは、もともとは稲穂小学校だった建物を博物館として使用している。したがって、各部屋の入口の上に当時の教室名がそのまま残されていたり、学校特有の水飲み場が存在していたりするという点で、小学校に通っていたことを懐かしく思い面白く感じた（写真1）。

展示にあたっては、資金が少ないという事から1つ1つの資料をガラスケースに入れて展示することは難しいという現状がある。しかし、それを逆手にとって来館者に資料を壊さない限り積極的に触れてもらうことを大切にしているという点で素晴らしいと思った。これにより、学芸員の大切なことはこの柔軟性だと再認識できた。

ここで土器の接合の作業を行った（写真2）。感想としては、接着剤がある程度乾くまで固定するのが大変だったが難しいとは思わなかった。なぜなら、この研修センターの学芸員である稲垣森太さんが事前に土器の破片を接合する順番に並べていたからである。具体的には、新聞紙の上に土器の様子が合うように並べられていた。もし、稲垣さんの作業の過程がなかったら、私はこの作業にかなりの時間がかかったと思う。



写真1 教室名がついている入口

奥尻島津波館は、大被害をもたらした北海道南西沖地震を風化させないために 2001 年に開館した資料館である（写真 3）。最初に説明員の説明を聞きながら館内のホールにある資料を見て、その後自分で館内を周った。説明員の説明は奥尻の地震について詳しく知らない私のような素人も理解できるようになっており、興味を持って資料を見ることができた。

また、説明員が北海道南西沖地震の経験者であり資料にはない経験者としての感想等を聞くことができるとも勉強になった。展示は写真や映像、模型等の多様な方法を用いていた。崩壊した建物等の被害の大きさがよくわかる写真が何枚か壁に貼っており、写真と写真の間には当時の小学生が書いた南西沖地震に関する作文が貼ってあった。子どもが書く作文を読んで地震に対して感じたことは大人の文章とは違ったインパクトがあり、とても心に染みた。写真と作文の 2 つを効果的に使用していると感じた。



写真 2 接合した土器

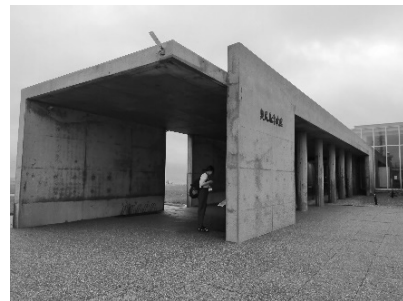


写真 3 奥尻島津波館

### 3. 地震対策

奥尻島は「2. 奥尻の博物館や津波館」で述べたように過去の北海道南西沖地震の教訓から津波対策が行われている。

私が見た津波対策は、避難路とシェルターの階段である。

避難路は奥尻島に 3 つあり、歩道として存在している（写真 4）。

案内してもらい、避難路を歩いてみると見た目よりも坂が急で驚いた。その後に坂の一番下が海拔 9 m で、上まで登り切ったところで海拔 21.6 m だと知り、坂が急なことに納得した。また、避難路の中に途中からでも入れるように戸がついていたり、積雪の心配がないドーム型であったり、スロープがついていたりと色々と考えられた避難路だと思った。

シェルターの階段は、上部が屋根で覆われているため、雪や雨でも安全に非難することができる（写真 5）。これも実際に入ったところ、海岸から早く高い所に避難できることを実感できた。



写真4 避難路



写真5 シェルターの階段

#### 4. 記憶地図

「1. はじめに」でも述べたが、私は今回初めてフィールドワークというものを体験した。具体的には現地の人から奥尻の歴史を聞き取り調査した。現地に在住している方々からお話を聞いたため奥尻での暮らしがよく分かった。主な内容は、当時の建物の位置や漁業（ウニ、イカ）、学校、お祭り、災害についてである。中でも漁業の話は私が漁師について勉強不足なことから、漁師の組合に関する事など1つ1つ用語を説明してもらわないとその場で内容を理解することができなかった。漁業組合の組織の仕組みや、漁業の仕方の種類を知っておく必要があると思った。他の内容でも知らない言葉が沢山あったので、事前に調べておくことの大切さを感じた。また、1人1人から得られる情報の多さに驚いた。

今回聞き取り調査に協力してくれた方は男性のみであり、女性からの目線での話も聞いてみたかったと思った。

フィールドワークしたことはフィールドノートにメモし、その後に情報のすり合わせを行い、研修の最終日に地図に付箋を貼って記憶地図にまとめた。

#### 5. 自然

北海道ではあまり見られない植物を奥尻で観察することが目的だったが、季節や天候の理由からあまり見つけることができなかった。唯一、鍋釣岩に生えているヒロハノヘビノボラズを見つけたことができた（写真6）。この植物の名前は棘がありヘビが登れないことから由来しているとのこと。

7～8月はエゾニワトコやクルマユリ、オニユリ等が奥尻では観察できると知り、研修の4日目に「復興の森」に連れて行っていただいた（写真7）。



写真6 鍋鶴岩



写真7 復興の森

その日は、かなりの濃霧でフェリーが欠航していたため私が行った森も霧で白く曇っていて雰囲気少し怖かった。結局そこでも北海道では珍しい草花を見つけることはできなかったが、キノコを沢山見つけることができた（写真8）。

雰囲気が怖かったとしてもきのこや苔にとって霧は最高の環境だということを感じた。

探していた草花がなかった代わりに多種類の虫がいた。それに加えて、札幌の虫と比べてサイズ感が違っていた。例えば、アブは奥尻ではスズメバチと間違えるほどの大きさだった。クモやゲジゲジも普段見かける何倍もの大きさだった（写真9）これには、奥尻島の豊かな自然が関係していると考えた。このことについては、詳しく調べたいと思った。



写真8 復興の森のキノコ



写真9 巨大なクモ

## 6. おわりに

今回の研修は貴重な体験が多く、学芸員について詳しく学ぶ良い機会になった。特にフィールドワークでは自分が知らない話題になると聞こえた単語をノートにメモするだけの作業になってしまうため、なるべくその場で理解できるようにするためにも予備知識の大切さを感じた。

今回学んだことをこれからの学芸員の勉強に活かしていきたい。

最後になりますが、土器の接合等でお世話になりました奥尻町教育委員会事務局学芸員の稲垣さん、引率して下さった手塚先生、助言をいただいた小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さん、研修メンバーの方々に深く感謝いたします。

# 奥尻研修を終えて

人文学部日本文化学科1年 山木 敬太

## 1. はじめに

筆者は令和6年8月11日から15日にかけて行われた奥尻島研修に参加した。本稿では奥尻島研修で行なったこと、学んだことを紹介する。奥尻島研修参加のきっかけになったのは、博物館実習の授業の終わりに夏休みに発掘ができるところはないかと聞いたことだった。帰りの地下鉄のホームで手塚先生と初めてお会いした。自己紹介をし、「アレルギーはないか、虫は苦手か」という質問に答える。どちらの質問にもいいえと答えると私の奥尻研修が決まった。些細な質問から奥尻島研修に参加することができた。勇気を出して質問をして良かった。

## 2. 1日目 奥尻島にいざ上陸（8月11日）

未だ薄暗い朝4時に集合し、バスに乗り込んだ。地下鉄やJRは運行されていない時間帯であるため、筆者は友人の家に前泊をした。お礼に食事を奢ったが、近隣のホテルに泊まればお釣りが来る程の会計となった。知らない間に寝入ってしまい、気づくと落部だった。朝早くから長時間運転してくださった運転手さんには感謝だ。セイコーマートで休憩を挟み、江差港に8時50分に到着した。江差港からは開陽丸が見え、フェリーターミナルは帰省客で賑わっていた。奥尻島に向かうフェリーは9時40分発、切符の購入や、観光パンフレットを見て時間を潰した。切符は学割往復で購入した。学生証を忘れないようにするのが肝心だ。普段はフェリーがターミナルに横付けするのだが、工事で少し離れた先に停泊していた。そこまでバスで移動し、フェリーに乗り込んだ。席取りに意気込み、乗り込んだが、無謀な闘いだった。帰省客は、場所取りや船内の暮らしに慣れている。カップ麺を持ってきたり、ブランケットを持ってきたりと参考になった。出航してからは、殆どの時間をデッキで過ごした。椅子に座り海を眺め、これからの研修に胸を躍らせた。気づいた頃には寝入ってしまい、目を覚ますと奥尻島が見えた。背中に見えた北海道は既に見えなくなり、少しの寂しさを感じた。奥尻港に到着し、奥尻町教育委員会事務局・学芸員の稲垣森太さんと初めてお会いした。奥尻島のせんべいをいただいたので、割れる前に食べた。甘く美味



写真1 奥尻島が見えて嬉しい時の写真  
(2024年8月11日11時29分筆者撮影)

しいせんべいだった。顔合わせが終わったところで、一年前から予約したというレンタカーに乗車した。筆者は一人飛び出したので、稲垣さんの車に乗せていただいた。稲垣さんの車では、リンキンパークが流れていた。洋楽をお聞きになるのだなと思い、たどり着いたのは奥尻港からほど近い奥尻町海洋研修センターだった。施設に入ると、非常に大きいアプが出迎えてくれた。入り口近くにある机に貼られたソーシャルディスタンスの張り紙が、過ぎ去った年月の長さを感じさせる。この施設には奥尻町教育委員会、図書館や多目的ホールがあった。奥尻島では夏に成人式を実施する。冬はフェリーが欠航することが多いから親戚が集まれる夏に実施するそうだ。本の入った段ボールを置き、奥尻海洋研修センターを後にする。次に向かった先は奥尻島の最北にあるレストラン北の岬 さくらばな。稲垣さんと店員さんは親しげにお話をされていた。空いた机をくっつけて、椅子に腰を下ろす。メニューに目を通し、海鮮チャーハンなるものに狙いを定める。中村先輩は「大分、値段上がったな」と言う。値段はその時の収穫量にもよるそうだ。海鮮チャーハンという名前にそそのかされ、てっきり海鮮たっぷりのチャーハンをいただけると思っていた筆者は衝撃を受ける。小さなエビが三つ入っていたのみであったからだ。だが、エビが入っているだけでも筆者は嬉しい。次はホヤを食べてみたい。お腹いっぱいになった後は賽の河原を訪れた。打ちつける波と吹き付ける風は夏とはいえ、肌寒さを感じた。人為的に積まれた石、漂着物がより一層それを引き立てた。海を眺めると北海道本土が見えた。次は稲穂ふれあい研修センターにある歴史民俗資料展示室を見学した。廃校を利用した施設で、学校で実際に使われていたものが数多くあった。また、体育館を資料置き場にしたり、教室を展示室にしたり、教室の黒板を利用して解説をしていた。奥尻島の歴史を詳しく知ることができる場所だった。基本が全て触っても良いという稲垣さんの言葉には驚いた。その言葉に甘え、消防用の手回しサイレンを実際に使わせてもらった。長年やってみたかったものであったため嬉しかった。一通り展示をみた後は学芸員の仕事の体験をした。新聞記事の切り抜き、土器の破片を接着する、動物の骨の特定、後日の発掘の道具の準備と土器に生えたカビをとる作業だった。筆者は最後の二つの仕事をした。エンビ（スコップ）を体育館から運び出し、グラインダーで先端を削る。エンビの先端は錆びが進行していたため、地面に刺さりやすいように実施した。その後は土器のカビ取りを行なった。海を眺めながら地味な作業をする、贅沢な時間を過ごした。一見地味な作業が筆者は好きだ。17時になると作業を終え、双葉寿しに行く。てっきり自炊だと思っていた筆者はお寿司が食べられると知り、頬が緩んだのであった。イカが透明でとっても新鮮だった。お醤油を入れるお皿が印象に残った（写真2）。



写真2 双葉寿しのお醤油入れ  
(2024年8月11日18時2分筆者撮影)

### 3. 2日目 宮津地区を知る (8月12日)

二日目は宮津弁天宮（写真5）を訪れた。現在（写真3）と宮津弁天宮に設置されているパネルにある写真（写真4）の比較が興味深い。砂浜だった海岸はコンクリートが施され、写真3では新しく橋梁がかけられている。一番特徴的なのは建物の数である。橋梁付近の建物が大幅に減っているように見える。かろうじて両写真中央右側付近の山のハゲ方が同じだ。



**写真3 現在の宮津地区**  
(2024年8月12日9時21分筆者撮影)



**写真4 昭和40年頃の宮津地区、宮津弁天宮の解説パネルより撮影**  
(2024年8月12日9時21分筆者撮影)

宮津弁天宮は突き出た岬の上にある神社で、急な階段と赤色の本殿が特徴的だった。大きな岩に立つ神社は筆者の心をくすぐるものがあった。切り立った崖に立っている感じが石垣の上に建つ櫓のようにも見えた。道道沿いから見た景色は本殿の周りの植生が成長し、隠れてしまっているように思った。奥尻島にこのような場所があるとは知らなかった。筆者は宮津弁天宮でゴミ拾いと雑草抜きをした。ポイ捨てされたお菓子のゴミやペットボトルは少なかった。コンクリートの階段の間から顔を覗いている雑草を除去した。途中、地元の方や観光客の方が訪れていた。宮津弁天宮での作業を終え、一行は聞き取り調査をするべく三上十四三さんのお宅に向かった。宮津地区のこと、祭りのことなど多くの情報を得ることができた。聞き取り調査にご協力いただきありがとうございました。1日の活動を終え、奥尻地区で夕食の買い出しをした。商店で野菜、調味料を買い、精肉店で肉を買った。肉は肉屋、野菜は八百屋、それが当然だった時代には程遠い生活の筆者だが、少し前の時代を体験したような気がした。奥尻町町民センターに帰った後は聞き取り調査のまとめ、地図への書き込みをした。聞き取りをしたジャンルごとに色分けをして分かりやすい地図を目指した。夕食は先輩がお好み焼きを作ってくれた。お好み焼きへの情熱を感じる美味しさだった。



写真5 宮津弁天宮（2024年8月12日11時8分筆者撮影）

#### 4. 3日目 青苗地区へ（8月13日）

研修の折り返し、3日目は青苗地区へと足を伸ばした。最初は赤石地区の佐藤義則野球展示室に立ち寄ったが、惜しくも休館日であった。次は是非訪れたいと思う。3日目の天気は前日の晴れとは一変、曇り空が続く日であった。海沿いは薄く霧が立ち込め、海の見通しが悪く不気味だった。赤石地区から青苗地区に向かう道道沿いから何やら碑のようなものが海の岩礁に立っていた。あれはなんなのだろうか。助手席は後部座席よりも景色が見通せて楽しいものである。青苗地区に入り、避難路を見学した。屋根付きの避難路であった。雨や雪が凌げるといった利点があるが、夏に訪れたこともあり、少し蒸し暑かった。避難路の側面には扉がいくつかあり、他の避難路と接続していた。青苗地区の海沿いと高台の集落をつなぐように避難路ができていたため、小学生が通学で通ったりしているという。避難路は登っていくにつれ勾配が大きくなっている。そのこともあり、入口では8.6mであった海拔が高台に出た出口では21.6mになっていた。正直、走って避難するには苦勞する避難路である。しかし、少しの距離で高さを稼げるという意味では命を少しでも救える可能性があると思った。次は、奥尻島津波館を訪れた。開館時間は9時から17時、休館日は毎週月曜日、入館料は小・中・高生は170円、一般が520円となっていた（写真6）。入館料の区分けが少ないのと、小・中・高生と一般の入館料の差が大きいのが特徴だと思った。入館料を払う際に受付の方がガイドをしてくださることになり、お話を聞くことができた。まずは震災前、震災直後、復興後の青苗地区の写真の比較の説明をしていただいた。震災前は海

沿いに建物が建ち並んでいたが、復興後には高台に建物が増えている。これは震災により海沿いの建物が被災したため、高台に建物を建てたことからきている。その次は、1993年の震災の被害を記録した写真を解説していただいた。傾いた灯台や、電線にかかった海藻、電柱に巻き付いたトタン屋根など衝撃的な写真が並んでいた。その後は、ミニシアターで震災に関する映像を見た。1993年の津波がどのように奥尻を襲ったのかなど、わかりやすい映像であった。1883年にも津波があったことや、1993年の震災では、奥尻島には2回津波が来ていたという事実に驚いた。また、地震が起きてから2回目の津波が来るまでの時間が20分に満たないことが衝撃的な事実であった。説明員さんによる解説は映像を見て終了した。展示の解説は、学芸員の主要な仕事の一つであると感じた。展示の解説や来館者からの質問にも対応できる学芸員を目指したい。震災のこと以外にも奥尻島の縄文時代、擦文時代などの遺物や遺跡を学ぶことができた。今回は行くことができなかった青苗砂丘遺跡のことに関心が湧いた。津波館の展示は順路がしっかりと決められていた。縄文時代から現代までの模型を流れるように見学できる。奥尻島で出土した勾玉が一番良いところに置いてあった。美しい色と形だとしみじみ思った。奥尻島津波館の展示は震災当時を伝える写真やモニュメント、模型が中心だった。そのため震災で被災した道路看板や車、衣服など、実際に被災した資料が少ないように思えた。だが、全くないわけではないし、大事なのは数ではないとも思う。二次資料が一次資料になり得るとも言えるのだろうか。短い時間での見学であったが、非常に勉強になった。青苗岬には、奥尻島津波館以外に時空翔と徳洋記念碑がある。徳洋記念碑(写真7)は現在の岩田地崎建設が建設したもので、鉄筋RC造りである。1931年から建っているにもかかわらず、その頑丈な作りから二度の津波にも耐えた。次に昼食を取るべく、青苗地区にある食堂、潮騒に向かった。メニューが豊富で食べる前から楽しかった。筆者は

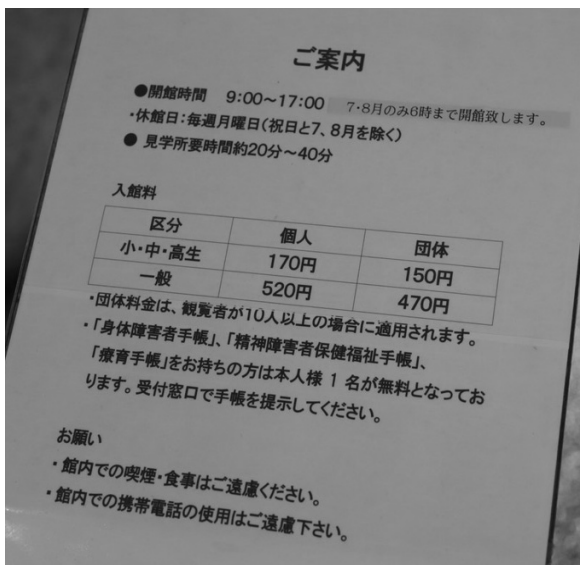


写真6 奥尻島津波館の案内パネル (2024年8月13日10時29分筆者撮影)

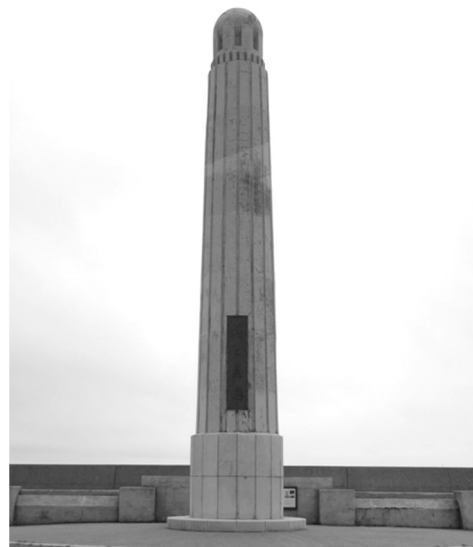


写真7 徳洋記念碑 (2024年8月13日11時50分筆者撮影)

チャーシューメンを食べた。他の方々はあんかけ焼きそばを食べていた。あんかけ焼きそばがあると知っていたら、あんかけ焼きそばにしていた。五つもあんかけ焼きそばの注文が来たら作るのは大変だろうと思った。あんを鍋で2食分と3食分で作る感じだろうか。メニューが豊富にある食堂は作り手の器用さが現れているのかもしれない。メニューにはウニ丼もあり、5,500円だった。実はウニが好きな渡邊君はみんながウニ丼を意外と頼まないのに謙遜していたという。次また来る機会があれば、あんかけ焼きそばを食べたい。お腹を満たした後は、人工地盤に行った。

津波が来た時の一時的な避難場になる場所であるという。港からは階段で上がれるようになっていた。階段を降りると人工地盤の下は雨風が防げるので漁業関係の物や車が駐車してあった。天井を見上げると丸が集まったような面白い形をしていた(写真8)。人工地盤を見学した後は青苗言代主神社を訪問した。宮津地区のストーリーマップを作成するための聞き取り調査をするためだ。今回聞き取り調査をさせていただいたのは宮津地区出身の山下孝一さんだ。宮津地区の地図を見ながら、昔は道道がこっち側を通っていたなど、地図を見るだけでは得ることのできない情報を得ることができた。また、山下さんは、1993年の震災時に消防士として活躍した方である。震災当時のお話も聞くことができた。自分が津波に巻き込まれる危険性があったのにも関わらず、消防車に乗り避難を呼びかけたという。山下さんは消防士を退職し、漁師をされている。奥尻島で獲れる水産資源や、奥尻島の漁業事情などを知ることができた。

筆者は途中、体調を崩し、途中退席してしまっただが、非常に良い経験をする事ができた。聞き取り調査をした後、福島大学の一行が奥尻島に上陸したという一報が飛び込んできた。青苗の発掘現場にいるという。いきなりのことで長靴も服装の準備もできていなかったため、スニーカーでのお手伝いとなった。せっかくお手伝いさせていただけるのにスニーカーというのは申し訳ないと思った。いつでも参加できるよう長靴を携行しておくべきだったと反省した。まずは、土嚢を作る班とブルーシートを除去する作業に別れた。筆者は土嚢を作る班に配属された。袋に半分くらいの土を箕(み)を使用して入れ、ひもで縛る。発掘現場では掘った場所を崩さないことが重要で頻繁に通行する段差などは崩さないよう土嚢を使って階段を作る。これから長い期間発掘をするにあたって通路の整備は重要だということを感じた。



**写真8 人工地盤の下 (2024年8月13日12時46分筆者撮影)**

#### **5. 4日目 念願の発掘 (8月14日)**

4日目は発掘調査を体験した。朝8時頃に奥尻町町民センターを出発した。あいにくの雨で海

と道路は見通しが悪かった。青苗地区に向かう道道は幅員の狭い箇所があり、車とすれ違う瞬間は緊張した。現地に住んでいる方々は生活に使用する道路ということから慣れている。目立った減速をしないので尚更緊張するのである。

発掘現場に到着するとまず、発掘に使用する道具を出し、前日に設置したブルーシートを剥がした。発掘に使用する道具はジョレン、エンピ（スコップ）、箕（掘った不要な土を乗せて運ぶもの）、ねこ（土を乗せて運ぶ車輪がついたもの）など多くある。最初に福島大学の菊池先生から指示があった。まずは二つの区域に分かれるということとそれぞれどう作業を進めていくかということだ。私は海側の区域の担当になった。昨年に行った発掘調査で掘り進めたところまでジョレンと箕を使用して不要な土を除去した。菊池先生からは発掘は掃除



**写真9 Ko-d、上から二つ目の層（2024年8月14日12時35分筆者撮影）**

に近いということ、一度綺麗にしたところは極力足跡をつけない、地層の重なりが見える側面は綺麗に削ること、焦らずに掘りすぎないようにすることなど多くのことを学んだ。雨が降ってきたので、テントを建てた。テントを建てた後は発掘区域以外の環境を整備した。道具を綺麗に並べ、テントを立てる場所に生えている雑草や段差になっている土の盛り上がりを取り除いた。この作業は侮れないものだという。発掘調査は1ヶ月近く行うことがある。長丁場な発掘では環境整備しない影響がでてくるのだ。道具を置く場所や地面を平らにすることは大事なことだということも学んだ。道具を置く場所をある程度決めなくては道具が散乱し、すぐに使いたい道具を手に入れることができなくなる可能性がある。また、適当に置いた道具が発掘箇所へ落ち、出土物を傷つけてしまう可能性もある。防げるものは防ぐ、慎重な精神が求められる。だが、そんな精神を持ち続けるのは簡単ではないと感じた。発掘というものが重労働であり、この作業量を1ヶ月近く続けるのは非常に骨が折れる。雨が弱まり、海が綺麗に見えてきたところで昼食時間に入った。私は避難路を利用して潮騒に向かった。何を食べようか悩んだが、次食べようと思っていたあんかけ焼きそばは発掘調査ができた興奮で忘れてしまったようだ。カツカレーにしてしまった。次はあんかけ焼きそばを食べようと思う。帰路は避難路の急な坂を走った。本当に避難する時の体験を勝手にしたのである。息が上がり、疲れた。急なことはデメリットにはなりうるが、少しでも前に進むことで高さが稼げるのが逆にメリットにもなりうることも感じた。息を切らし発掘現場に戻る。しばらく一人の時間が続いた後、発掘の手伝いに来ていた高校生がやってきた。今年、大学受験を控えた奥尻町出身の高校3年生で、どの大学に行こうか迷っているという。頑張りたい。午後はKo-d（1640年の駒ヶ岳噴火時の火山灰の層、写真9）の層の上まで土を取り除くという作業だった。ただ単に土を掘るのではなく、何かが埋まっているかもしれないので慎重に

ジョレンで土を取り除く。取り除いた土を箕にのせて他の人に渡し、その作業を休憩毎に役割を変えて繰り返す。この頃には建てたテントが雨宿りのためというよりも陽避けのためになっていた。汗と土の匂い、少年野球をやっていた頃を思い出した。人生で初めての発掘体験はあっという間に終わってしまった。発掘に携わることができる機会がまたあれば良い。発掘が終わると道具の片付けと発掘箇所にビニールシートをかけた。福島大学の学生さんは画面の大きなアイパッドで発掘箇所を撮影していた。エンビや箕にこびりついた土は落としぶらかった。なるべく不要な土を捨てる場所で道具についた土を落とすようにとの指示もあった。発掘調査では道具への愛を持つことも重要な要素であることがわかった。また、遺物を傷つけないよう気を使い、地層の重なりを崩さないようになど、意外に神経を使うのだと知った。発掘調査を体験させていただいた福島大学の皆様本当にありがとうございました。



写真 10 発掘現場の様子 (2024 年 8 月 14 日 12 時 36 分筆者撮影)

## 6. おわりに

奥尻島で過ごした 5 日間は忘れられない経験になった。学芸員の実践的な仕事、改めて学芸員の仕事の多彩さ、そして楽しさを知ることができた。それに加え、人文学の一つである聞き取り調査、ストーリーマップを体験できた。また、筆者が長年夢見ていた発掘調査を体験することができた。研修を受け入れてくださった稲垣森太さん、参加させてくださった手塚薫先生、研修を紹介下さった小樽市総合博物館の石川直章館長と蟬塚咲衣さん、福島大学教授菊地芳朗先生と同大考古学研究室の皆様、行動を共にした学芸員課程の皆様、感謝申し上げます。

# 奥尻島研修を終えて

法学部 1 年 渡邊 大貴

## 1. はじめに

2024 年 8 月 11 日から 15 日までの日程で、北海学園大学人文学部の手塚薫教授と、同大学を卒業し、現在は小樽市総合博物館で勤務されている蟬塚咲衣学芸員と、同大学学芸員課程受講生 6 名（筆者含む）のメンバーで奥尻島研修に参加した。研修の目的は、島民の方々への聞き取り調査をもとにした「記憶地図」の作成と、神社や慰霊碑、博物館等の島内にある施設の見学である。研修には、本学学芸員課程の先輩であり、現在は奥尻島で学芸員をされている奥尻町教育委員会事務局勤務の稲垣森太さんによるレクチャーをいただきながら臨んだ。ここでは主に、島内の様子と聞き取り調査について述べていく。

## 2. 島内の様子

奥尻島には、北海道南西沖地震の歴史をつたえる場所がいくつもあった。1 日目に訪れた、奥尻島の最北端である稲穂岬に位置する「賽の河原公園」も、そのうちのひとつだ。敷地内には震災の犠牲者を弔う慰霊碑があり、稲垣さんによると、このような自然災害伝承碑が北海道に設置されたのは奥尻島が初とのことだった。近くには数体の地蔵があり、中には左半身だけ形の曖昧なものもあった。再び、稲垣さんによると、その地蔵は砂岩で作られているため、北西から吹く季節風によって削られてしまうとのことだった（写真 1）。

2 日目には宮津弁天宮を訪れ、ゴミ拾いや雑草抜きを行った。宮津弁天宮は島内最古の神社祭祀の場所として、また、景観地としての重要性から、奥尻町指定有形文化財に登録されている神社である。急勾配な階段（上りと下り合わせて 164 段）と、雑草の生い茂った境内での清掃は骨の折れる作業だった。菓子袋を拾い上げた際には、水が垂れてきて、中を覗くと黒い虫が蠢いており、釣り餌として使われるはずのものだったのかなと考えたのを覚えている。神社はかなり老朽化が進んでおり、回廊は床が抜け落ちていて歩くことが不可能だった（写真 2）。扉の横には「ご寄付のお願い」と書かれたポスターが貼られており、クラウドファンディングのサイトに飛べる QR コードが読み込める仕様になっていた。

3 日目には、震災後に作られた避難路を訪れた。私たちは、島内で唯一シェルターの付属している避難路を訪れた。そこは地面がスロープであるため車椅子でも移動可能であり、通路の両側には手すりを取り付けられていた。また、雪除けのための屋根も設置されていた。実際に避難路に入ってみると、入り口は海拔 8.6m だったのに対し、出口では海拔 21.6m であることが分かった。避難路への入り口は一つではなく、通路の途中にも扉が設置されており、様々な場所から避難が可能な構造となっていた（写真 3）。

島内で最も震災の歴史について学べるのは、避難路の後に訪れた「奥尻島津波館」だった。ガイドの方による解説をしていただきながら館内を周った。ガイドの方には、当時は青苗岬に80軒近くの住宅があったことや、地震のためにそれらのホームタンクや車による火災が発生したこと、島内には11台の消防車があったが、瓦礫で道路が塞がれたために、青苗に3台あるうちの2台（1台は津波のため出動不可）しか出動できなかったことなどを伺った。地震、津波、火災など、震災について体系的に学べる空間となっていた。

他の博物館的な施設と異なると思ったのは、館内に震災に関する写真や活字の資料、それらの解説だけでなく、作品が幾つもあるということである。震災で亡くなった人数に由来する「193のひかり」というモニュメント（写真4 四角い穴から日光がさして光るという仕組み）や、「振動」、「波・炎」、「生起」、「希望」という4つのオブジェクトがあった。「振動」、「波・炎」は災害時の島内の状況をイメージしており、「生起」、「希望」は復興がイメージされている。キャプションに製作者の名前は書かれていなかった。また、私が一番興味を持ったのは、時系列で並べられた災害時の写真の合間合間に、被災した小中学生の詩が展示されていた点である。詩という形で当事者の声を聞けるのは珍しいと思った。ここでは、その内の一つを挙げておく。

以下「一九九三年 北海道南西沖地震体験文集『災害を乗り越えて』より抜粋」

※実際のパネルは縦書きである

### 『じしん』

稲穂小学校四年 栃木 みゆき

七月一二日、じしんがありました。

私は、おふろに入っていました。

はだかで外にでました。

私はおふろでくもたいじを、していました。

私は、はじめくものおかえしかと思いました。

私は、じしんがくるなんて、

心の準備ができでいなかったの、

とつてもあわてていました。

だからわたしは、ころんで

だんだんこわくなってきて

うごけなくなりました。

「くものおかえし」という言葉が比喩的に作用しており（それが作者の意図したことかどうかは分からない）、「だんだん」という言葉によって、外での転倒を起点に地震への漠然とした不安が徐々に恐怖心に蝕まれていく様子が書かれている。また、「うごけなくなりました」

という表現からは、避難所へ走って向かう大人がいる中、ひとり地べたにうずくまる小さな姿を脳内に思い描き、悲しくなった。

### 3. 聞き取り調査

調査は2名の方に行った。2日目の三上 一四三（みかみ としみ）さんと、3日目の山下 孝一（やました こういち）さんだ。調査の上で「記憶地図」の作成を行うことが目的である。記憶地図を作成することで、記憶の可視化、共有、保存ができ、地理情報との関連性をフラットな視点で理解できる。面白いのは、他人の記憶という見えないものを取り出すため、聞き手によって情報量が左右される点である。今回は地図を広げたうえで、会話と質問のみによって聞き取りを行ったが、もっと効率的かつ詳細に記憶を取り出す方法は何だろうかと考えた。例えば、実際に聞き取りの対象の方が使用していた道具や、写真は記憶を引き出すトリガーとなりうるだろう。しかし、そもそも対象の方が聞き手に心を許していなければ、得られるものは少ない。その点、リーダーや蟬塚さんの姿勢は見習うべきだと感じた。視線や相槌を意識し、引っかけたことは直ぐに聞くという姿勢だ。今回は、あまり積極性をもって質問できなかったことが反省点と思う。

また、お二人の話に食い違いが発生した点も興味深かった。記憶というものは、当然に年数を経るごとに薄れていくものであるし、対象の出来事の一時的な体験者か、或いは二次的な体験者かどうかで内容も変化していく（二次的である場合、それは記憶というよりも「記憶の記憶」である）、不確定なものである。一時的な体験者の高齢化を鑑みれば、生の声を可能な限りそのまま保存する方法を考えるのが学芸員の役目であるとも感じられる。オーラルヒストリーの懸念点について理解できた、良い機会だった。

### 4. おわりに

今回の研修は、特別なハプニングに見舞われることもなく終えることができた。それは、天候や海の状況に恵まれていたのもあるが、先輩方の行動に助けられていた点が大きいように感じた。それは同時に、先輩方に甘えていたという反省点でもあると思う。今回の研修での体験を踏まえ、今後のゼミやワークショップなど、ある程度の人数で一つの目的を達成する取り組みに参加するときに役立てていきたい。また、蟬塚さんや稲垣さんの姿を見て、学芸員のフィールドワークというものの実像や、効率の良い調査方法を学べた点も、今後の学芸員課程を受講するうえでの糧にしていきたい。

最後に、研修の場を提供して下さった稲垣さんと手塚先生、ご同行していただいた蟬塚さんに深く感謝、御礼申し上げます。



写真1 左半身の削れた地蔵



写真2 神社の抜け落ちた回廊



写真3 避難路の中 手すりと扉がある

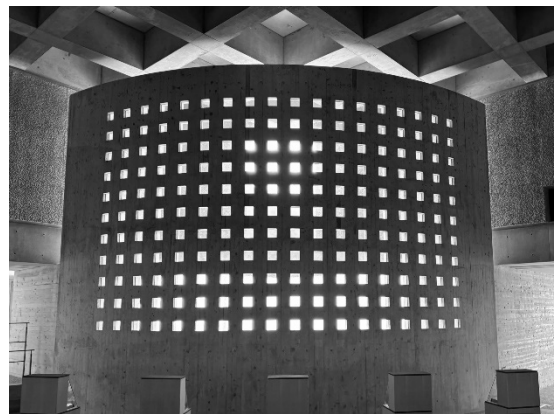


写真4 198のひかり

# 奥尻島における祭礼の廃止および統合と存続に向けた取り組み

文学研究科博士（後期）課程・小樽市総合博物館学芸員 蟬塚 咲衣

## 1. はじめに

当学学芸員課程では、2015年より奥尻島での研修を開始し、2024年度で10年目を迎えた。特に2018年からは、島で行われている祭礼について調査研究を行っている。奥尻島の祭礼は、「神道系」、「仏教系」、「宗教外行事系」の3つの系統に分類でき（蟬塚 2022b:20）、これまで系統を問わず様々な祭礼の調査を続けてきた。このうちの「神道系」にあたる各地区の神社で行われる例祭は、2018年の調査開始時点で、神輿や山車の巡行を行っている地区は青苗地区と奥尻地区の2地区のみとなっていた。青苗地区は氏子総代（神社役員）の人数不足を理由に2019年の巡行を中止し、そのまま2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の流行による休止期間に入り、その後は巡行が行われていない。また、奥尻地区については、2019年まで山車の巡行をしていたものの、担い手不足でコロナ禍以降は実施できておらず、両地区ともに巡行の継続に関して予断を許さない状況である。さらに2024年には、「神道系」、「仏教系」、「宗教外行事系」というそれぞれの要素を持っていた「奥尻三大祭」が廃止されるという、大きな出来事があった。

また、前向きな動きとして、宮津地区に鎮座する宮津弁天宮（中津島神社）の修理を目的としたクラウドファンディングが行われ、多くの支援を得て修理に向かって進み出していることが挙げられる。このような動向に鑑みて、2024年8月11～15日に行った奥尻島研修では、宮津弁天宮の現状の視察と宮津地区の記憶地図作りを行った。

本稿では、まず青苗言代主神社例祭について、2024年の調査報告と直近7年の実施状況を整理する。次に「奥尻三大祭」の廃止および新たに始められた「おくしりまるごと祭」を取り上げ、最後に宮津弁天宮のクラウドファンディングについて考察する。

## 2. 2024年度の青苗言代主神社例祭の実施状況

奥尻島の南端に位置する青苗地区では、毎年8月12～14日に青苗言代主神社例祭が行われている。12日には宵宮祭を行い、13～14日にかけて、猿田彦、神輿1基、山車（恵比須山）1台が、字青苗・字富岡・字米岡を巡行する。2018年から2024年までの実施状況をまとめたのが、表1である。2018年は巡行を行ったが、2019年は巡行をするかしないかを判断する組織である氏子総代（神社役員）の世代交代があり、体制が整わなかったことを理由に巡行は行われず、浜風公園での「ねまり（地域を練り歩かずに山車や神輿を特定の場所に設置して、その周辺で飲食や催しを行うこと）」のみが行われた。なお、恵比須山協賛会による催しとは、協賛会が中心となって浜風公園に出店を出し、ビールや焼き鳥などの販売を行ったことを指す。2020年から2022年は、コロナ禍だったことを理由に神社で神事のみが行われた（蟬塚 2023:15-16）。また、2022年5月12日から同年7月30日ま

で、青苗言代主神社の修繕と社務所建設を目的としたクラウドファンディングが行われ、2023年には社務所が再建され、案内板や簡易水洗トイレが新たに設置された（蟬塚 2024：29-30）。2023年は山車の恵比須山を浜風公園まで運んでの夏祭りが4年ぶりに再開されたが、巡行については役員の人手不足と神輿の担ぎ手不足を理由に実施されなかった（蟬塚 2024：30-31）。

表1 青苗言代主神社例祭の実施状況

	北海道南西沖地震から25年		コロナ禍			北海道南西沖地震から30年	
	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
神事	○	○	○	○	○	○	○
猿田彦	○	×	×	×	×	×	×
神輿	○	×	×	×	×	×	×
山車	○	△	×	×	×	△	△
特記事項	・浜風公園で夏祭り実施	・氏子総代の世代交代による巡行中止 ・恵比須山協賛会による催し(ねまり)			・青苗言代主神社がクラウドファンディングを実施	・浜風公園での夏祭り4年ぶりに再開 ・恵比須山協賛会による催し(ねまり)	・山車(恵比須山)が巡行予定だったが、天候が悪く中止 ・恵比須山協賛会による催し(ねまり)も8月17日に延期

調査を行ったところ、2024年も巡行は行われず、2023年と同様に青苗言代主神社での神事と恵比須山協賛会による催しの実施に留まった。しかし、2023年までと大きく異なるのは、山車（恵比須山）が町内を巡行する予定だったことである。奥尻町教育委員会学芸員の稲垣森太氏からご提供いただいた資料によると、青苗町内会において「第21回青苗町内会夏まつり」と「山車『恵比須山』の町内巡行について」という文書が回覧されたという。「地域の子供たちや帰省客に伝統ある青苗祭の姿をお見せしたい、体験していただきたいとの思いから」<sup>1)</sup>、2024年8月13～14日の2日間で恵比須山の巡行を行う予定であることが記されており、スケジュールも公開されていた。時間は両日ともに13時から21時までで、直近で巡行が行われた2018年の時間と比較すると、開始時間は1時間遅くなり、終了時間は14日が30分早まっていた<sup>2)</sup>。さらに、新たに巡行のルールが設けられ、これまで行っていた戸別への「いかまわし」<sup>3)</sup>と「はおい」<sup>4)</sup>が希望制となった。また、山車の太鼓を叩く小学生と中学生も募集されていた。恵比須山協賛会の関係者によると「2024年は巡行をやるつもりだったが、後継者不足でできなかった。ただ、町内会の夏祭りに恵比須山を出すので、巡行もやろうという話になった。猿田彦と神輿は動かずに、山車が単独で動くというのはやったことがなかった。今回は台風で中止になってしまったが、子どもたちが太鼓の練習をしていて、出店用の仕入れもしているので、8月17日に恵比須山を下げてきて浜風公園で催しを行い、その日のうちに収納庫に戻す予定」<sup>5)</sup>という。2024年8月12日は、台風を理由に夏祭りおよび恵比須山の巡行が中止となり、浜風公園に櫓や山車が設置されることもなかった（写真1）。2024年の巡行の方法については、「本来は青苗のお祭りなので、ルートは青苗に短縮した。何年も空白があって久しぶりにやるし人もいないので、町民に負担のないやり方を考えた。1軒1軒にはおいをするのは、もうできないかもしれない」<sup>6)</sup>という声があった。担い手の減少や6年ぶりの巡行という点を考慮して、

新たな巡行のルールを設けたという。

2024年は神事のみで開催となった。8月12日16時に宵宮祭が行われ、11名（宮司1名、男性9名、筆者）が参加した（写真2）。挨拶の場面で、氏子総代長は、「今年の巡行は例年の2日間ではなく1日で、猿田彦、神輿、山車の3つを出せないかと考えていた。関係者も頑張ってくれたが、神輿は4人足りず、猿田彦も8人は必要という話になった。日程を短縮するなど体力に合わせながら、1人1人に声をかけ、実施可能な人数が集まってほしい<sup>7)</sup>と呼びかけた。別の氏子総代によると「青苗は昔から猿田彦、神輿、山車がセットだったので昔のイメージにこだわる人がいて、猿田彦が出れないと意味がないと言ったりする。奥尻（澳津神社）は猿田彦と神輿が出なくても、山（山車）が出る<sup>8)</sup>という声があり、島内他地区の巡行と比較しながら、青苗の巡行の特徴を認識していることが伺える。巡行を行うための対応策はあっても地域の住民にとって譲れないものがある場合は、祭礼の形を変化させることが難しいことを痛感した。翌日8月13日の11時から本祭が行われ、6名（宮司1名、男性4名、筆者）が参加し、20分ほどで終了した。



写真1 夏祭りが中止となった浜風公園



写真2 2024年の宵宮祭の様子

4. で詳述するが、青苗言代主神社の氏子総代長が日々更新している、宮津弁天宮（中津島神社）のクラウドファンディングの活動報告には、青苗言代主神社例祭では2024年も猿田彦とお神輿の人手不足で出せないという報告とともに、来年はまとめてコンパクトに実施したいという意気込みが記されていた<sup>9)</sup>。このほか、神社の飾りつけの様子<sup>10)</sup>や宵宮の参加者が多かったこと<sup>11)</sup>なども報告されており、クラウドファンディングの中心は宮津弁天宮でも、青苗言代主神社の近況も知ることができる記録となっている。

最後に、奥尻島の神社例祭の現状について述べる。奥尻島内には12の神社があり、各神社の例祭は8月を中心に毎週のように行われているが、島に神職が在駐しておらず、島外から招いた宮司1名が島内全神社の神事などを担当している。宮司に他地区の実施状況を尋ねたところ、「赤石（保食神社）は神事のみ行い、山車もイベントもやっていない。稲穂（鷗崎神社）は、今年は何もやっていない。コロナ禍の間、大きな神社では神事を行っていたが、小さな神社ではやっていなかった<sup>12)</sup>と教えていただいた。筆者が奥尻島で祭礼調査を始めた2018年の8月9～10日に行われた赤石地区の保食神社例祭は、神社での神事とは別に、奥尻町町民センターを会場に「赤石祭山協賛行事」が行われていた<sup>13)</sup>。山車

の稲荷山を町民センターの手前まで運んできて、体育館で食べたり飲んだりしながらのビンゴ大会や赤石港での花火大会などが催され、子どもから大人まで集まることから非常に活気がある印象を持っていた。しかし、かつてはこのような盛り上がりを見せていた地区でも、現在は神事の実施となっていることから、そのようになった理由も含めて、2018年からの変化を記録することが課題である。

### 3. 「奥尻三大祭」の廃止と「おくしりまるごと祭」について

2024年の奥尻島の祭礼における大きな出来事として、「奥尻三大祭」の廃止が挙げられる。「奥尻三大祭」は、毎年6月22日に島の北端にある稲穂岬で行われる「賽の河原まつり」、毎年7月の海の日前の土日に島の南端にある青苗漁港で行われる「室津まつり」、毎年8月最終土曜日にフェリーターミナルのある奥尻港で行われる「なべつるまつり」の3つの祭りで構成されていた。それぞれ協賛行事として、ビンゴ大会や歌謡ショーなどの様々なイベントが行われる。「奥尻三大祭」と呼ばれるようになった時期については、3つの祭りの中で第1回の開催年が判明している「なべつるまつり」が1973年に始まり<sup>14)</sup>、1980年の奥尻町の広報に「奥尻の3大祭りのひとつである“なべつる祭り”<sup>15)</sup>という記載がある。よって、島内でどれだけ認知されていたかは定かでないが、「なべつるまつり」誕生の7年後には三大祭という言葉が存在したことがわかる。

「なべつるまつり」が観光開発を目的に始められた一方で、「賽の河原まつり」は三大祭となる以前から「賽の河原法要祭典」などと呼ばれ、会場の賽の河原は道南五霊場の1つとして犠牲海員や水難溺死者、幼少死亡者の慰霊の地であり<sup>16)</sup>、1993年の北海道南西沖地震以降は、震災の慰霊を行う場にもなっていた。島内の住職が法要を行う、「仏教系」の祭礼である。また、「室津まつり」は、青苗漁港から青苗沖の室津島まで海上渡御を行い、室津島に鎮座する室津島神社で神職が神事を行うことから、「神道系」の祭礼と言える。「室津まつり」については、青苗地区の住民から「商工会青年部が震災前になべつるで行っていたイベントが楽しく、室津も負けていられないからやろうと思った<sup>17)</sup>という他地区を意識した声もあることから、三大祭の経緯については、開催地の稲穂周辺、青苗周辺、奥尻周辺の各地区の視点から聞き取りを行う必要があると考える。

2020～2022年はコロナ禍ということもあり協賛行事のイベントは行われなかったが、2023年に3つとも4年ぶりに開催された。しかし、2023年12月1日に開催された奥尻三大祭協賛行事連合運営委員会において、協力員の不足、高齢化、事業のマンネリ化を理由に三大祭を全て終了し、予算を集結して新たなイベントを立ち上げることが発表された<sup>18)</sup>。それに伴い、1982年に設置された<sup>19)</sup>奥尻三大祭協賛行事連合実行委員会も解散した。2024年については、賽の河原では奉賛会行事である法要のみが行われた。また、室津島神社での神事は7月には行わず、8月21日の本祭で行われたが、室津島に向かう際に例年使用している船の船主が亡くなったため、室津島には渡れなかったという<sup>20)</sup>。

三大祭の廃止で筆者が懸念したのは、「室津まつり」では奥尻祈漁太鼓、「なべつるまつり」ではかつて四ヶ散米行列が披露されたように、「奥尻三大祭」は島の民俗芸能が披露さ

れる機会でもあったことから、それらの公開の場が減ってしまうことであった。しかし、2024年7月12～13日に海洋センター裏の奥尻港湾特設会場で開催された、「おくしりまるごと祭」のプログラムによると、漁船パレードとともに奥尻祈漁太鼓が披露され、さらにコロナ禍以降、澳津神社例祭で巡行を行っていなかった奥尻町内会の山車（神威山）が会場に設置され、「山車を囲んで BON ODORI」というイベントが行われるなど、三大祭の流れを汲みながら島の文化を背景にした祭礼文化の新たな形が生み出されていた。

このように、本来は各神社の例祭で行われる民俗芸能が、それ以外の場でも伝承される事例として、小樽市の「おたる潮まつり」が挙げられる。この祭りは宗教行事ではないが、恒例となっている神輿パレードでは、松前神楽、四ヶ散米行列、小樽住吉神社赤坂奴といった神社例大祭では同時に行われることのない芸能と一緒に披露される。このような、神社の例祭以外の場での伝承が持つ意味について、これからも考察を続けたい。

また、筆者が小樽で日本遺産の「炭鉄港」に関する講演の準備をしていたところ、『北海道の民謡—民謡研究調査報告書—』という報告書の中に、「四箇散米舞曲（しかさごまいきょく）」<sup>21)</sup>という記載を見つけた（北海道教育委員会 1989：217）。「昭和63年度全調査民謡一覧」に掲載されていることから、この時期に行われていた奥尻における四ヶ散米行列の貴重な記録である。なお、奥尻の四ヶ散米行列は、1962年頃に澳津神社で始められたとされ（蟬塚 2022a：188）、1993年の北海道南西沖地震のあと、1995年には再開されたものの<sup>22)</sup>、2001～2002年頃には行われなくなったとみられる<sup>23)</sup>。四ヶ散米行列が伝承されている8地域（福島町、知内町、小平町、利尻町、礼文町、奥尻町、小樽市、黒松内町）の中で、同書の「民謡一覧」に掲載されているのは奥尻町だけであった。この報告書と合わせて作成された録音テープの所在なども含めて、引き続き調査を行いたい。このように小樽で仕事をしていても、ふとした時に奥尻に関する資料との出会いがあるため、地域と地域の繋がりを意識し、常にアンテナを張ることが重要である。

#### 4. 宮津弁天宮の存続を巡る取り組み

三大祭の廃止・統合が進む中、前向きな話題として奥尻島宮津地区に鎮座する宮津弁天宮（中津島神社）のクラウドファンディングが挙げられる。宮津弁天宮は1999年7月26日に奥尻町指定有形文化財となったが、以前より社殿の老朽化が課題となっていた。そこで、2023年の青苗言代主神社のクラウドファンディングでも中心的役割を担った有志が、修理費用を集めることを目的に2024年4月11日から同年6月29日までAll-in方式のクラウドファンディングを行い、目標金額5,000,000円のところ3,308,600円を集めて終了し

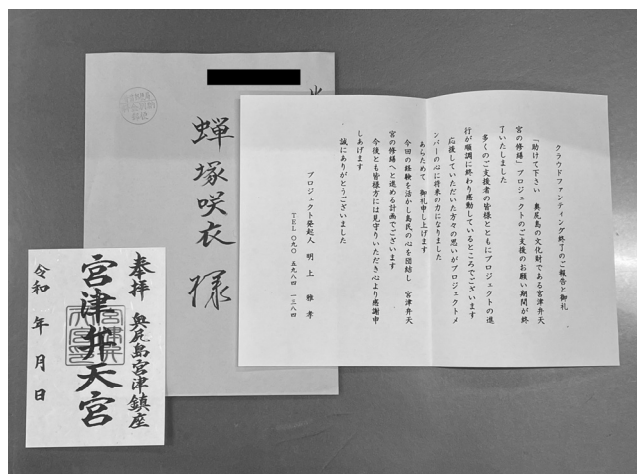


写真3 クラウドファンディングのリターン

た<sup>24)</sup>。2024年4月12日から始まった活動報告は、2025年3月27日時点で440ページに及び、1ページに5記事掲載されるため約2,200回報告されている。筆者も微力ながら協力させていただき、後日リターンとして宮津弁天宮の御朱印と礼状をいただいた(写真3)。2025年3月15日には地元有志15名で、修理に利用する1本3~6mの資材を人力で宮津弁天宮前まで運んだという<sup>25)</sup>。

当学芸員課程では、2018年から奥尻島の各地区や祭礼に関する記憶地図を作成している。2024年はクラウドファンディングの盛り上がりもあったことから、宮津地区をテーマとした。残念ながらワークショップ形式での実施には至らなかったが、青苗の調査で6年ほどお世話になっている山下氏など、お二方にじっくり話を聞く良い機会となった。かつて宮津弁天宮の例祭で行われていた神輿渡御のエピソードなど、往時を偲ぶ姿が印象的だった。毎年1地区を目安に活動を続けているが、まだ未調査の地区もあるため、最終的に全地区の記憶地図を作ることを目標にしたい。

## 5. おわりに

2025年2月18日に、北海学園大学の学芸員課程実習室で、奥尻町学芸員の稲垣氏による講演会が行われた。演題は「奥尻町の文化財行政に関する他機関・団体等との協力・連携と課題」で、これまで稲垣氏が携わってこられた、大学、博物館、ボランティア団体、奥尻高校、地域おこし協力隊などとの連携事業についてお話しいただいた。学芸員という仕事には、地域の資料を未来に伝えるだけでなく、人と人、人とモノを繋ぐ、結節点としての役割があることを改めて認識する時間となった。当館でもこのような役割を求められる場面があるが、稲垣氏がコミュニケーションのハブ的役割を務める背中を長年にわたって見せていただいたおかげで、筆者自身も意識的に取り組むことができている。

2022年の博物館法改正により、博物館は多様な主体との連携による地域社会への貢献が求められている。当館では2023年8月19日に松前神楽小樽保存会、潮見ヶ岡神社と龍宮神社にご協力いただき、「小樽の四ヶ散米行列と松前神楽」と題したイベントを行った。潮見ヶ岡神社で傳承されている四ヶ散米行列は、コロナ禍のため2019年を最後に実施されておらず、イベントでの披露を目標に19名の子どもたち(うち18名が初挑戦)が練習を重ね、当日実演した。翌年の2024年度潮見ヶ岡神社春季例大祭では四ヶ散米行列が5年ぶりに再開され、舞い手9名のうち7名が2023年の当館のイベントに参加した幼稚園から中学生の子どもたちであった。イベント時と同様に例年より対象年齢を拡大して募集したという。また経験者が多く、少ない練習回数で本番に臨んでいた。博物館が地域の文化に対してどのような役割を担えるか、今後も様々な取り組みを行いながら模索したい。

筆者が小樽市の学芸員として働き始めてからも、ありがたいことに奥尻島の研究をしている者として認識していただくことが多い。初めて奥尻を訪れる方からおすすめの場所を尋ねられたり、「蟬塚さんが以前博物館で展示していた民俗芸能と所縁のある、奥尻に行ってきました」<sup>26)</sup>という大変励みになるご報告をいただくこともあった。就職後は奥尻に行く機会が減ってしまい残念に思うが、筆者が奥尻の調査を続けることによって、少しでも

奥尻に親しみを持ってくれる方が増えるのであれば嬉しく思う。

奥尻の祭礼を取り巻く状況は刻一刻と変化している。2024年の調査で実感したのは、筆者が奥尻で調査を続けている約8年間で聞き取り調査にご協力いただいた方々が、高齢を理由に続々と島を離れていることである。奥尻の昔の暮らしや祭りについて生き活きと語ってくださったことが強く印象に残っているが、そのような話がもう島では聞けない状況になりつつあることを痛感した。祭礼調査と記憶地図の作成などを継続し、今後も可能な限り多くの方々のお話を記録できるように努めたい。

※証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／職業／例祭での役割／取材年月。不明箇所については、一で記す。

## 注

- 1) 恵比須山協賛会「山車『恵比須山』の町内巡行について」より。
- 2) 「青苗言代主神社例祭に係る予定通過時間表（平成30年8月吉日）」より。
- 3) 「いかまわし」とは、お札回しを指す言葉である。1993年の北海道南西沖地震以前、青苗に恵比須山と船魂山の2台の山車が存在し（蟬塚ほか2019：165）、恵比須山では、いか（烏賊）の形に切った金と銀の紙を2枚セットで渡していたことから、この名称になった。一方、船魂山で渡していたのは、一般的な紙のお札で特殊な名称はなかったとされる。震災によって2台とも消失したが、恵比須山のみが復興され、以降はいかのお札ではなく、鯛を釣っている恵比須のお札になったという（A氏／男性／60代／元特別職公務員／氏子総代・恵比須山協賛会／2021年10月）。
- 4) 「はおい」とは、ニシン漁の網起こしの音頭を起源とし、山車が家々を巡る際に、氏子の職業に応じて歌詞を変えながら行われる。
- 5) A氏／男性／60代／元特別職公務員／氏子総代・恵比須山協賛会／2024年8月
- 6) 注5に同じ。
- 7) B氏／男性／70代／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会／2024年8月
- 8) C氏／男性／70代／一／氏子総代・青苗みこし保存会／2024年8月
- 9) 「活動報告（2024年8月8日）」[https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/605819?utm\\_campaign=753963&utm\\_medium=stepmail&utm\\_source=report](https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/605819?utm_campaign=753963&utm_medium=stepmail&utm_source=report)（2025年3月20日閲覧）
- 10) 「活動報告（2024年8月13日）」[https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/607385?utm\\_campaign=753963&utm\\_medium=stepmail&utm\\_source=report](https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/607385?utm_campaign=753963&utm_medium=stepmail&utm_source=report)（2024年3月20日閲覧）
- 11) 「活動報告（2024年8月13日）」[https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/607262?utm\\_campaign=753963&utm\\_medium=stepmail&utm\\_source=report](https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/607262?utm_campaign=753963&utm_medium=stepmail&utm_source=report)（2025年3月20日閲覧）
- 12) D氏／女性／60代／神職／神社関係者／2024年8月
- 13) 2018年8月撮影の「赤石祭山協賛行事メニュー」と「赤石祭山プログラム」より。

- 14) 奥尻町役場「広報おくしり No. 102 (昭和 49 年 7 月 1 日発行)」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00001500/00001582/20130> より。
- 15) 奥尻町役場「広報おくしり No. 152 (昭和 55 年 9 月 1 日発行)」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00001500/00001580/20130926135813.pdf> より。
- 16) 奥尻町役場「広報おくしり No. 94 (昭和 48 年 6 月 5 日発行)」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00001500/00001582/20130930095426.pdf> より。
- 17) E 氏／男性／60 代／地方公務員／一／2019 年 8 月
- 18) 奥尻町公式ホームページ「奥尻三大祭の廃止について」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00008560.html> (2025 年 3 月 27 日閲覧)
- 19) 奥尻町役場「広報おくしり No. 175 (昭和 57 年 8 月 1 日発行)」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00001500/00001579/20130926131045.pdf> より。
- 20) 「活動報告 (2024 年 8 月 28 日)」<https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/612269> (2025 年 3 月 20 日閲覧)
- 21) 四ヶ散米行列は伝承地域によって呼称が異なり、奥尻では「四箇散米舞 (しかさごまい)」と呼ばれるが、本稿では「四ヶ散米行列 (しかさごぎょうれつ)」に統一する。
- 22) 1995 年 8 月 15 日撮影の写真 (奥尻町教育委員会所蔵) より。
- 23) 稲垣森太氏のご教示および、下記文献より推定される。池田貴夫「被災した民俗—北海道南西沖地震後の奥尻島における民俗事例の軌跡と文化再活性化について—」『北海道開拓記念館研究紀要』31 : 77-98.
- 24) 「助けて下さい。奥尻島の文化財である、宮津弁天宮の修理。」<https://camp-fire.jp/projects/753963/view#menu> (2025 年 3 月 27 日閲覧)
- 25) 「活動報告 (2025 年 3 月 17 日)」<https://camp-fire.jp/projects/753963/view/activities/683113#main> (2025 年 3 月 20 日閲覧)
- 26) F 氏／男性／60 代／報道関係／一／2024 年 12 月 19 日

## 参考文献

- ・蟬塚咲衣、佐々木理子、稲垣森太、手塚薫 (2019)「北海道南西沖地震における奥尻島青苗言代主神社例祭の復興過程をめぐる考察—GIS による祭礼ルートと時間の変化が意味するもの—」『歴史都市防災論文集』13 : 163-170.
- ・蟬塚咲衣 (2022a)「博物館展示における民俗芸能—北海道の四ヶ散米行列を事例に—」『年報新人文』19 : 205-166.
- ・蟬塚咲衣 (2022b)「北海道における四箇散米行列の伝播」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』34 : 20-28.
- ・蟬塚咲衣 (2023)「奥尻島におけるコロナ禍前後の例祭」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』35 : 15-20.
- ・蟬塚咲衣 (2024)「奥尻島における例祭の経年調査を通じた博物館展示の実践」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』36 : 29-34.
- ・北海道教育委員会 (1989)『北海道の民謡—民謡緊急調査報告書—』札幌.

## 奥尻町の文化財行政に関する他機関・団体等との協力・連携と課題

奥尻町教育委員会事務局 主任学芸員 稲垣 森太

### 1. はじめに

奥尻町教育委員会事務局の学芸員として採用されてから14年間の時間が過ぎた。年数、年齢的にも中堅の域に達し、職場内では最古参の古株となっている。20代の職員も複数いる中で、地方行政マンの先輩として模範になるよう期待されているのが感じられる。他方、文化財行政については筆者のみが係わる専門的な所管事項で、資料館の運営、文化財の管理については全般に任されている状況である。これは自由度がある反面、専門外の分野においては情報の蓄積が遅れることもある。

そのような環境の中で、大学や研究機関、その他団体等の外部組織との連携、協力により、その不足を補うべく工夫して対応してきたところである。本稿では、これまでに実施した事案を紹介しながら、展望や課題についても寸言したい。

### 2. 奥尻町学芸員の仕事

奥尻島の歴史・文化・民俗・自然環境など様々な分野について、調査し、資料を蓄積し、判りやすく一般へ還元する。文化財を後世へ伝え、残す役割となる。他、社会教育係としての仕事に社会教育事業、社会体育事業、町民文化祭開催支援などがある。

施設管理として、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室に週2回駐在している。他、奥尻島津波館の管理事務、海洋研修センター、町民センター、スキー場の管理事務など多岐にわたる。

不定期行物として学芸活動便り『ふるさと奥尻通信』を刊行して、関係各所に配布の他、役場HPに掲載している。一般町民へ広く周知したい場合には、『広報おくしり』に文化財情報を掲載し普及を図っている。



稲穂ふれあい研修センター



奥尻島津波館

### 3. 大学や他団体との連携・協力

#### 事例紹介

##### (1) 遺跡の発掘

福島大学考古学研究室の菊地芳朗教授が古墳時代～平安時代平行期の北海道島及び周辺の比較研究のため、島内の青苗遺跡にて2023年8月に試掘調査、2024年8月に本発掘調査を行った。本調査は約3週間にわたり、10名程度の学生と共に発掘調査に専念した。有名な丁字頭勾玉出土地点の真横を掘ったものの、勾玉埋葬年代と目される8世紀の遺物はなく、ほとんどが10～11世紀頃の擦文土器だった。それでも、約50年ぶりに青苗遺跡を学術的に調査し、出土層位の把握や底部刻印のある坏が複数個発見されるなど、一定の成果があったと考える。2025年度に報告書刊行予定。調査期間中に現地説明会を実施し、速報的に地元へ成果を還元することができた。参加20名ほどで、地元の青苗住民がほぼゼロだったのは意外だった。遺跡は難しく、身近ではないというイメージがあったものか。同遺跡においては、これまで行政発掘調査は数多く行われてきたものの、学術調査は約70年ぶりであり、筆者にとっては初めてで、考古学的研究手法の違いを感じ取ることができた。



発掘の様子



出土擦文土器



福島大、北海学園大の皆さん

##### (2) 遺物の精査

2022年6、10月、北海道大学の高瀬克範教授、國木田大准教授らが、遺跡時代の食物利用等の解明のため、青苗遺跡ほか島内出土土器や動物骨の精査を行った。土器に残る炭化物の分析や、凹みとして残る植物種子圧痕をレプリカ法で検出して、その種を同定する。結果、青苗遺跡の擦文土器からは、イネ（粳）2点、キビ（有ふ果）2点、アワ4点等が見つかった。発掘後に長らく収蔵していた考古資料を吟味することとなり、長期保管することの意義を示すことができた。

島では多くの時代を通じて、島民は海洋資源に依存した傾向が強く、擦文期のアワビの貝塚が特に有名であり、魚類ではソイ類、アイナメ類、カレイ類などがみられる。鰯脚類では擦文期はニホンアシカ、中世以降はオットセイが主流だったと考えられる。



収蔵庫で調査中



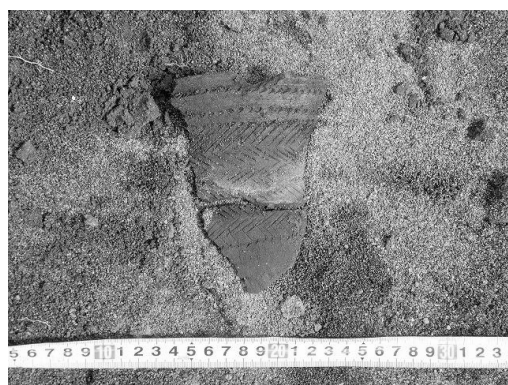
擦文土器に残った種子の圧痕

2023年9月、国立歴史民俗博物館の共同研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化・アイヌ文化—その成立・展開過程—」でアイヌにつながる時代の解明のため、林部均教授、内田順子教授、鈴木琢也学芸員(道博)、亀丸由紀子学芸員(道博)が島内巡回を行った。

オホーツク文化の遺跡として、宮津遺跡(宮津弁天)、青苗砂丘遺跡を、擦文時代の遺跡として青苗遺跡、米岡5遺跡を踏査した。特に鈴木氏が同行して踏査した米岡5遺跡は、西海岸に所在する数少ない擦文前期?～後期の遺跡で、道路が消えてしまい、藪こぎして海岸線に下りる立地のため、約20年ぶり(町教委としては、約30年ぶり)の現地訪問となった。偶然にも海岸砂丘部より擦文土器が露出しており、いくつか表採した。文様は横走の綾杉文(10世紀末～11世紀初頭)で、道央や北部日本海側で出ている土器と同様の様相を、専門家立ち会いの下で確認できた。青苗遺跡出土の土器(口縁の横走沈線、鋸歯状文など)とは別系統であり、擦文土器成立から展開における地域的多様性を実感できた。同地には擦文中期(9世紀)の土器の他、続縄文末期～擦文初期(7世紀末頃)から出現するとされる北大3式2類の名残を感じさせる土器片もあり、研究者の注目を集めている。



米岡5遺跡近景



表採した擦文土器 横走綾杉文

### (3) 北海道南西沖地震をめぐって

1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震による地震津波被害とその復旧・復興の過程

は、後世に大きな影響を及ぼした。当時奥尻中学2年生で被災した定池祐季准教授（東北学院大）は自身のライフワークとしてその後の奥尻を見続けている。長期継続した研究情報の蓄積としてとても有益と考える。

筆者も同震災については奥尻島史の中でも重要な位置づけとしており、毎年の慰霊祭に参加し、観察し続けている。慰霊のあり方や教訓の伝え方など、時代が変化する中で、行事や記憶の継承がどうなっていくのか注目される。ここでは観察者でもあり、また参加者でもある。客観視を維持しながらも、一島民としては地元民との意識の共有、共感を心がけているつもりである。

2024年7月には、震災直後にボランティアとして参加していた当時の大学生らと再会し「奥尻未来会議」を開催して、震災後30年経った島の現状と、求められている物事などについて話し合った。今後も長期的な交流関係を保ちたいという趣旨である。



ボランティアOBとの交流（2024）定池氏右端 青苗地区の津波被害（1993）

2013年7月に文化庁の補助を得て、奥尻町文化協会主催、日本災害復興学会共催の「北海道南西沖地震20年記念 奥尻島シンポジウム」を開催した。全国から研究者、被災地支援関係者、被災者など広く来島し、島民（一般、中高生など）とワークショップをして交流を深め、シンポジウムを公開し知見を深めた。

補助金を得て行う事業ということで、予算措置の方法と会計処理含めた精算に手間がかかり、数年後に監査の対象として、北海道財務局の予算執行調査もあった。



シンポジウム（挨拶：中林教授）

ワークショップで未来新聞作り

2013年は震災20年目、2023年は震災30年目ということで、多くのマスコミが押し寄せた。節目であるので注目された訳だが、その前後の年はさっぱりであることは、仕方の事として納得して良いのだろうか。毎年8月にだけ戦争報道で騒ぐ「8月ジャーナリズム」に通ずると感じる。震災当時、マスコミ報道を通じて日本国民に広く注目されたことで、大きな支援につながったことは事実であったが、地元住民の負担が大きかったのも事実。今でもマスコミ嫌いは少なくない。

一方で、本音を申せば筆者自身、世間やマスコミの注目に押されて、行動した部分もゼロではない。津波館で行った30年特別展示においては、当時チャリティライブをして島民を励ました、泉谷しげるをテーマにし、ご本人にもアプローチした。2023年の30年目は町主催行事が小さかったため、結果的に津波館へ取材先が向いた格好である。NHK函館の生放送に出演し、北海道新聞第一社会面にも掲載された。



30年特別展示 2023年7月



NHK 函館の生放送 2023年7月12日

#### (4) 奥尻島をフィールドに

2019年～2023年度、北海道博物館の若手職員6名による総合研究プロジェクトとして「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」を行い、最終年度に成果報告展を実施した。主催は北海道博物館及び奥尻町教育委員会である。

テーマは動物、民俗、貝類、歴史、考古など多岐にわたった。また、各学芸員が調査で来島した際に、町教委主催の「おくしりチャレンジスクール」を同時開催し、動物(2020)、アイヌ(2022)、動物(2023)、建物(2024)を題材にした講演会、体験会の講師を担ってもらった。町教委学芸員(筆者)の専門ではない分野についてカバーしてもらった格好。

奥尻島の調査自体、松浦武四郎が第1回蝦夷地踏査で来島しただけで、宮本常一や山田秀三など他地域では多くの業績を残す有名な研究者が来なかった島である。コロナ下での中断がなければ、もっと深く広い研究成果を得られたものと思うが、複数の視点から知見を得られたことは大変有意義だった。



成果展の様子

おくしりチャレンジスクール フロッタージュ制作

### (5) ボランティア団体受入れ

2016年～2019年まで博物館ボランティアとして埼玉及び徳之島在住の萩原洋一さんに手伝っていただいた。氏はかつて地質関係の研究機関に在籍していた経験から、島内の岩石の採集や鑑定、考古資料などの写真撮影を担い、手の回らない分野について補完していただいた。寄贈資料の整理作業が追いつかない事が多く、それを手がける良い切っ掛けとなった。

自身、博物館ボランティアの受入れは初めてであったので、計画的で効率的な業務提案ができなかったところが課題となった。この経緯は、当時北大で開催されていた「博物館ボランティアのつどい」で紹介し、講師による講評で言及される事例となった。



資料撮影の様子

筆者と萩原さん（右） 復元竪穴住居

2019年より、毎年二期（3月、9月ほか）に年間4グループほどの大学生ボランティア集団の受入れを継続している。NPO法人のEcoff（エコフ）が運営する「島おこしボランティア」という地域活性化をねらったボランティア活動事業で、世話人となる島内の宿泊受入先からの依頼により、稲穂資料館や津波館の見学研修や若干のボランティア作業を経験してもらっている。個人的には釣り体験の指導も行っている。

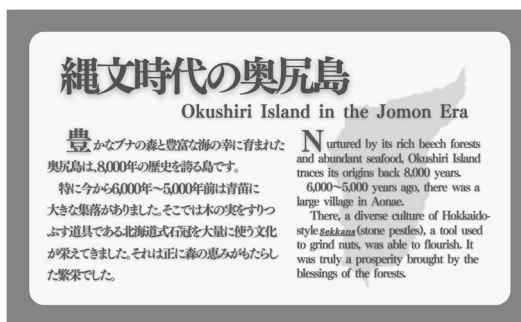
毎回10名ほどの全国各地（関東圏が多め）の大学生が入れ替わり来島するが、そのほとんどが奥尻島での滞在中に雄大な大自然やそこに住まう島人らに触れあうことで都会にはない魅力を感じ、感銘を受けて帰って行く。彼らが島のポジティブな情報を広く発信することで多くの関係人口が生まれつつある。地元企業への就職や地域おこし協力隊への応募につながっている。



稲穂ふれあい研修センターでのボランティア作業 Ecoff 一期生 2019年

2024年度、奥尻高校の英語科選択者によって稲穂ふれあい研修センター展示物のキャプションを英文化するという取り組みを実施中である。文章は米国出身ALTによるネイティブチェックを経ているが、専門用語をそのまま訳すのは高度になるので、読みやすさ、理解しやすさを優先している。専門家が読めば違和感があるかもしれないが、資料館とあまり関わりがなかった地元高校生との協同という意味で有意義と考える。

今後は、学校側の体制に合わせながら、点数を増やしていくことや他の展示物全般に及ぶよう検討してみたいところである。



### 高校生制作の解説プレート

#### (6) 地元有志の力

かねてより、町指定文化財の「宮津弁天宮」の老朽化とその修繕が大きな課題となっていた。町としては予算的に大規模修繕の計画はなく、所有者である地元の宮津町内会はずか 10 数世帯の島内でもかなり小規模な集落であり、その維持管理は困難で八方塞がりの状況に陥っていた。

そこで、地元有志が立ち上がり「宮津弁天を蘇らせる会」を結成し、クラウドファンディングを実施して 400 万円ほどが集まった。現在は、目下修繕実施について協議し、現地調査を経て施工する算段をしている最中である。公的資金が投入できない場合、やはり頼りになるのは地元の力であることを実感した。



宮津弁天宮を現地調査中

#### 4. 成果と還元、課題 一町民へどう還元するか

調査成果を一般町民へいかに還元するかを考えているものの、効果的な方法について色々と思案してしまうことも多い。埋蔵文化財を例にすると、2022年度に刊行した青苗遺跡の総括報告書について、ダイジェスト版を町の広報誌に2号に亘って掲載した。しかし、情報量が多く文字が小さくなり、どこまで読んでもらえたものかと不安である。学芸活動便り『ふるさと奥尻通信』にも載せたが、伝えたいことがたくさんあり、こちらも情報量が多くなってしまった。とにかく掲載して出すことが第一になってしまったと反省している。

また、昨夏行った青苗遺跡発掘調査の現地説明会では町民の参加が多く見られたものの、地元の青苗地区住民はほぼゼロだった。町内会回覧板や町内放送でも流したが、効果は薄かった。生の発掘現場を見ながら、調査した本人から説明を聞くチャンスは非常に少ないのであるが、そもそも需要がないのだろうか、遺跡って難しい存在なのかと悩んでしまう。

全体人口の少ない地方だから、というだけでは片付けられないだろう。正直考古学って難しい、と係わっている本人もそう思っている。専門的になりがち、みられがちな考古学を、いかに平易に判りやすく、親しみのあるものとして一般の眼前に体现できるかが、学芸員の腕の見せ所となろう。それを強く意識させる出来事であった。

#### ベネフィット

文化財行政に外部の機関や団体に関与してもらうことの利点を挙げれば、先ず第一に研究の進展がある。元々、町の学芸員は筆者一人であるので、カバーできる範囲と深度には限界がある。専門外の分野であれば尚更にその進展は遅く、蓄積が進まないままに過ぎがちである。そこを補完してもらえれば、非常にありがたい。

一方向になりがち視点が複数になるのだから、違う見解が生まれ、新たな知見を得ることで研究の深まりに通ずる。ただし、専門外だからといって、単に成果を受け取るだけでは、自分自身、結局何が成果であったのか理解していないことになる。成果の死蔵になってしまう。それらを解釈した上で、一般に判りやすく提示（展示）するところまでしなければならない。

## 基本姿勢

基本的に外部からの調査協力要請や希望に対して断らない姿勢を保っている。確かに、職場の理解を得るといった段階を踏むようなお役所的な行為や、調整ごとなど自身の手間が増えることになるが、それ以上に得られるものが多いと判断する。離島故に、往来が容易ではない立地であり、来る側も迎える側もそれなりの覚悟をして臨んでいるはずである。一方的ではなく、両者が応える形をとれば、お互いに満足した結果になるものと思う。

ただし、自身の得意分野だからといって、のめり込みすぎないようにせねばならない。傾注しすぎて業務全体に支障が出てこないよう気を付けたい。これは市町村の学芸員が、研究者ではなく、あくまで文化財行政職員として採用されている点を念頭に置いて行動する必要がある。

## 研究の名の下に

2019年、岩手県立博物館のベテラン学芸員による鉄器保存処理時の無断サンプリング事件が発生した。同館では全国から遺跡出土鉄製品の保存処理を請け負っていたのだが、専門的に係わっていた彼は、自身の研究分野でもあることから鑑定用に大規模にサンプリングして破壊検査を行っていたのだ。そこには重要文化財も含まれた上に、所有者に無断で行っていた事例が数多くあったことで大問題となった。破断面がW型に見えたことから、新聞紙上では”Wの悲劇”などと呼ばれた。

奥尻町では、筆者赴任前の2003年度に青苗遺跡出土の鉄器などを保存処理してもらっていた。その後、2016年になって、勾玉と一緒に出土した鉄刀についてX線透視して研究したい旨専門家より依頼があり、函館高専で専門装置にかけて透視画像を得た。すると、刀身の3箇所において破壊調査をしたと思しき欠損部分があり、別素材で充填して見かけ上は判らなくなっていた。この破壊調査は業務仕様書には記載が無く、あったとしても口頭での処理だったと思われる。当時の担当課長に聞き取りしたものの、明文化したやりとりは確認できなかった。その旨を岩手県へ報告し、後日、県より謝罪があった。最終的に本人は解雇となり、膨大な資料、データは岩手県博に引き継がれたようだが、現在に至るまで調査成果の提供はない。事実上のお蔵入りと思われる。

外部からの調査協力要請や希望に対して断らない姿勢を保っているが、時としてこのような事態になりかねないので、学芸員として文化財管理を任されていることに重責を感じる。

## コロナ下の活動

近年苦勞した点を挙げれば、やはりコロナ下での活動である。「パンデミック」は社会生活全般に影響し、日常生活から仕事まで様々な制約が課された。この時の同調圧力は国民性も手伝ってか、ものすごい様相だったと記憶する。ワクチンを打つ打たないに始まり、個人行動にまで介入された。

2020年9月、学芸員課程実習受入れが計画されたが、状況を勘案して見送ることとなり、その後11月には島内感染が広まり、50人に1人以上の割合で急速に広まったのである。患者は

巡視船や道の船舶で江差や函館に移送され、それを報道ヘリがテレビ中継するというような異常な事態となった。翌2021年以降は、事前の検査やマスク着用励行などを心がけて、どうにか受入れを継続し、2023年に5類になるまで細かい対応が必要とされた。

コロナ下において、筆者も対面での取材活動を控えざるを得なかった。聞き取り調査や所在調査などで地元の古老宅に訪問することが不可能であり、電話のみでは当方の意図を伝えきれない場合が多く、活動は停滞した。今後はそれを取り戻すべく活動したいところである。

## 5. 北海学園大学芸員課程との10年間

北海学園大学の学芸員課程実習生の受入れをはじめ、10年経った。初回は2015年8月で、以降はコロナ下であった2020年を除いて、ほぼ毎年受入れている。各々の詳細は『学芸員課程学事報告書』の各号に詳しいので参照願う。

数多くの実習受入の中でも、印象深いのは2018年8月の島の神社祭りのほとんどに参加して取材するというもので、約3週間にわたるロングランだった。これには企画した引率教員も受入れた学芸員もそれなりに大変だったのだが、なにより参加した学生の頑張りのお陰で、貴重な研究成果となって蓄積され、論文や卒論などで社会に還元されている。また、参加学生からは実際に学芸員や学芸分野で活躍している人材を輩出することとなり、受入れ側としてはある意味満足している。

学生受入のためには、各方面への調整と準備作業が伴うのでそれなりに時間を要した。一方で、実習分野では、その時その時に筆者が手がけている作業の補助を中心にスケジュールを組んで、準備作業の簡略化を図った。毎回の準備作業と実習指導を通して、筆者自身が大いに学ばせていただいたと思っている。

この学芸員課程の受入れは、個人的に感慨深いものであったし、活動について世間に広く知ってもらいたい気持ちがある。言い尽くせない思い出をいただいて感謝している。

## 6. おわりに

学芸員となって14年が過ぎた。あっという間に過ぎたようにも思うが、ひとつひとつを思い出していくと、数多くの出来事があり、そこには多くの人々との出会いと別れがあった。遠くに住んでいる人もいれば、すでに鬼籍に入られた方も多し。お世話になった方々の顔を思い出していくうちに、感謝の念がどんどん強くなっていく。

多くの外部の人々と係わることで、奥尻島をフィールドとした様々な分野において、研究を深めることができた。何より自身の見識の深まりと人間的成長において、奥尻島という大自然は最大・最良の師であったと感じる。これからも、この大地と海を大切にしながら、ともに歩んでいきたいと思う。

在島14年間のうち、10年間にわたって北海学園の皆様と係わることができ、自身大いに成長させていただいた。感謝とともに、今後も学芸活動に熱心に取り組むことで、母校の後輩なみならず次世代へ文化財継承の橋渡しをし、恩返しとしたい。

## ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

3年生以上に開講されている「博物館経営論」では、今までに学んだ知識を総動員して、ミニミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスターを実際に作成することも求める。完成には相当の時間がかかり、工作が苦手な人には忍耐が求められるが、デザインが得意な人は真価を発揮しやすい。制作に先立ち、昨今のミュージアムを取り巻く概況もレクチャーすることになっている。完成した作品は、上記3セットがディスプレイされ、学生同士で互いに作品評価も実施する。

2022年8月にチェコで開催されたICOM（国際博物館会議）プラハ大会では、ミュージアムの新たな定義案が採択された。ICOM日本委員会による日本語訳は以下のとおりである。

「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する」

この定義にあるように、ミニミュージアムの作成に当たっては、学生たちに、自己満足に陥ることなく、コミュニティの参加とともに機能するミュージアムの在り方を意識してもらった。そのためさしあたり「ビジョン」、「基本理念」、「展示趣旨」を設定してもらおうが、参考になるのがマッキンゼー&カンパニー社が提唱するソフトの4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの3S（戦略、組織、システム）である。ソフト要素は人の感情や価値観が影響し、変更が難しい。一方、ハード要素は経営者の意思や企業努力で改革が実現する。マ社では、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたとして「シェア・共有された価値観」を最重要視しており、それは「ビジョン」と「基本理念」からなる。ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標であり、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望としている。この2つが融合して「展示趣旨」（シェア・共有された価値観）になることを学生たちと共有した。「現状分析」することで、出発点の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識させた。優れた経営者は夢や思いを語り、そうでない経営者は数字ばかりを追い求めるという。人間形成空間としてのミュージアムの再興をも可能にする組織変革のフレームワークといえるだろう。

作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる作品評価の結果、ポスター・図録・展示部門をあわせた総合評価で最高得点を獲得した学生3人の作品を、次ページ以降紹介する。これからミニミュージアム制作に挑戦する学生は、本講評の後に掲載されている優秀作品の作者3人のレポートを熟読して参考にしてもらいたい。

# 博物館経営論課題ミニミュージム制作を終えて

人文学部日本文化学科3年 飯田 ゆき乃

## 1. はじめに

学芸員課程履修の集大成ともいえるミニミュージム制作であるが、構想やテーマ、制作など作業のすべてを自分自身で行う。制作にあたっては当然ながら、膨大な時間と知識を要する。

これまでの学びの定着度の確認に加えて、私の「好き」を表現できる良い機会と捉えることができたが、想像をはるかに超える苦労もともなった。結果的には、睡眠時間を削って夜な夜な制作に取り組む生活を約2か月続けることとなる。

本レポートでは、制作の最後には、いまだかつて感じたことのない達成感を味わうこととなったものの、それまでの苦労の2か月間を振り返り、種々の思い出について述べていく。

## 2. 構想

私は車が大好きで、ミニミュージム制作にあたっては問答無用で車をテーマにすると決めていた。しかし、車の博物館は大小問わず全国各地に存在する。そのため、車をテーマにするだけでは面白味に欠ける。

車の要素から自分の味を出していかなければならない。既存のものを展示・説明するだけでは終わりたくない。そう考えているうちに浮かんできたのが「道の駅」であった。大好きな車のハンドルを握って全道中の道の駅を駆け巡ってきた私にとっては、これらのテーマは「最強の掛け合わせだ」とすら思えたのだ。

テーマ設定には時間を要することはなかったが、それらをどのように展示に落とし込むかの構想に多少苦勞することとなる。そもそも道の駅は車がないと行けない場所がほとんどだ。市街地も抜けるし、某とうふ店の走り屋漫画に登場するような峠道を通ることもあるし、逆に海岸線の絶景を楽しむこともできる。道中を楽しむことこそが道の駅めぐりの醍醐味でもあるのだ。

ここで私は閃いた。「車」で「道の駅」をめぐるその「道中」に着目したのだ。手つかずの自然が多く残る北海道で車を走らせるということは、野生動物たちとの遭遇も多くなる。そうになると、悲惨な衝突事故も発生する。私自身が道の駅めぐり中に石北峠でエゾシカと衝突した経験も相まって、野生動物たちについて深く掘り下げる方向性で固まっていた。

テーマはこのようにして決定されたのだが、制作段階において最も時間をかけたのは意外にも「会場の構想」であった。数多の道の駅をめぐる中で「自分が道の駅をつくったならば」という夢を本制作で叶えることができたからである。ぜひ会場についても触れておきたい。

会場名：道の駅「くぬいロードカルチャーパーク」（長万部町・国道5号札幌向き側）

函館―札幌圏を結ぶ主要道沿い。交通量の割に道の駅が少ないと感じたため、長万部町国縫に設定。

[隣接道の駅]

You・遊・もり(国道5号・森町)→約50km

とようら(国道37号・豊浦町)→約50km

くろまつない toit vert II(国道5号・黒松内町)→約35km

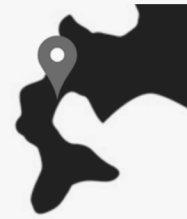


写真1 外観イメージ(AI作成):左と当駅の位置:右

☆ロードカルチャーとは☆

道内各地でJRの廃線が進み、広さも相まってますます車が必須になっている北海道で推進される新しい文化のこと。筆者による造語。車移動が展開する「道路上の文化」と定義。道の駅がその代表格。

### 3. 現状分析・ビジョン・コンセプト

続いて、図録をもとにそれぞれについて述べる。なお、図録の文章は省略・改変している。

#### 現状分析

日本の中でも群を抜いた圧倒的な自然を擁する、試される大地・北海道。

そんな北海道には、一度は訪れたい魅力あふれる場所がたくさんあり、自然との距離も近い。

すべての自然・動物に敬意を持つアイヌの人たちのように、私たちが守っていかなければならない固有の文化・風土・生態系が数多く存在する。

現在、この広い台地の移動には自動車が欠かせない。自動車ユーザーをターゲットにしたレジャー施設も増加しており、車で北海道を旅する人も多い。

そんな中、近年野生動物と車の事故が問題になっている。エゾシカだけでも全道年間5000件を超える。

何事もなく無事でありたい、そんなすべての車ユーザーの不安を少しでも取り除いてくれるものが、今回紹介したい「道路標識」だ。北海道ならではの道路標識を紹介することで、自然と野生動物とわれわれの共存について考える。

#### ビジョン(短期目標)

○北海道ならではの道路標識を紹介することで、内地の来館者のみならず道内の来館者にも発見と気づきを得てもらう。

○野生動物に対する注意喚起を促す。順路は定まっておらず、ジオラマを活用することで実際に車で移動している気分になってもらい、道路標識のイメージをより現実的なものにする。

○道の駅のアクティビティが目的で来館した人も、休憩がてら来館した人も、車中泊のために来館した人も、すべての人に関わる内容のため、安全について再確認を促す。

## コンセプト(長期目標)

野生動物と仲良くしたい？

- ・道路建設に際して考慮される野生動物への影響や、野生動物による衝突事故被害を減らすにはどのような対策が有効なのかを問う。
- ・野生動物と人間の関係における人間の優位性について、本展示を通して考えるきっかけとする。

避けては通れないエゾシカ問題

- ・衝突事故や食害といったエゾシカ被害は早急に対策しなければならない。エゾシカについて考えるコーナーを設けることで、社会問題化の要因や、取り組まなければならない対策について理解してもらう。

北海道はこんな場所！

- ・道路標識という観点から北海道らしさを探る。道路上にいることでわかることがたくさんある。小さい本展に来ることで、北海道愛を持ってもらう。

## 4. 模型制作

本作品に使用される展示物は、既製品・手作りどちらも使用している。主たる展示模型は「道路標識」であり、実際に道路に設置されているものを忠実に再現した。ただし、本作品はジオラマを取り入れたものであるため、空間自体が展示模型といっても過言ではない。

ジオラマの材料はすべてダイソーの既製品を使用している。樹木のミニチュアが最も印象を残しており、ジオラマならではのリアルさを演出するのに一役買っている。

標識の種類や分布については、道路標識マニア氏のブログを参考にしている。

写真2は本作品の全体俯瞰図である。右上部分がトンネルに扮した、本展への出入口だ。トンネルを出ると、自然があふれる道路に出る。ここでは、道内各地を周回できるようになっており、どこにでもある山道から日高地方の馬産地帯、オホーツクの流氷、釧路湿原、エゾシカが棲む深い森、道東・道北の酪農地帯、そして宗谷丘陵の風車へと景色が移り変わる。出口付近には、函館市の函館山麓にしかない「エゾヒキガエル注意」の標識も設置されている。



写真2 全体俯瞰図

本作品の詳細についていくつか紹介していきたい。

写真3は入口はいつてすぐのウェルカムエリアだ。ここには「キタキツネ注意」標識が設置されている。このエリアに関しては場所の限定はなく、キタキツネも生息地は道内全域だ。

向かい側には「エゾリス注意」標識がある。この標識は帯広市に集中しているが、生息は比較的全道にみられる。



写真3 ウェルカムエリア

写真4は制作途中で撮影したものだ。入口を入ってすぐ、北海道ならではの独特な標識が設置されている。これは「固定式視線誘導柱」と呼ばれるもので、通称「矢羽根」である。国道などの大きな幹線道路だけでなく、地元民の知る裏道のような場所にも設置されている。この標識には発光するタイプも存在しており、夜間であっても存在感を発揮する。上り坂やカーブ途中で道の先を見るとこの先の道の形も判るため私はこの標識が好きだ。



写真4 制作風景

この標識にはどのような役割があるのだろうか。それは「雪」に関する。標識にある矢印は「その道の路肩」を示しており、積雪時に除雪作業などで道の端を誤ってしまわないために設置されている。展示模型は、粘土で作成。

写真5については、道内でも珍しいものだ。

道央道深川市付近に設置されている「赤いキツネと緑のタヌキ」の標識だ。もちろんそのような色のキツネやタヌキは存在せず、ユーモアだろうと推測される。

見てもらわないことには効果を発揮しないものであるから、このようなデザインは有効性が高い。



写真5 赤いキツネと緑のタヌキ

写真6は日高地方や鹿追町付近によくみられる「ウマ注意」、写真7は道北地方や道東釧路・根室周辺によくみられる「牛横断注意」である。それぞれの標識が設置されている地域の風景の特徴を表現した。それぞれの動物にはさまざまなデザインがあり、見る側も楽しませてくれる。また、ウマに関しては、函館市の汐首山で野生化したウマが生息していることから、その付近にもこの標識が置かれている。



写真6 ウマ注意



写真7 牛横断注意



写真8 宗谷丘陵

写真8は宗谷丘陵をモチーフにした展示である。

周氷河地形であるここには多くの風車が立ち並び、牧場が点在している。その風景はさながら異国の地に来たかのようなのである。広がる草原地帯でエゾシカたちが寝転んでいる姿も見る事ができる。

この地域にはとくに紹介すべき動物注意標識はないが、一昨年の夏に筆者が実際に現地に行ってエゾシカの多さや彼らの自由さ、圧巻の風景にこれまでにないほどの感動を覚えたこと、また北海道内を駆け巡っているという感覚を味わってほしいがために、取り入れることにした。丘陵地形は粘土で土台をつくったのち、ジオラマ用の粉末の草をボンドで接着している。風車は粘土で作成。

最後に紹介するのは写真9のエゾシカコーナーである。

このコーナーは、本展示の後半部分に位置し、ある程度ほかの展示を見て回ったところで登場することになる。道内におけるエゾシカ問題の実態や、現在打たれているエゾシカ対策など、ほかのコーナーよりも深掘りして解説しているのが特徴だ。

また、エゾシカは森林地帯と草原地帯が隣接する道路に最も多く出没するというデータがあることから、実際にエゾシカコーナーもそのように再現してみた。

展示パネルは図録から抜粋している。



写真9 エゾシカコーナー

模型製作全体を通して、少々丁寧さに欠ける完成度となってしまったことは反省している。

本展の位置づけとしては、常設展ではなく特別展であるため、リピーター獲得というよりは、一度に与えるインパクトを大きくすることが大事である。そのため、小さな子どもも、実際に運転する大人も、それぞれが楽しめる内容を目指した。本来であれば、もう少し野生動物問題を展示に盛り込みたかったが、サイズ感を考えるとこれくらいの分量で適切であったと考えている。

とくにエゾシカの内容には、図録制作から時間をかけた。エゾシカは全道各地、どこにでも出没する野生動物であるが、筆者が実際に見てきた経験としては、出没する地域によって気性も体型も出没のしかたも全く異なる。それには植生や気温湿度、草原や森林の分布など、さまざまな要因が絡んでくるのだろう。ぜひ、エゾシカを見つけた際には周りの雰囲気も合わせて観察してみてほしい。

## 5. 図録・ポスター

図録は、私の場合は模型制作と同時進行で進めた。ポスターに関しては、模型制作を始める前に終わらせていた。展示しきれないものを図録で補いたいという思いが強かったため、図録にはコラムなども掲載している。そのような内容を目指すのであれば、膨大な時間や知識、文献が必要になるため、最低でも模型制作と同時進行していかなければ間に合わないとは私考える。

ポスターのデザインは、道路標識や道の駅の案内看板と同様に、一瞬で見る者の注意を惹きつけるものでなければならない。そのためには、まずはシンプルである必要がある。少ない情報で気を引くという、見た側がさらに情報を求めたいとの行動を引き起こすことが重要になってくる。



写真 10 ポスター



写真 11 図録-1



写真 12 図録-2

## 6. おわりに

とくに図録の完成度を求めすぎたせいも、制作は、作品発表・評価当日の明け方にまで及んだ。一晩中制作にあたった日も少なくなかった。ミニミュージアム制作は大変なものである。楽しもうとするなら、その分内容は薄いものになる。制作するにあたって、ぜひ「学芸員課程のこれまでの学びの集大成」という意識をもってほしい。大変で気が遠くなる分、完成したときの喜びは計り知れない。制作のスケジュールは、私の場合は、とくに決めずにその日の気分で取り組んだ。ポスターは先に完成させておくことでそれに則った制作ができたため、ぜひポスターから制作してみしてほしい。

大学という場合は、これまでの中学、高校よりも自分の好きなものをアピールできる場だと私は考えている。本制作を通して、自分の好きなものの再確認ができたし、設定した目標を達成しようと努力したことで大きな自信にもなった。

優秀作品として、このようにレポートを執筆できていることに感謝したい。持ち帰れないことは残念だが、これからミニミュージアム制作に取り組む後輩たちの参考になればと思う。

# 博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて

経済学部地域経済学科 4年 伊藤 起

## 1. はじめに

博物館経営論では、ミニミュージアムの制作が課せられる。ミニミュージアムとは、発泡スチロール箱の中に自らが計画した展示室の模型を制作し、その展示に関する図録、ポスターも併せて制作するというもので、文字通り小さな博物館をつくるという課題である。数人のグループで博物館を構想・企画する取り組みは博物館実習Ⅲで経験しているが、自分一人で博物館や展示を構想・企画し、それを実際に模型として制作する経験はなく、本講義は楽しみであると同時に不安でもあった。

本レポートでは、ミニミュージアムの制作過程を振り返り、工夫点や反省点などについて述べる。これからミニミュージアム制作に取り組む方々の参考になれば幸いである。

## 2. 構想

ミニミュージアムを制作するにあたり、最初に博物館のテーマを考えた。炭鉱をテーマとした博物館など様々な案が浮かんだが最終的に「小樽運河」をテーマとする博物館に決定した。詳しくは次項で述べるが、かつて運河保存運動に携わった方が運動に関連する資料を現在でも所持しており寄贈先を探しているという報道を目にしたこと、小樽運河の知名度は高いものの歴史や運河保存運動を知らない観光客や市民も多いのではないかと思ったことがこのテーマを選んだ主な理由である。この博物館の名称は「小樽運河記念館」とした。

次に、この博物館で開催する企画展のテーマを考えた。運河保存運動などをテーマにすることも考えたが、小樽運河の歴史と運河保存運動は常設展示にすることとし、企画展では運河保存運動によって知名度が向上した小樽市の観光都市としての歴史を扱うこととした。こちらについても詳細は次項で述べるが、新聞や書籍で小樽市内の歴史的建造物が徐々に減少し、歴史的な景観も失われつつあるという記述を目にし、この問題について行政や市民、観光業界などが向きあう必要があると考えたことがこのテーマを選んだ理由である。企画展のタイトルは「第一回企画展 観光都市・小樽 ～観光都市の歴史～」である。

### 3. 現状分析・ビジョン・コンセプト

本項では実際に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトを基に述べていく。

#### 【現状分析】

##### **あまり知られていない小樽運河の歴史**

現在、小樽運河は小樽市を代表する観光スポットとして高い知名度を誇っています。しかし、なぜ建設されたのか、なぜ役目を終えた今でも残されているのか、などといった小樽運河の歴史を知る機会意外にも少なく、小樽運河の歴史について知らない市民や観光客は少ないのではないのでしょうか。

##### **歴史的建造物の解体と崩れ始めた街並み**

小樽運河とともに歴史的な景観をつくりだしているのが石造倉庫や銀行建築などですが、これらの歴史的建造物が解体されるケースも少なくありません。また、小樽市中心部ではマンションなどの高層建築の建設も相次ぎ、歴史的建造物などがつくりだした歴史的な街並みが徐々に崩れています。

当館は、主に上記2点の問題を解決するため、来館者が小樽運河や運河保存運動の歴史を学び、現在小樽市が抱える課題について共に考えるきっかけになる博物館を目指しております。

現状分析では、小樽運河が高い知名度を誇るものの歴史的背景はあまり知られていないこと、小樽運河とともに歴史的景観をつくり出している歴史的建造物が徐々に失われつつあることという2つの問題を述べた。そのため、来館者が小樽運河や運河保存運動の歴史、歴史的景観が崩れつつある現状を学び、これからの小樽のあり方を行政、市民、観光客らが共に考えるきっかけとなることを目標とした。

また、運河保存運動に携わった人々が個人で保管している運河保存運動関連資料の受け入れ先としての役割を果たすことも博物館の目標とした。

## 【ビジョン(短期目標)】

### 計画から役目を終えるまで

市を代表する観光スポットとなっている小樽運河は、なぜ建設されるに至ったのか、どのように利用されたのか、なぜ機能停止に至ったのか、といった計画から本来の役割を終えるまでの歴史について来館者に知ってもらう。

### 運河保存運動の展開

役目を終えた小樽運河が保存されるに至った背景には運河保存運動がおよそ 10 年にわたって展開されたことがある。運河の一部保存につながり、いまの小樽市の姿をつくるきっかけになった運河保存運動について来館者に知ってもらう。

来館者に展示を通してどのようなことを伝えたいのか考え、上記の 2 点をビジョンとして設定した。

## 【コンセプト(長期目標)】

### 歴史的建造物の保存・歴史的街並みの維持を推進

歴史的建造物の解体や歴史的な街並みの崩壊といった小樽市が現在抱える問題を広く伝え、歴史的建造物の保存や歴史的な街並みの維持について考え、行動するきっかけをつくる。

コンセプトでは、小樽運河の歴史や観光都市・小樽の姿をつくるきっかけとなった運河保存運動について来館者が学んだうえで、小樽市が抱える歴史的景観の崩壊や歴史的建造物の解体といった問題を学び、考え、行動するきっかけとなることを目標とした。

今回のミニミュージアム制作においては、このコンセプトに沿った企画展を制作した。

## 4. 模型制作

模型の制作にあたってはパネルや展示物、出入口などが違和感ないサイズとなるように意識した。

模型制作では、展示室の床や壁面などの制作から取り掛かった。この博物館は 2024 年 3 月末で閉館となった運河プラザ(旧小樽倉庫の一部)を活用した施設として想定しており、展示室は旧小樽倉庫の内装を意識して制作している。展示室の壁面は軟石をイメージしたリメイクシートを貼り、その上には柱をイメージした角材を張り付けている。また、出入口にも実物を参考に石造りのアーチを再現している。床も木目調のリメイクシートを用いて実物に近づけた。ここで使われたリメイクシートや角材は百元ショップで購入したもの

である。柱やアーチは実物を測定して制作したものではなく、柱の本数も実物と大きく異なっているが、旧小樽倉庫の雰囲気は表現できたと思う。

展示は「歴史的建造物の保存・歴史的街並みの維持を推進」というコンセプトに沿った構成とし、来館者が運河保存運動終焉以降に小樽市が歩んできた観光都市としての歴史を振り返り、現

在の小樽市が抱える歴史的景観や歴史的建造物の消失問題について考えることを目的とした。展示は大きく分けて4つの章に分かれており、各章にはタイトルを付与し、導入パネルを設置することで展示の意図をわかりやすくした。

各章の内容と展示品をある程度決めてから展示室の配置を考える作業に入った。この作業では、1～4章まで順番に辿ることができる配置にすること、予定している展示品や解説パネルもすべて収まるようにすることなど考慮すべき点が多く、私の場合はこうした点に加えて実在する建造物をモデルとしていることから入口の場所などにも制約があり、決定までにかかなりの時間がかかってしまった。様々な案が思い浮かんだが、最終的には図1のような配置となった。

展示室の配置が決まると展示品や展示台、パネルの制作に入る。

展示ケースや展示台はすべて百円ショップで販売されている厚紙で作られている。展示ケースは自作する方法と既製品を用いる方法が考えられるが、双方にメリットデメリットがある。当初は既製品を用いることも考えたが、サイズによって展示ケースの設置場所や設置個数が大きく制限されることから自作することにした。展示ケースについては1、2章で用いる大型のケースをガラスで覆われたものとした。ガラスは百円ショップで販売されているプラ板を用いて再現している。また、この大型ケース内にはLEDライトを仕込んでおり、実際に点灯させることができる。このLEDライトも百円ショップで販売されていたものである。このようにケース内にライトを仕込むことができる点なども、展示ケースを自作するメリットとしてあげられるだろう。このほか、建築模型などが展示されている展示台には磁石を仕込んでおり、実際に取り外すことができるようになっている。

展示品は建造物や街並みの立体模型と写真、表が中心となっている。これは企画展が観光都市の歴史を振り返り、歴史的建造物や歴史的景観の喪失を考えることを目的としているため、結果的に観光施設のパンフレットや写真などが多く、立体的な展示品が少なくなってしまうからである。ガラスで覆われた展示ケース内は写真や書籍などを中心に展示しており、ガラス製の浮き球など一部の展示品が立体物となっている。このガラス製の浮き球はビーズに糸を巻き付けて表現している。展示の目玉となる建造物や街並みの模型は展示室の目立つ場所に配置している。こうした展示のほとんどは、模型を囲うように通路を配置し

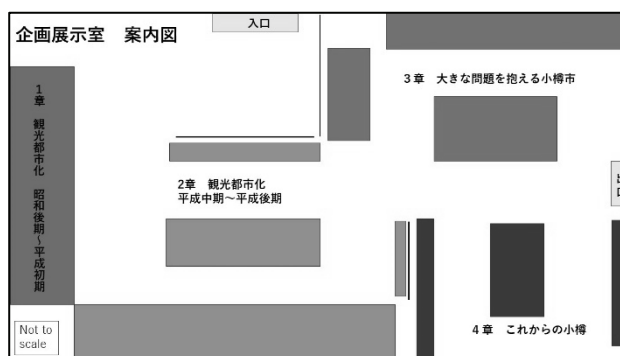


図1 図録に掲載した企画展の案内図

ているため様々な方向から模型を観察できるようになっている。建造物や街並みの立体模型は百元ショップで販売されているスチレンボードを使用している。

展示室内の解説パネルはパワーポイントを使用して制作した。パネルを制作する際には、サイズに違和感がないこと、実際に模型に設置した際に読めることを特に意識した。解説パネルの一部にも磁石を仕込んでおり、取り外すことが可能である。

私のミニミュージアムは、ほぼ全てが百元ショップで販売されているものから作られている。画用紙から木材、手芸用品まで様々な素材が安価で販売されているため、模型を制作する際には百元ショップを利用することをお勧めする。

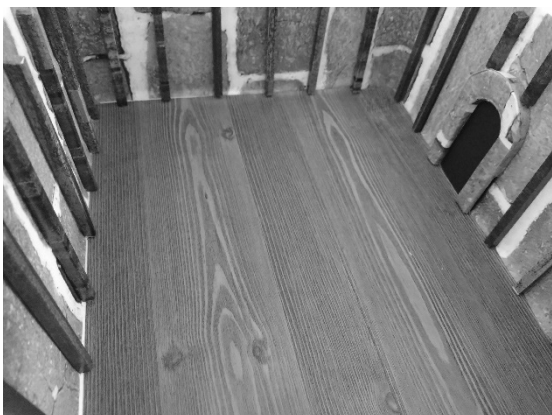


写真1 旧小樽倉庫をイメージした展示室

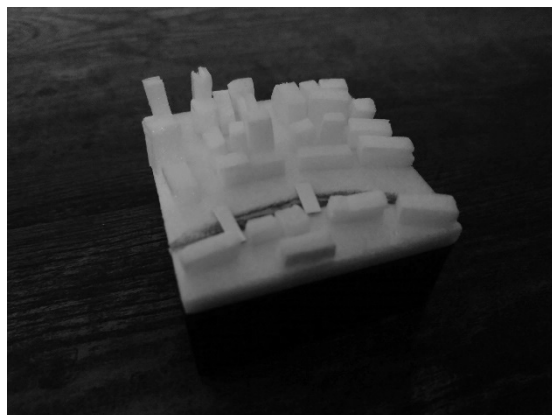


写真2 小樽運河周辺の立体模型



写真3 出口から見た展示室内



写真4 展示室の全体像

歴史的建造物の活用(ホテル・美術館)  
旧北海道拓殖銀行小樽支店

小樽ホテル

旧北海道拓殖銀行小樽支店は企業のオフィスなどに再利用された後、イギリス人建築家ナイジェル・コーツ氏の手により、海がテーマのホテルとして1989年10月に再出発しました。建物の内外に海や航海をテーマとした装飾が施され、客室のデザインは1部屋ずつ異なったものでした。

左 図2 展示解説ラベル



## 6. おわりに

ミニミュージアム制作では、博物館の構想から模型や図録、ポスター制作までを一人で行う必要があり、楽しかった反面、苦勞することも多かった。

私はミニミュージアム制作で重要なことは最初の構想段階と現状分析やビジョン/コンセプトの設定であると思う。これらを明確にしておかなければ、模型や図録、ポスターの制作段階に入ったときに作業をスムーズに進めることができなくなってしまうからである。また、構想の段階で自分自身が興味関心を持つテーマを選択することもとても重要だと思う。これはミニミュージアム制作が数か月にわたるため、自分自身が興味関心を持つテーマを選択した方がミュージアム制作に対するモチベーションを維持し、楽しみながら取り組むことができるからである。実際に私は自身が興味関心を持つテーマを選択したため、楽しみながら作業を進めることができた。

こうした、構想を練る作業に加えてもう一つ重要なのが計画的に取り組むことである。ミニミュージアム制作には数か月の制作期間が与えられているため余裕があるようにも思えるが、作業量も多いため油断していると時間が無くなってしまう。こうした事態を防ぐためにも、計画的に作業を進めた方がよいだろう。特に博物館や企画展の構想を練る作業は遅れるとその後の工程にも大きく影響するため早めに取り組むことをお勧めする。

私のミニミュージアムとレポートがこれからミニミュージアム制作に取り組む方々の参考になれば幸いである。

## 1. はじめに

博物館経営論における課題として、発泡スチロールの箱を利用した個人展示の制作を求められた。私の作品が高い評価を受けた要因は、図録の完成度にある。しかしながら、ミュージアム模型そのものには時間を十分に割くことができず、細部へのこだわりが不足している点がある。

テーマ選びでは大いに悩んだが、最終的にはその時に食べたいと思った「すし」を題材とすることに決めた。安直に決めた題材だが、すしを通じて、訪問者に現在の水産資源問題について考えてもらう展示を目指した。

展示の構成は以下の4章からなる。

1. すしとは何か：すしの歴史と文化的背景を紹介し、その魅力を訪問者に伝える。
2. 材料について：すしに用いられる主要な材料とその特性、選び方を解説する。
3. 握る体験コーナー：訪問者が実際にすしを握ることやまぐろの解体を模型で体験することができる体験型のコーナーを設置し、インタラクティブな経験を提供する。
4. 現代問題について：現代における水産資源の持続可能性の問題に焦点を当て、未来に向けた解決策を考察する。

このあらすじや構成は早期に決定していたが、制作作業に着手したのは締切日の2週間前であった。急ピッチでの制作作業は困難を伴ったが、多くの学びと成長を得る結果となった。今後は時間管理を改善し、さらに充実した展示制作に臨みたい。

図録作成において、私が最も重視したのは、来館者が理解しやすく、展示の内容をいつでも振り返って復習できるようにすることであった。図録は単に展示の補足資料として存在するのではなく、訪問後も来館者の記憶を呼び起こすツールとして機能することが重要であると考えた。

文章に関しては、各展示物の解説やバックグラウンド情報をわかりやすくまとめ、専門的な用語の使用は必要最低限に押さえた。情報の正確さを保ちつつも、親しみやすい語り口を意識し、来館者が興味を持ちながら読み進められるよう腐心した。さらに、読み手が各セクションを単独で読んでも展示全体を思い出せるように、各章を一貫したトーンでまとめた。

ビジュアル面では、多くの写真や図解を多用し、来館者が視覚的に展示内容を補完できるようにした。写真や画像には詳細なキャプションを添え、どのページを開いても展示の全体像が分かるようという部分を重要視した。

作成にあたって気を付けたこと、作成してみて実感したことなどを以下にまとめる。

## 2. 作成にあたって

博物館経営論における展示制作の課題に取り組む際、私はまず展示の大まかなレイアウトを決定し、その後は小道具の準備に集中していった。この過程では、さまざまな素材とアイデアを活用する必要があり、自分の創造性を試される貴重な経験となった。特に、発泡スチロールにランダムに穴を開け、その廃材を使って新たな展示物を創作する作業は、創造力を大いに発揮する場であった。このような制作活動を通じて、材料の有効利用と環境への意識を再認識することができた。

材料調達では、100均ショップの役割が大きかった。そこで購入したものは、紙粘土、暖簾用のてぬぐい、釣り用のキラキラした装飾品、テレビの小物、すし屋の扉のようなディスプレイアイテム、リメイクシートなどである。また、自宅にあったエコクラフト、プリンターで出力したコピー用紙、透明のクリアファイルも活用した。その中で特に役立ったのがリメイクシートとコピー用紙であり、これらがなければ展示の品質を維持するのは難しかった。リメイクシートは展示の表現力を高める魔法のようなアイテムであり、その重要性を痛感した。これから制作に挑む人にはぜひとも購入をおすすめする。発泡スチロールの無機質な白い壁が一瞬にして雰囲気のある建物の内部のように変わる効果を提供してくれる。

展示作成の過程で学んだ最も重要な教訓は、計画性とコスト効率である。実際の博物館の展示制作でも、数年間にわたる詳細な計画が必要とされることは少なくない。そして、実際に展示を作る上で、ミニミュージアム向けの模型制作にもその経験が生きてくると感じている。どれほど低予算で高品質の成果を出せるかが、プロジェクトの成功に大きな影響を与えるはずである。今回の制作では、余裕がありすぎたことから計画性が欠如し、理想の作品を完成させるには至らなかった。次回の機会には、ダンボールシート、コピー用紙、リメイクシートを駆使し、2,500円以内でクオリティの高い模型を作成したいと考えている。紙粘土については、使い慣れれば非常に扱いやすいが、造形には技術が必要であるため、初心者にはミニチュアを購入することがクオリティを高める近道ではないかと感じた。

模型を作成していくうえで変更した点がある。模型制作を始めたころは、発泡スチロールに紙粘土で作った魚の模型を針金で固定し展示することを考えていた。しかし、紙粘土に色を塗るのは予想以上に難しく、乾燥にも時間がかかってしまった。また、個性を出して造形することが意外と難しく、時間もかかることを学んだ。そこで最終的には、魚の写真のコピーを貼り付けることでリアルに表現する方法へと変更した。パネルの加工に関しても、初めはラミネート加工を考えていたが、反射が強く見づらくなる問題が発生したため、コピー用紙を貼るという方向に切り替えることにした。このような模型制作においては、状況に応じて臨機応変に対応することが重要であることを痛感した。

今回、制作の本格的な開始が遅く、準備不足が否めなかったため、特にこだわったのは図録の作成であった。なぜなら、デジタルツールでつくれるため、時間や場所を選ばずどこでもできたからである。図録はデジタルツールを駆使して作成し、コピー用紙を用いてデザインと内容を高品質に仕上げることを目指した。模型作りには適度に専念しながらも、

図録の制作には提出前日の夜遅くまで工夫を凝らした。さらに、ポスターも三種類作成し、家族にアンケートを行って最も良いものを選定した。図録のデザインは、過去に訪れた特別展の図録を参考にしていたため、洗練されたデザインを実現できた。以前から収集していた特別展の図録が将来的に役立つことを改めて実感し、今後も訪問先で新たな図録を手に入れる重要性を再認識した。

図録を作成するにあたって重要視していた部分がある。図録とは、来館者に作品のコンセプトや背景を理解してもらうための重要なツールであり、正確かつ魅力的な情報提供が求められる。そのため、図録の作成においては、デザイン性だけでなく内容の完成度にも細心の注意を払った。

まず、デジタルツールを活用して、図録の基本デザインを制作した。この段階では、過去に訪れた特別展の図録をリファレンスとして活用し、様々なレイアウトやビジュアル要素のアイデアを取り入れた。特に、図録の視覚的な美しさと情報のわかりやすさのバランスを重視し、読み手にとって見やすく、かつ理解しやすい構成に仕上げることを目指した。

次に、図録の内容については、各展示物の解説や裏話を自ら執筆した。信頼性と正確さを担保するため、情報のすべては入念にリサーチを重ねた結果である。大体10冊ほどのすしに関する本を熟読してから執筆に挑んだ。また、文章の一部はAIのアシストを活用して洗練し、客観的でプロフェッショナルな印象を与えるよう努めた。AIは特に文体の一貫性を保つのに役立ち、時間の効率化にも繋がった。

製本には家庭用プリンターを活用し、コピー用紙を用いて印刷した。印刷後はそれぞれを手作業で折り、製本の工程を経て完成させた。限られた予算の中で最大限のクオリティを追求するため、手作業を通じて温かみのある仕上がりを心掛けた。

最終的に、完成した図録はポスターと同様に、家族、AIに意見を求めることで、客観的な評価を得て改善を図った。このプロセスを通じて、他者の視点を取り入れることの重要性を再認識した。学んだことは、実際の博物館では常に自らの言葉で書くべきだが、見栄えを重視する今回の戦略的選択としてAIを活用した文章作成は、今後の様々な場面で役立つ可能性があるということである。

図録制作は、展示全体の中で観客にメッセージを伝える大切な役割を担っている。総じて、細部にわたる工夫と綿密な計画が欠かせず、これをしっかりと実行することで、来館者にとって意義深い情報を提供できることを実感した。これから展示制作を行うすべての人に、計画的かつ創造的に図録作成に取り組むことをすすめる。

このようにして、私の展示は無事に完成し、次回の展示制作に向けた貴重な学びと経験を得ることができた。

### 3. 評価会

評価会は学芸員実習室で行われ、博物館経営論の受講生がそれぞれ完成させた模型、図録、ポスターを持ち寄って参加した。参加者たちは個性豊かな作品を提出し、会場は非常に活気に満ちた雰囲気であった。

評価は各自が数人ずつのグループを構成し、互いの作品について評価し合い、感想を評

備シートで提出する形式で進行した。このインタラクトは学生同士の意欲を刺激し、互いの創意工夫を知る貴重な機会となった。最終的に、全体の評価に基づき、それぞれの模型



図1 ポスター案 真ん中のものを採用



ごあいさつ

本展示会に惹かれたとき、心より感謝申し上げます。  
この展示会では、「すし」の魅力、その持続可能性に関する重要な課題について紹介させていただきます。  
近年では、すしの魅力が日本国内にとまらず、世界に広がりをみせています。しかしその背景には、私たちが直面している重要な課題があるのです。  
地球温暖化が進む現在、大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスの増加が、地球全体の気温を上昇させています。この温暖化の影響は、私たちの海にも大きな変化をもたらしています。日本近海では、海面温度が「1℃で上昇」この変化が漁業や海洋生態系に深刻な影響を及ぼしています。いかに温暖地であった海産物でも、今はホリのほろがく獲れるようになってきました。  
また、過去数十年の間、日本の「魚種」が激減していること、見逃すまい。20年代には世界の魚介類消費量を誇っていた日本が、現在では順位を落としています。この消費量変化は、魚の漁獲量の多様化やフィッシュスタイルの変化が影響していると言われてます。さらに、魚の消費の減少やスーパーでの魚の扱いの変化が、魚料理の調理や購入のハードルを高めてもつ「因」です。このような背景の中で、私たちの食文化と海洋環境の未来を守る「一層」を提案させていただきます。  
本展示会を通じて、すしの文化的価値と、その背後にある課題について少しでも深く知ってもらい、この目的です。さあ、展示会を待たず、あなたも早速、魚介が今後行動に繋がることが願っています。

どうも、展示を「めく」に「めく」たい。

主催者

図2 大胆な写真の挿入によるアイキャッチ



図3 白を基調にすることでコストカットとシャリをイメージ

や図録、さらには総合得点を基に数人が選抜され、優秀作品として提出されるという形の評価会であった。

その中で、私の図録が特に高く評価された。特に評価されたのがデザインであった。こだわった部分だったので、実際に好感触の評価をいただき、うれしかったことを覚えている

る。特に、新聞のようだ、という意見や、このまま販売できそう、といった声は記憶に新しい。見やすく読む気になれるようなデザインを目指したので、注力した部分が正統に評価され、伝わりやすかったことを実感できた。

このことによって、このレポートを書く機会を得ることができた。図録制作に注力した成果が認められたことを大変嬉しく思うと同時に、さらなる改善と挑戦を続けたいという意欲が湧いている。全体的に、評価会は新たな視点を学び取るとともに、自らのアイデアを披露する充実した場であった。



図4 図や背景に魚を入れることで文字だけよりも読みやすくした

#### 4. おわりに

博物館経営論の課題として、発泡スチロールを用いた展示制作に取り組んだ結果をまとめると、以下ようになる。

テーマは「すし」に決定し、その歴史や現代の水産資源問題を考察する4章構成で展示を行った。制作には100均の材料や自宅の素材を駆使し、リメイクシートとコピー用紙を特に活用したが、計画性に欠けた点が反省点である。

模型制作では紙粘土の扱いに苦勞し、最終的に魚の写真を利用し、パネルには反射防止としてコピー用紙を使用した。

図録作成に最も大きな力を注ぎ、来館者にとってわかりやすく振り返りやすい内容を心がけた。

デジタルツールを駆使し、親しみやすく正確な情報を提供するよう努め、AIを使った文章作成にも挑戦した。

評価会では、この図録が高く評価され、今後の展示制作に向けた貴重な学びとなった。今後の制作に当たっては、計画的かつ創造的に取り組むことが重要であると実感している。

## 『博物館の形態の変化』と講評

北海学園大学講師 水崎 禎

### 博物館の形態の変化

昨今の博物館展示の形態、およびテーマについては分かりやすいトレンドの変化を感じる。日本の学芸員課程の変遷をみると、これまで何度かの大きな転換期があったと言える。これまでは「博物館（ミュージアム）の展示」とはみなされなかったものが、「博物館（ミュージアム）の展示」として開催されたり、これまではメインとして扱われることが稀であったテーマが、特に企画展で見られるようになった。

前者の代表的なものとしては、以前はデートスポットとしてのアミューズメント・パーク的な要素が濃かったものに、最新のテクノロジーを活用したシステムやデジタルコンテンツをメインに取り入れたものなどが挙げられる。このような展示がいわゆる生粋の美術館とされてきたミュージアムの特別展として開催されたことが、ミュージアムの進化の大きな分岐点であるといえる。

後者の代表的なものとしては、アニメと関連付けた展示がある。主に北海道の歴史/民族系の博物館での風潮はよく知られているが、美術系のミュージアム（美術館）での展示で、伝統的な日本画にアニメを取り入れた作品の企画展なども、この流れの一端といえる。

このようなトレンドは、一般人（ここではミュージアムの専門家ではない人）に、本質的には博物館ではないものを博物館であるとの誤解を助長することにもなるが、全くのネガティブな風潮とも言い切れない。世間の博物館の利用者については、「博物館そのものに興味があり頻繁に訪れる」「興味がある/話題性がある企画展へは行く」「全く興味がなく滅多に行かない」の3つに分けられる。museum-goer と呼ばれる博物館によく行く人と、そうではない人との間には明確な壁がある。しかし、上述したトレンドは世間のミュージアムというものに対する認識に変化を促すきっかけとなり、これまで博物館という存在に距離を置いていた人たちの意識と行動に作用する。このような観点に立てば、この風潮はポジティブに捉えることができる。

極端な言い方をすれば来館者が博物館をどう捉えて、どのような目的で訪れるかは自由である。もちろん博物館の定義を理解して博物館を取捨選択する必要はない。学芸員は、来館者が意識的、無意識にかかわらず、何かを効果的に得てもらう方法を模索しなければならない。

学芸員課程では、このような時代の流れに即した変化を敏感に感じ取り、博物館として適応していく感性を養うことも求められる。授業では教える側も如何にこれらを意識して授業に取り入れるかが大切である。

## 博物館概論の授業での取り組み

ここ数年の『博物館概論』では、博物館法の改正と、その根拠を強調した講義を組み込んだ。『博物館概論』での主たる目的は「博物館とは何か？」についてのしっかりとした理解である。その中で「博物館の定義」についての言及は必須である。しかし、この「博物館の定義」は万国共通で唯一無二の定義が存在しているわけではない。様々な団体、組織、機関、国が、それぞれ独自の表現で定義している。日本に於いては、学芸員課程では日本の博物館法での定義を用いることが多いのは当たり前ともいえる。一方で、博物館関連の学会に積極的に関わっている人たちの間では、行政に関する事項では日本の博物館法に言及するが、「博物館とは？」については他の機関等の定義を引用することが多い。最近では ICOM (International Council of Museums) による定義を引用する博物館研究者が多い傾向が顕著にみられるが、どこの定義を支持するかは時代によって変化し、前述のように唯一無二の絶対的定義でもない。私個人の見解ではあるが、日本の博物館法の定義が中心となっていた時代もあり、アメリカ博物館協会の定義が支持されていた時代もある。これについてはその時々博物館関連学会で影響力がある人とその支持者の意見が色濃く出ているということである。

これらを踏まえ、授業では一つの団体による定義に固執せず、表現は異なるものの各定義の根底にある共通事項を見出せるよう、公正な立ち位置での定義について述べている。また、新たな形態のミュージアムや展示テーマについても積極的に言及し、学芸員としてどう評価するかについても言及している。時代の変化と世間が求めるものに対応する中で、博物館として欠かせない要素を如何に取り入れるかの重要性を伝えることが大切である。この点が疎かになれば、博物館の変化は「進化」ではなく、「崩壊」となってしまう。

## 博物館資料論の授業での取り組み

『博物館資料論』では、ここ数年はデジタル・アーカイブの在り方と、その活用について授業に取り入れていることは、これまでの学事報告書内で言及しており、引き続き活用事例等の充実を図っている。今年度、新たに意識して強調した事項の一つとして資料のインタープリテーションについて挙げられる。館の所蔵資料を柔軟にインタープリット（解釈）することが、資料の可能性を伸ばし、新たな展示テーマへとつながる。固定された museum-goer に加え、新たな形態のミュージアム利用者へ働きかけることにつながる。たかが新たなインタープリテーションではなく、これを意識することが資料としての価値を高め、新たな観点による活用で博物館の魅力をより多くの人々に知ってもらう糸口ともなる。言い換えるならば、博物館資料の多角的、かつ柔軟なインタープリテーションが、博物館自体の価値と可能性と高めることができるということである。

このような考えから、次年度以降も授業内でモノのインタープリテーションにおいて柔軟に捉える感性を養うようなアクティビティを意識していく。そして、授業で養った感性を学芸員課程の他の科目でも積極的に応用する姿勢を促していく。

## 博物館資料ドキュメント 『ミニーマウスのポーチ』

法学部法律学科2年 若杉 彩花

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

ジッパーがついており、中に物を収納することができる。収納するものは個人の自由であり、メイク用品を入れたり、筆記用具を入れたりと様々な用途で使用することができる。収納できる容量についてはものによって異なり、中に仕切りや別ポケットが付けられている実用性の高いものや、デザイン性を重視したものなど様々である。今回レポートで扱う「ミニーマウスのポーチ」は、ウォルト・ディズニー・カンパニー（通称:ディズニー）のキャラクターであるミニーマウスの顔面が正面に9体デザインされている。それぞれのミニーマウスが3.4cm間隔で並んでおり、縦3列に配置されている。その内4体の顔面は見切れている。裏面には「Minnie Mouse」の文字が黒で書かれており、背面を正面とした際に、左から5.3cm上から5.2cmの位置が一つ目の「M」の左端となっている。資料正面は、ナイロンのような素材が使用されており、赤、黒、グレー、白の4色で構成されている。背面の素材は帆布であると考えられ、色は蒸栗色である。裏面は、正面のナイロン素材と背面の帆布素材がちょうど半分の位置で縫い合わされている。ポーチの中は赤いナイロン生地が使用されており、縦9.0cm横12.5cmのポケットが付けられている。ファスナーは黒く、エレメントはプラスチック製である。持ち手部分はレザー製となっており、赤く塗装がされている。

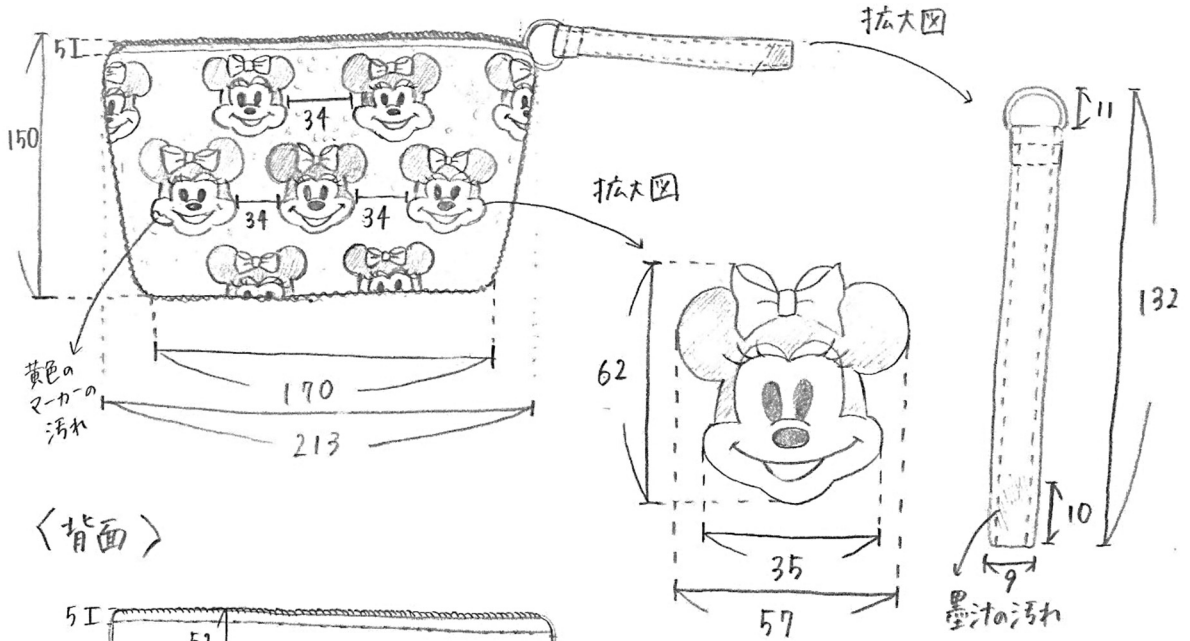
### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料の所有者である若杉彩花氏が、2019年11月に東京ディズニーランドのお土産として両親から貰ったものである。この資料は、当時14歳であった若杉氏が、所属していた部活の全国大会で岡山県に行った際に、会場まで応援をしに来てくれた父、母、妹が、その道中に立ち寄った、東京ディズニーランドにて購入したものである。そのため、若杉氏はこの資料を見ることで、全国大会の記憶が思い起こされ、中学生時代を懐かしむことができる、思い出の深い物となっている。両親と妹がディズニーランドに行くことはあらかじめ決まっていたため、この「ミニーマウスのポーチ」は、東京ディズニーリゾートの公式ホームページのグッズ一覧を見て、若杉氏が自ら選び、両親に現地で購入してきてもらった。

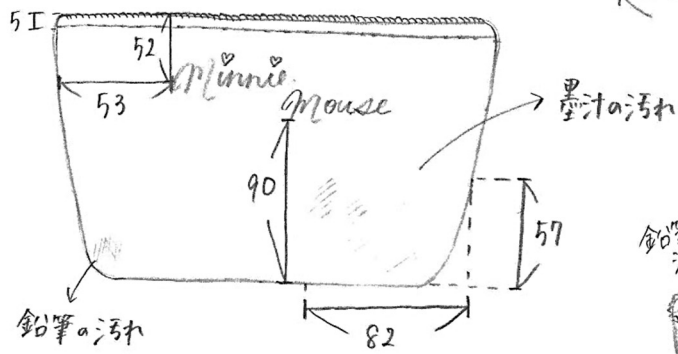
また、この資料は、若杉氏が中学生のときに筆記用具入れとして使用しており、ジッパーが閉まらなくなってしまう（後述）までの約4ヶ月間使用していた。そのため、若杉氏が通っていた中学校の2019年度の卒業アルバムには、この資料を使用して授業を受けている、当時14歳の彼女が映っている。

イラストレーション (Illustration)

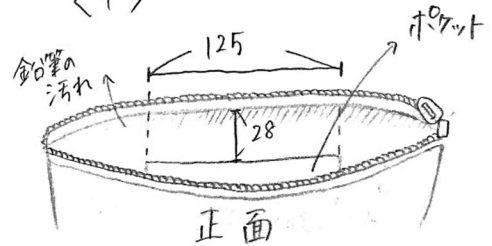
<正面>



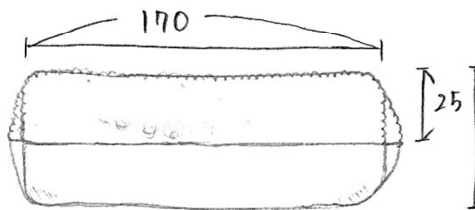
<背面>



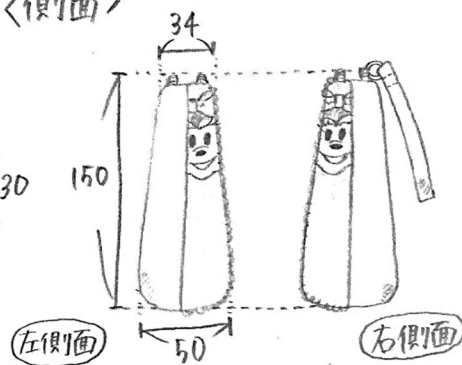
<中>



<裏面>



<側面>



[単位 : mm]

## コンディション・レポート (Condition Report)

まず、資料正面について述べる。左から 1.2cm 下から 1.5cm の部分に黄色のマーカーペンでついた汚れが見られる。また、ミニーマウスの顔面の白い部分が薄く黒ずんでいるのが見受けられる。先述したとおり、資料正面の素材はナイロンが使用されていると考えられるが、左から 10.1cm 上から 5.3cm の部分に糸のほつれが見られる。次に背面について述べる。背面を正面とした際、右から 8.2cm 下から 5.7cm の範囲に薄く墨汁の汚れが見られる。また、左下の角には、鉛筆による汚れのようなものがある。ほつれや破けは見られない。ポーチの中に関しては目立った汚れは見られないが、ジッパー付近が薄く黒ずんでおり、これは鉛筆による汚れであると考えられる。また、ジッパー部分はスライダーがエレメントから外れてしまっているため、エレメントが噛み合わなくなっており、ジッパーを閉めることができなくなっている。そのため、ポーチとしての実用性を欠いている。持ち手に関しては、端の部分の赤色の塗装がところどころ剥がれて中の素材が露出しており、表面の下から 1.0cm までの範囲に墨汁がついている。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

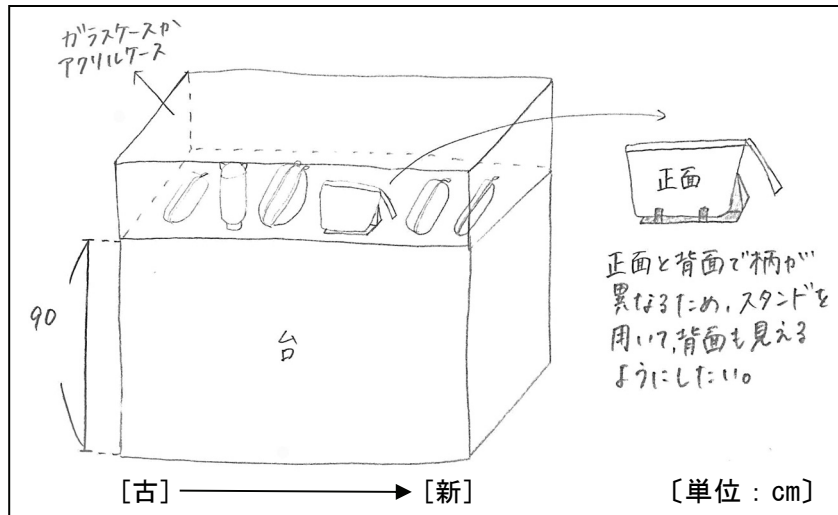
資料背面の帆布は湿気に弱いことが予想されるため、高温・多湿の場所は避けて保存する必要がある。カビやシミの発生を防ぐと言う面においても、高温・多湿の場所は避け、風通しの良い場所で保存することは重要である。また、帆布は変色しやすく、時間の経過に伴って色の変化が生じてしまうという特性を持つため、変色を早めてしまうことのないよう、直射日光の当たる場所を避けることが望ましい。資料を収蔵庫から移動させて作業をする際は、遮光カーテンのある部屋で作業をするなどの工夫が必要である。資料正面においては、遊び毛が出にくいナイロン製であるが、引っかかるとほつれてしまう恐れがあるため、突起物がない場所で保存することが望ましい。また、この資料のすぐ近くに物をおいてしまうと引っかかりの原因となってしまうため、物の混在する場所には保存しないことが賢明である。持ち手の部分については、保存する際に使用するケースや他の物との軽い接触によっても、塗装が剥がれてしまう恐れがあるため、動かないよう固定しておくことが望ましい。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

資料正面のナイロンは、摩擦に強く、遊び毛が出にくいという素材特性をもつが、取り扱いにおいては細心の注意を払う。赤、黒、グレーの部分に比べて白の部分は汚れが目立ちやすい。資料背面の帆布については、他の布と比較すると耐久性に優れており丈夫であるという特性があるが、持ち手の部分に関しては、摩擦や衝撃によって塗装が剥がれてしまうこと、持ち手との連結部分に過度の力が加わることが懸念されるので、場所を移動させる際には、持ち手部分のみを持つことは控え、全体を両手保護するようにして移動させることが望ましい。

## エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

透明ケースの中に他の資料とともに並べられており、来館者がケースの中を覗き込んで見るタイプの展示とする。展示台の高さはおよそ 90cm に設定する。この資料の他には、所有者（若杉彩花氏）が中学生時代であった 2017 年度～2019 年度に学校で使用していたものが年代順に並べられている。当時、若杉氏は筆箱を集めることが趣味であったため、使用していた順番に並べて置くことで、彼女の趣味趣向の変化が見てとれるようにする。筆箱の他は、当時使用し



ていた給食セット（エプロン・三角巾）や、アルトリコーダー、ボールペンやマーカーペンで線が引かれた教科書などを展示する。教科書やノートの展示によって、若杉氏の 2017 年から 2019 年にかけての勉強法の変遷を見ることができる。

## レーベル (Label)

若杉彩花氏が中学生時代（2017 年度～2019 年度）に学校で使用していたものの展示であるため、教科書や学校を彷彿とさせる書体を選択。

書体：UD デジタル教科書体 N-B

文字サイズ：資料名 20 ポイント、説明文 13 ポイント

### ミニーマウスのポーチ

若杉彩花が 2019 年 11 月から約 4 ヶ月間、  
筆記用具入れとして使用していたもの。

ジッパーは閉まらず、中に物を収納することはできないが、沢山の思い出が収納されている。

博物館資料ドキュメント 『アイドルホース・ディープボンドのぬいぐるみ』

人文学部日本文化学科 2 年 荒屋敷 詩乃

オブジェクト・ディスクリプション・レポート(Object Description Report) - 1

資料名：アイドルホース・ディープボンドのぬいぐるみ			
製作者：株式会社 中央競馬ピーアール・センター		販売店：ターフィー通販クラブ	
製作国：中国		販売価格：1,800 円（税込み）	
製作年：不明			
製作費用：不明			
サイズ：			
全長（頭から尾先）	約 21.0cm	幅	約 17.0cm
奥行（脚から尾先）	約 21.0cm	頭（縦）	約 13.0cm
鼻先（横幅）	約 6.0cm	後頭部（横幅）	約 8.0cm
体（縦）	約 9.0cm	体（横幅）	約 10.0cm
前脚（長さ）	約 9.0cm	前脚（直径）	約 3.0cm
後ろ脚（長さ）	約 8.5cm	後ろ脚（直径）	約 3.5cm
尾（長さ）	約 11.0cm	耳（長さ）	約 3.0cm
ゼッケン（縦）	約 11.0cm	ゼッケン（横）	約 5.5cm
ペンダント（縦）	約 4.5cm	ペンダント（横）	約 2.0cm
材質：			
本体	ポリエステル		
中綿	ポリプロピレン		
馬具・ゼッケン	合皮		
バンテージ	フェルト		
毛（たてがみ、尾）	ポリエステル		
目	ポリ塩化ビニル		
ペンダント	鉄（表面にレジン）		
[---であると推測される]			
カラー：			
馬体	こげ茶		
目、たてがみ、尾、脚先	黒		
馬具、流星	白		
ゼッケン	赤、白		
バンテージ	青、白		
ペンダント（チェーン）	金		

この資料は、さまざまな布を縫いあわせてつくられたぬいぐるみである。付属のタグによると、対象年齢は6歳以上である。

この資料は、アイドルホースオーディション 2022 というオーディションを経て製作された「ディープボンド号」（以下、ディープボンド）のぬいぐるみである。アイドルホー

スオーディションに関しては、「オブジェクト・ディスクリプション・レポート - 2」に記述している。

ディープボンドとは、2019年から2024年まで活躍した日本の競走馬である。オーナーは前田晋二氏で、厩舎は大久保厩舎に所属していた。大久保厩舎所属馬は、白い馬具を着用しており、その様子が本資料にも反映されている。また、モチーフとなった馬と同じ流星（額にある白い模様）が忠実に再現されている。

この資料は、2022年の第70回 阪神大賞典を勝利したときがモチーフとなっているため、ゼッケンにはレース名、馬名と当時の馬番が記載されている。資料の首元には、カラフルな背景と「アイドルホースオーディション 2022」の文字が書かれている。付属のタグの表紙には、「アイドルホース selection」と、レース名、馬名が記載され、背景に勝負服がデザインされている。タグを開いた内側には、本馬に関する情報の馬名、馬主名、厩舎、生産牧場名、三代分の血統表、そして、資料を扱うにあたっての注意事項が記載されている。裏面には、勝負服のデザイン、販売元とその連絡先、タグの材質と資料の製造場所が記載されている。

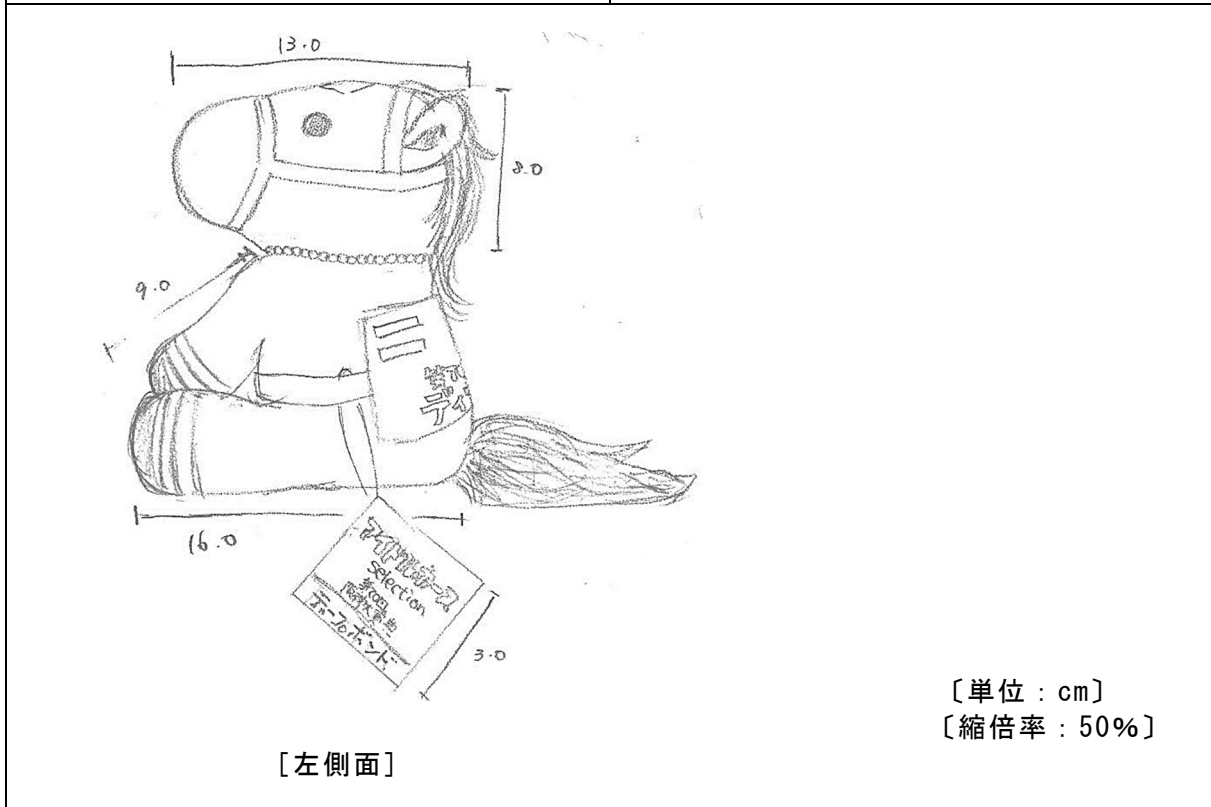
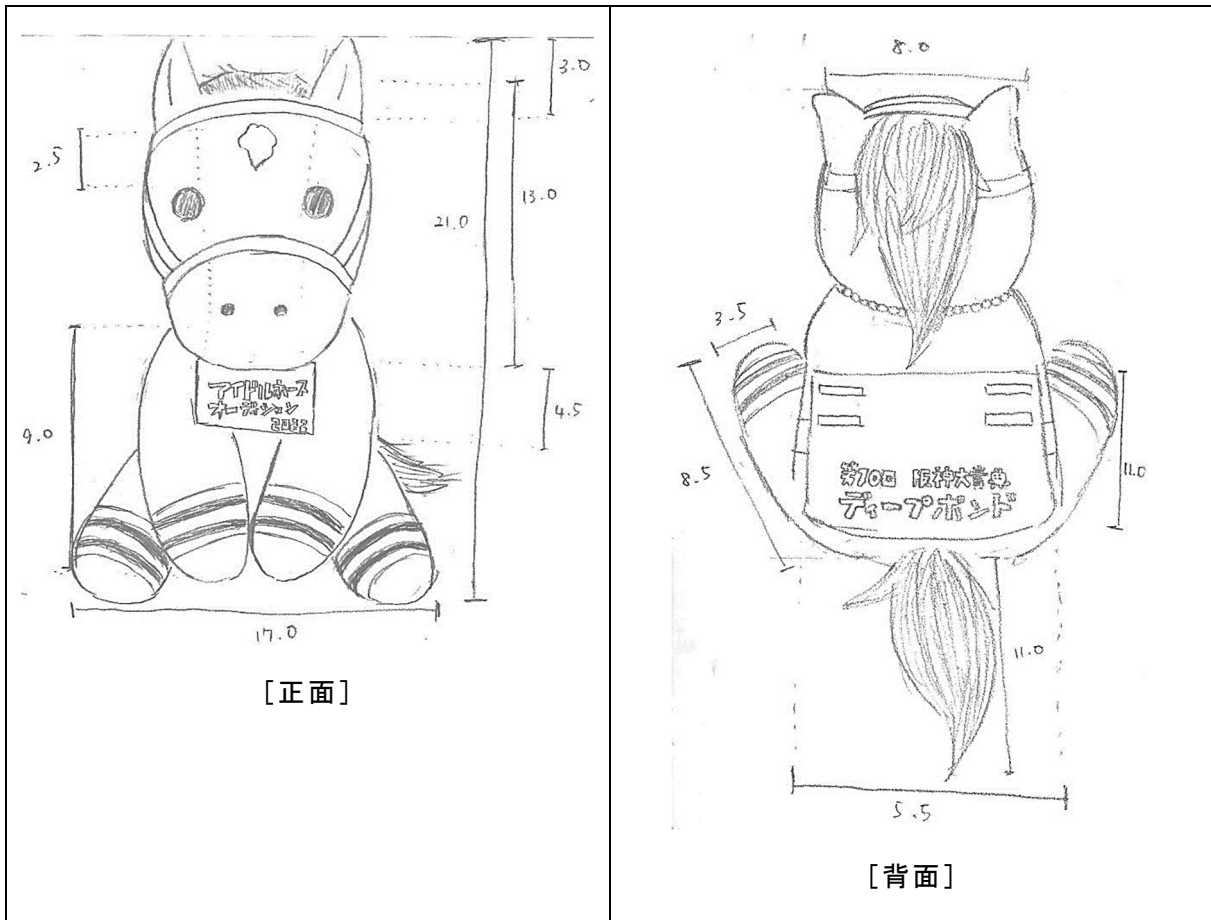
## オブジェクト・ディスクリプション・レポート(Object Description Report) - 2

所有者は、2024年5月にオンラインストアにて本資料と同じものを3点購入した。価格は1,800円（税込）である。所有者は、ターフィー通販クラブという製造会社が運営するオンラインストアにて購入したが、JRA（日本中央競馬会）が運営する施設（競馬場、ウインズ）の売店（ターフィーショップ）や、その他観光牧場の売店・オンラインストアでも取り扱っている場合がある。本資料モチーフのディープボンドはG1競走の優勝記録はないものの、その活躍から多くのファンがいるため、ターフィー通販クラブでは売り切れになっていることが多い。

本資料が製作されるきっかけとなった、「アイドルホースオーディション 2022」は、京都競馬場が主催となって開催されたファン投票である。製作会社ホームページによると、そもそもアイドルホースが製作される基準は、明確には決まっていないが、日本ダービー、オークス、有馬記念を優勝するか、G1競走を2勝以上した場合に製作されているようである。先述のような格の高いレースで勝てなかった競走馬や、すでに引退してしまった競走馬のぬいぐるみを製作すべく、オーディションが毎年行われている。2022年は、一次投票で投票数の多かった上位10頭からさらに人気投票が行われ、上位5頭のアイドルホースが製作された。ディープボンドは3位であったため製作された。しかし、人気は殺到し販売開始直後に完売となってしまったため、所有者はその当時は購入ができなかった。そして2024年の4月に再販売が行われ、購入に至った。

所有者が同じものを3点購入したのは、所有者はぬいぐるみの写真を撮ることを趣味にしているため、外に連れ出すものと、自宅で保管するものとを分けたかったためである。3点目の用途は未定であるが、ディープボンドの次の職業の誘導馬に関する装飾を施すなどを検討している。

イラストレーション (Illustration)



[単位 : cm]  
[縮倍率 : 50%]

## コンディション・レポート (Condition Report)

この資料は、所有者が保管/鑑賞用としているものである。保管用のため、状態は良好である。糸のほつれや、ゼッケン部分の傷などは見受けられない。しかし、本体の表面から中の綿の繊維が飛び出ている部分が、全身の各所で見受けられる。これはぬいぐるみではよく見られることであるため、欠陥ではなく、特性と捉えることができる。ペンダントのレジン部分の表面に擦り傷が見られる。これは初期傷であると考えられる。確認当時は発見されなかったが、たてがみや尾から毛が抜けている可能性が考えられる。

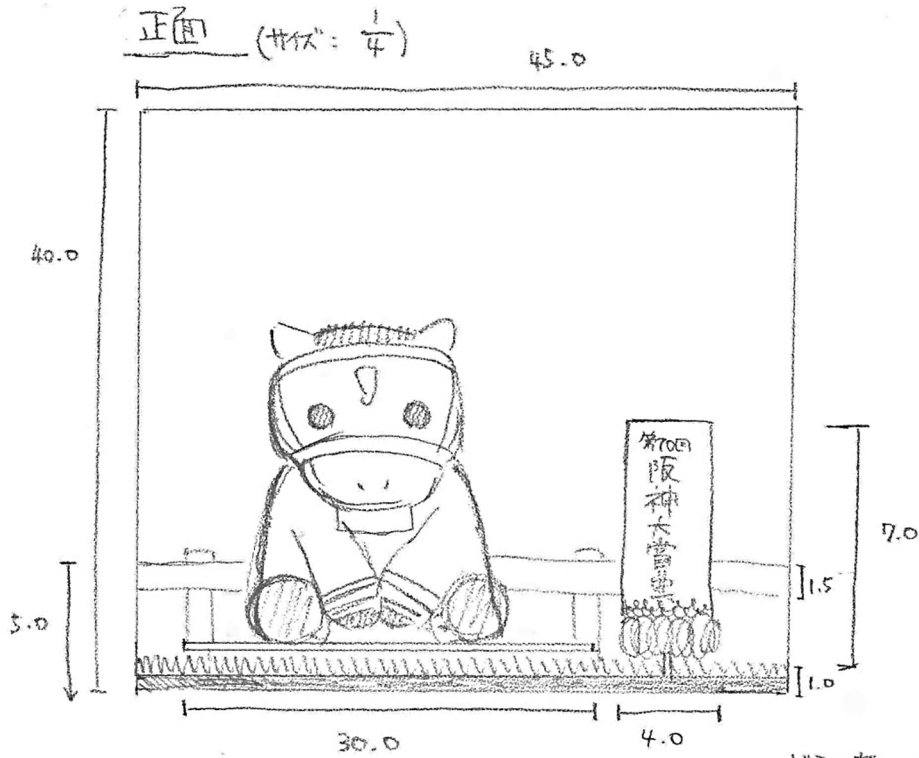
## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料は布製品のため、カビの発生が懸念される。そのため、高温多湿の場所での保管は避けなければならない。また水分が付着すると、ゼッケンや馬具の部分が変色したり、ペンダントのチェーンが錆びたりする可能性があるため、水のある場所は避けるべきである。直射日光によっての色あせ・変色も想定されるため、収蔵庫から移動しての作業の際には、直接日光が当たらない場所で行うべきである。虫などの発生によって布部分に損傷が与えられる可能性が考えられるため、IPM等の防虫対策を行う必要がある。

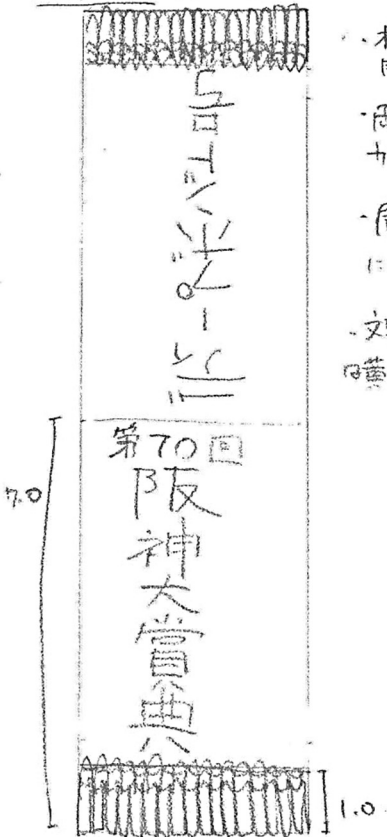
## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

本資料の大部分を占める材質が布であり、布同士をつなげている糸が切れたり、ほつれたりすることが無いよう扱う必要がある。接続部分だけでなく、刺繍にも糸が用いられているため、その部分にも損傷を与えないよう注意が必要である。また、合皮部分もこすれや何かが引っかかることで、簡単に表面が剥げてしまうことが想定されるため、注意が必要である。具体的には、扱う際に爪が引っかかることや、鋭利なものが干渉することで傷を与える可能性があるため、爪が伸びていないか、周囲に危険物がないかを確認する必要がある。フェルト部分はこすれによって、毛玉ができる可能性があるため、フェルト同士を過度にこすりつけないようにし、摩擦が発生しやすい衣服で扱わないようにすべきである。たてがみや尾部分の毛は大変抜けやすくなっている。本体から抜けるだけでなく、毛が切れる場合もある。該当部分を引っ張らないようにするのはもちろん、極力触らないようにすることが望ましい。抜けているように見える毛も、くっついている場合があるため、むやみに触れての確認は避けるべきである。皮脂などの付着による劣化を防ぐため、手袋を装着して扱うことが理想である。なお、ゴム製の手袋を用いると、摩擦によって毛が抜けてしまう可能性があるため、他の素材の手袋を装着する。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)



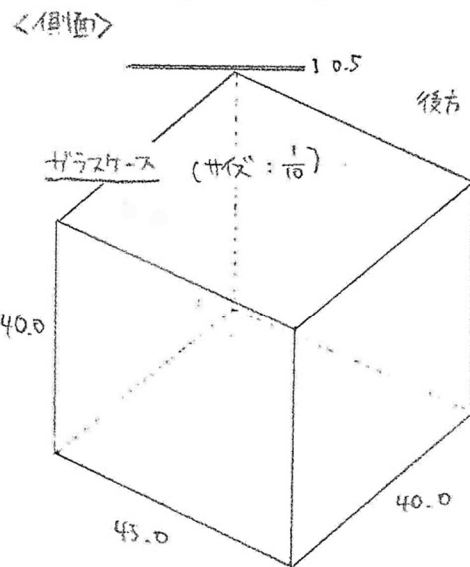
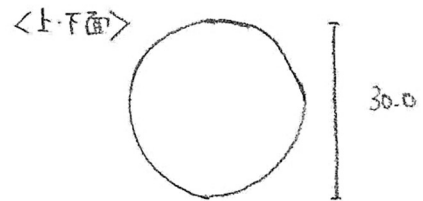
優勝旗 (サイズ: 原寸)



- ・材質には透明アクリル板を用いる。
- ・両端はフリンジのよう加工を行う。
- ・表示ではT字型の器具に付ける。
- ・文字、フリンジは藍色、本体は白。



ガラス板 (サイズ:  $\frac{1}{10}$ )



本資料は、競走馬がモデルであるため、競馬場をモチーフとした展示を行う。また優勝した事実も視覚的に表現したい。

展示の際の光は、資料の材質に影響を与えない照度とする。資料は透明ケースの中で展示する。

ディーポンドは芝のレースで活躍したため、台座部分は芝を表現すべく、人工芝を敷く。芝が引っかかり資料が損傷するのを防ぐため、資料は円形の薄い台座の上に展示する。資料の後ろには、コースの柵を模したものを設置し、競馬場のコースであることを表現する。資料から見て右隣には、優勝した際に与えられる優勝レイのレプリカを展示する。優勝レイには、レース名が記載されているため、どのレースで優勝したのかがわかりやすくなると思われる。なお、優勝レイの裏面には馬名が刻まれるが、レーベルから馬名がわかるためレプリカでは省略することも検討する。あくまで補助的な資料であるため、ぬいぐるみ本体の3分の1ほどのサイズが望ましい。

### レーベル (Label)

見やすさを重視し、レーベルの形はシンプルな長方形にする。馬名を強調し、アイドルホースオーデションの名と、優勝レース名を記載する。競馬はブラッドスポーツであり血統が重視されるため、父・母・父母（母方の祖母）の馬名を記載する。活躍について説明するため、これまでの戦績と勝鞍を簡潔に記載し、レーベルの下部には説明文を添える。向かって右には、騎手が着用した勝負服のデザインを載せる。上記の情報はタグに記載されているが、展示の際にはタグが見えにくいと考えられるため、レーベルに記載する。枠線に勝負服に用いられる色をラインとして用いることで単調過ぎないデザインにする。説明はぬいぐるみとしての内容よりも競走馬としての説明を重視している。本馬は種牡馬としての余生を過ごせないが、その活躍を後世に伝えるため、勝った記録だけでなく、入賞した記録についても言及している。資料自体はぬいぐるみのため、硬すぎる印象になることを避けるため、ポップ調のフォントを使用する。なお、読みやすさを考慮し、適宜シャープな字体を使用する。かわいらしさとカッコよさの表現のため、キラキラをイメージした図形を用いる。レース名の部分は、芝のレースであることを表現するため、緑色を用いる。展示時期を2025年の夏以降と想定し、説明文を制作している。本馬は現在（2025年1月時点で）誘導馬としての訓練を行っている最中である。

アイドルホースオーデション 2022

# ディーポンド号

第70回 阪神大賞典

<p><b>31戦5勝(2着6回)</b> 父:キズナ 母:ゼフィランサス 母父:キングヘイロー</p>	<p><b>主な勝鞍</b> ・阪神大賞典 '21、'22 ・フォア賞 '21</p>
--	---

2019年から2024年まで活躍した牡馬。同期には、三冠馬コントレイル。  
2021年から2024年のG1競走【天皇賞・春】にて3年連続2着、4年連続馬券内という記録を持つ。現在は京都競馬場にて誘導馬として活躍中。

所有者；荒屋敷詩乃



## 博物館資料ドキュメント 『E-Pencil (イー・ペンシル)』

人文学部英米文化学科 1 年 浅井 博子

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は「イー・ペンシル」である。KUMON の音声学習の際に使用される。型は旧式である。

電源を入れ、教材の音声マークに先端の黒い部分を当てることで音声再生される。各ボタンを操作することで、音量調整、再生、停止、リピート再生、前後の教材の音声再生等の操作ができる。

本体の大部分は薄い青色、電源ボタンは白に近い水色、HOLD ボタンは灰色、表面中央は銀色、イヤホン等の挿入口、先端部分は黒となっている。先端部分は外が黒で、内側は半透明である。各文字の色は白だが、正面の銀色の部分に書かれている文字はすべて黒色となっている。正面には、KUMON のロゴと、イー・ペンシルのロゴが書かれている。

ねじ穴が裏面に 4 ヶ所、正面から見て左側の SD カード挿入口に 1 ヶ所にある。

本体は丸みを帯びており、先端に行くほど細くなっている形状である。また、正面中央が盛り上がった形状で、握りやすい形となっている。押し込み式ボタンは 5 つ、スライド式ボタンは 3 つついている。製造年、製造場所、原産国、素材はすべて不明である。

サイズは、以下の通りである。

高さ 15.5 cm、横 3.3 cm、奥行き 2.0 cm 最も先端に近い箇所：横 1.3 cm 先端部分の黒の部分：高さ 0.5 cm、横 0.8 cm、奥行き 0.8 cm
---

電源を入れると、左のランプが黄色く光り、「ピッ」と音が鳴る。音声流れている間ランプが黄色く点滅する。電池の残りが少ないときはランプが赤く光る。

裏面の電池入れのカバーには、黒のペンで「あさい かずな」と平仮名で前所有者の名前が書かれている。先端側のスペースには、赤枠の黄色い熊のステッカーが貼られている。この黄色い熊には白い子熊とみられるものしがみき、黄色い熊の胴体には「よくできました」と青で記されたデザインである。購入時の箱、説明書は紛失している。

——付属ケース——

イー・ペンシルが収納されている保護ケースは、薄汚れがみられ、生地は薄い。比較的丈夫な素材で作られている。ケース本体の色は水色で、黒い紐がついており、巾着のように上部を絞ることが可能である。表面に黒のペンで「あさい かずな」と前所有者の名前が書かれている。付属ケースのサイズは以下の通りである。

全体の長さ 18.5 cm      横 6.0 cm      厚さ 0.8 cm ひもの長さ 6.7 cm
--

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は、前所有者である浅井一菜が KUMON の英語教材をすべて修了し、現所有者である浅井博子が譲り受けたものである。浅井一菜氏と浅井博子氏は姉妹であり、現所有者である博子氏は現在 (2025 年 1 月) も KUMON に通っている。しかし、博子氏は自身のイー・ペンシルも所有しているため、現在、この資料は使用されていない。

購入年は 2010 年で、前所有者である一菜氏が小学 2 年生の時に購入され、2023 年に修了するまで使用された。その後、現所有者である博子氏が譲り受けた。購入した際、箱があったが紛失している。

電源は問題なく入るが、音声が流れている際、短いフレーズを繰り返したり、止まったり、とぎれとぎれになったりと、故障している。しかし、使用することがないため、修理はされていない。この症状は前所有者の一菜氏が KUMON に通っていた時からあったものだが、一菜氏は間もなく全教材が修了するというので、放置していた。

本体の裏面に張られたステッカーは、KUMON の教室にて、自身らの宿題や、その日の教材が終わった際に先生が教材に貼ってくれるものをもらい貼ったものである。

現在のイー・ペンシルとは違う形をしており、対応できる教材が異なっているが、対応している教材もある。

## コンディション・レポート (Condition Report)

資料は 2025 年 1 月現在で、購入時から 15 年が経過している。本体の性能が格段に落ちており、故障状態にある。

裏面の電池カバーに書かれている「あさい かずな」の文字が消えかかっており、強くこすると、消えてしまう可能性がある。

裏面のクマのシールは、黒鉛で汚れている。端の方の色が剥げてきており、少し白い部分が見えている。

スライド式のボタンは問題なくスライドできるが、隙間に汚れがたまっている。

ネジにもが汚れがみられ、白くなっている部分がある。

——付属ケース——

保護ケースは、全体的に汚れが目立っている。鉛筆による落書きも見られる。

「あさい かずな」の文字は、文字の下部分が少し薄くなっている。

絞るための黒い紐は糸に少しほつれが見られる。

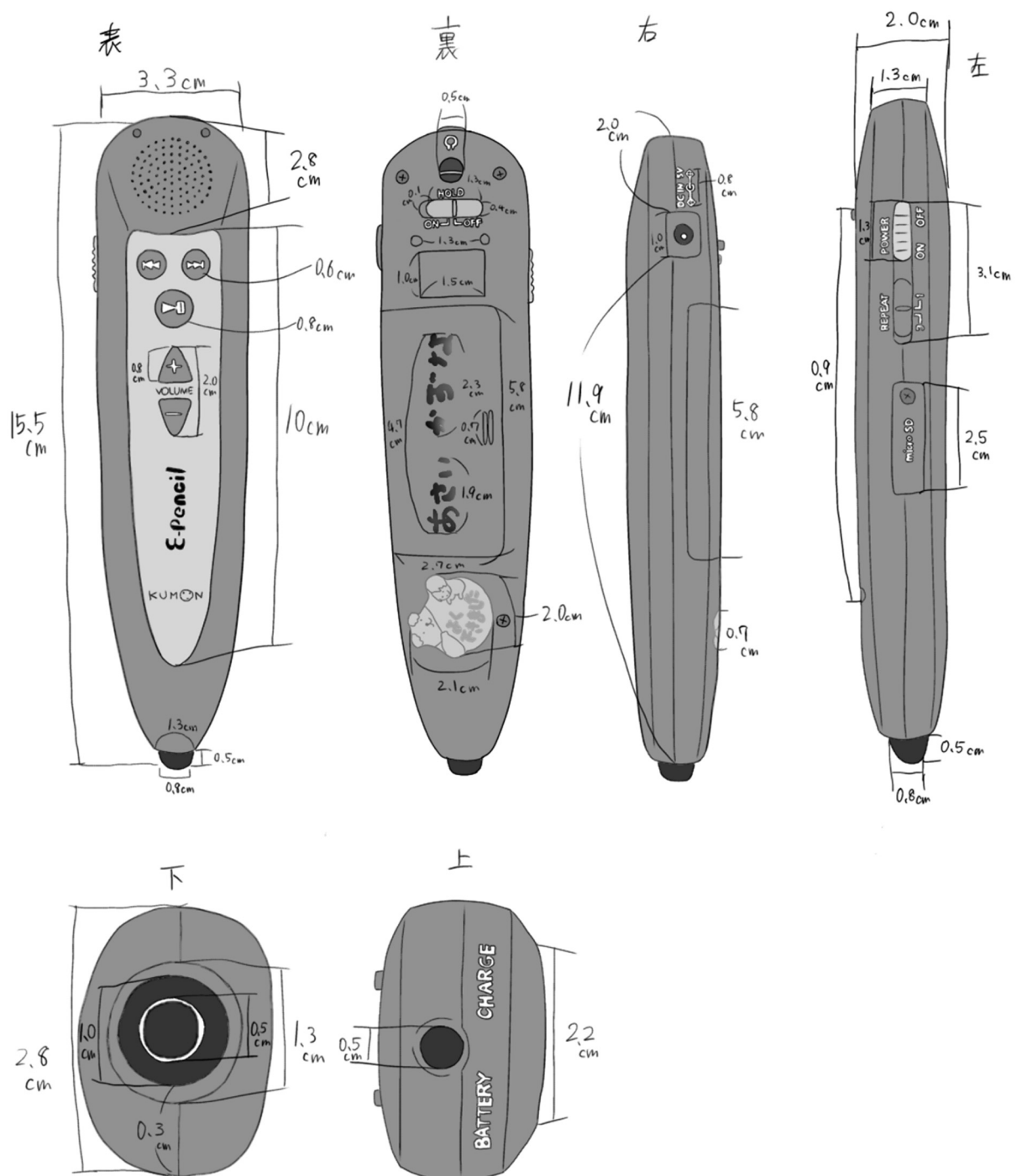
## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

本資料は精密機器のため、強い衝撃に弱い。移動の際はクッション素材のものにくるみ、箱に入れたまま移動させるなどして、落とすことのないようにしなければならない。また、衝撃を抑えるようにすることが求められる。先端が特に弱いため、先端への衝撃は厳禁で

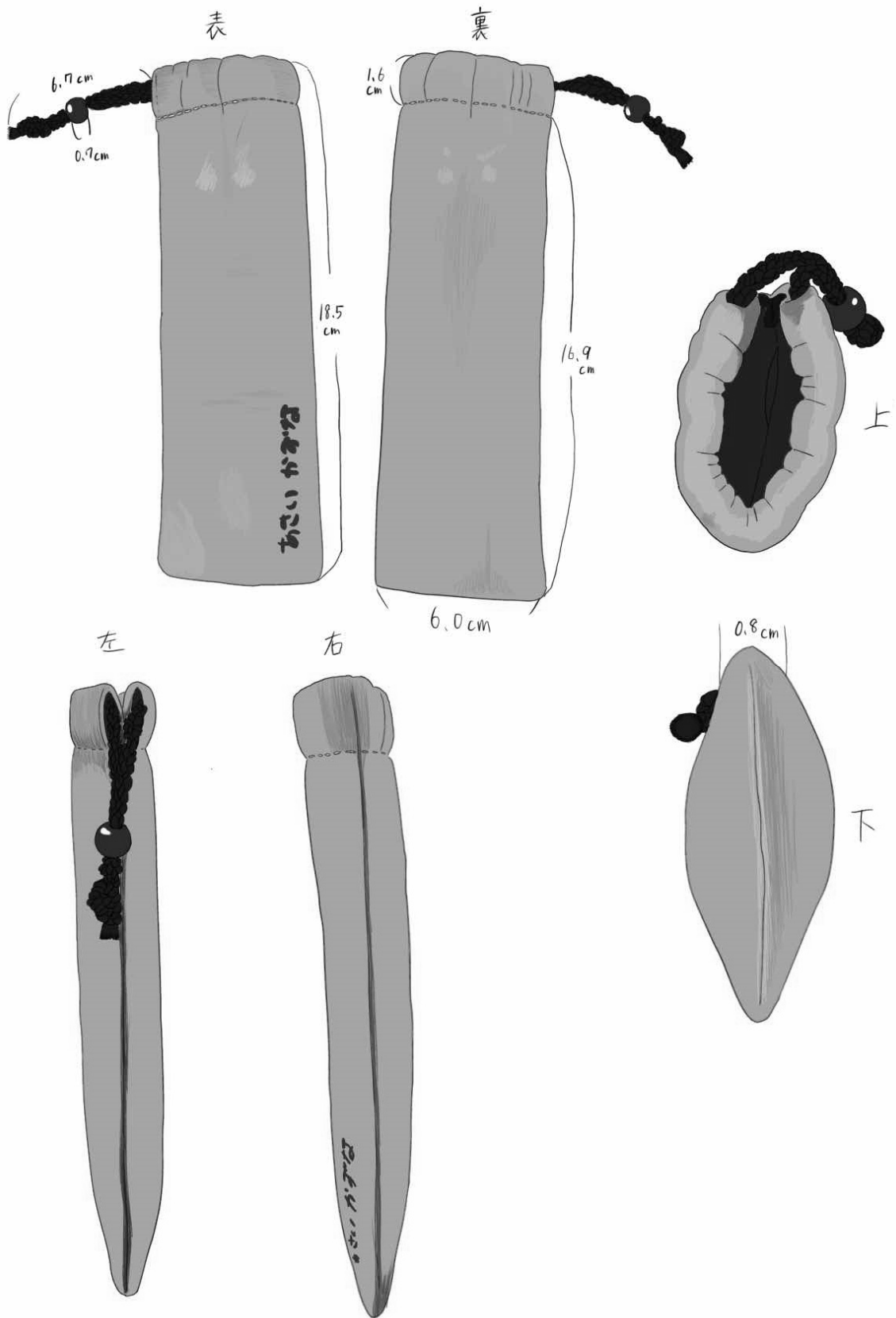
ある。水分にも弱いため、濡れた手で触れるなどの行為は絶対にしてはならない。本体の修復は、シールの損傷に気を付けて行うこと。また、むやみに作動させることも慎む。付属の保護ケースは、強くにぎったり、折りたたんでしまったりすると跡がついてしまうため自然体のまま移動させること。

添付されているステッカー、および記載されている前所有者の名前も資料の重要な要素と捉えているため、これらの保護についても念頭に置かなければならない。

### イラストレーション (Illustration) - 本体



イラストレーション (Illustration) - 付属ケース



## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料は、アルカリ性単四乾電池2本で作動する仕組みであるが、液漏れなど電池の劣化による本体の損傷、通電による本体機能の劣化等を防ぐため、また、火災のリスクを軽減するため、電池は外した状態で保存する。

精密機械であるため、高温多湿には特に気を付けなければならない。先端を下にして保存すると、先端がつぶれてしまうので、横置きになるように置くのが望ましい。収納ボックス内も、緩衝性が高いものにする。

強い磁場の発生するものや、水分が多いもの、電気系統と相性の悪いものの近くでの作業は、故障を誘発させる原因となるため避ける。資料の上に物を置くことはもちろん厳禁であるが、万が一落下してしまった際の衝撃を少しでも和らげるため、作業のために持ち出した際は、高い位置に置いたりするのを避けるよう心掛ける。

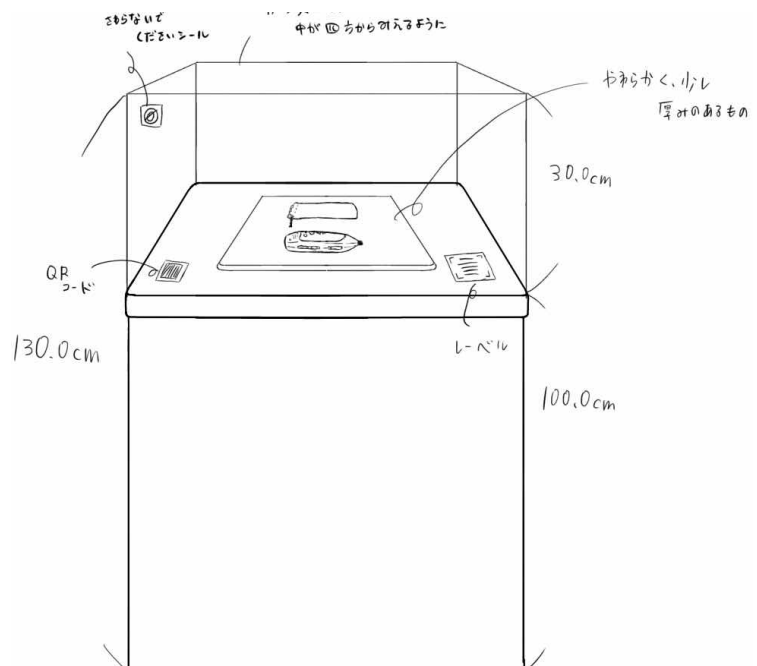
### ——付属ケース——

ケースについては、本体とは全く異なる素材でできているため、保存の際には、付属ケースの中には本体は収納しない。付属ケースは、本体が入っていない状態での保存となるが、関連資料であるため、全く切り離すような状態での保存は望ましくない。本体が精密機械であるため、本体に適応した保存環境であれば、付属ケースの保存にも十分に適応する。よって、本体と同じ保存ケース内で、分けて保存するのが良い。

本体に貼られたステッカー、および付属ケースは光による退色が懸念させるため、収蔵庫から持ち出して作業する際には、直射日光が当たらないようにし、展示の際には、照度にも気を付ける。

## エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

前面・側面・上部から見やすいよう、透明ケースに入れて展示する。展示台の高さを130 cmに設定したのは、一番わかりやすい上からの視点への考慮である。展示ケース内は、万が一の衝撃を抑えられるようにクッション素材の薄手のものを下に敷く。ケース内の手前にイー・ペンシル本体を置き、奥に付属の保存ケースを配置し、本体を見やすくする。QRコードをスマホで読み取り、実際の音声を聴くことができる。

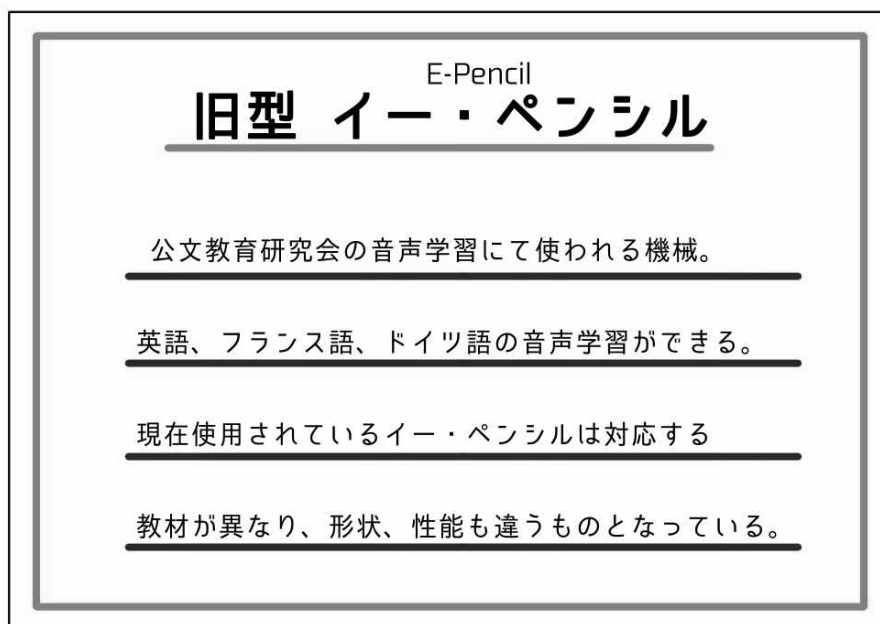


展示の際の、資料保存に関する注意点は、日光に当たらないようにすること、ケース内の湿度を高めないこと、温度を暑すぎず、寒すぎずの適温にしておくことである。また、保存ケースや、本体からのガスなどの発生にも気を付ける必要がある。来館者による展示破損のリスクを抑えるため、ケースに触れたりすることを禁止する注意書きをケースにつける。

### レーベル (Label)

展示資料に添えるレーベルに関する事項は以下の通りである。

- KUMON のイメージカラー、および資料の色の水色を取り入れた、KUMON のイメージに近くなるようなデザイン
- サイズは、縦 10.0 cm、横 15.0 cm
- 文字のフォントは、スマートフォント UI を使用
- 文字の色は、教材の文字の色と同様に、黒で統一



## 博物館資料ドキュメント 『モルモットの埴輪（モニワ）』

工学部生命工学科 1 年 藤林 ひかる

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

全長：13.7 cm    本体の横幅（本体の直径）：9.6 cm    本体の厚さ：約 1.0cm ※各部位のサイズの詳細はイラストレーションにて
---

- ◆この資料は「モルモットの埴輪（モニワ）」である。
- ◆この埴輪は、所有者である藤林ひかるが飼っているモルモットの「もっ子」をモデルとして 2025 年 1 月 2 日に自宅で制作したものである。
- ◆作品名は「モニワ」である。この名前は「モルモットのハニワ」を略したものに由来している。
- ◆この資料で藤林ひかるが制作したハニワ作品は 3 つ目になる。
- ◆この資料はモルモットが飼い主を見上げている様なデザインとなっており、制作者はインテリアとして部屋に飾ることができると考えている。
- ◆全体を石粉粘土で制作している。セリアで購入した石粉粘土を 3 袋使用している。
- ◆資料を裏返して中を見ると白い歯が見える。それはモルモットのこれから伸びる歯の構造を表現している。

#### —— 塗装 ——

- ◆出土したばかりで泥だらけの状態を表現するために、全体の茶色は重ね塗りに適したアクリル絵の具を使用している。
- ◆唇の桃色は光が反射しないようにするため、水彩絵の具を用いている。
- ◆前歯はモルモットの黄色い歯を表現するために、まず水彩絵の具の黄色で塗装し、その上から水彩絵の具の白色で薄く塗装している。さらに前歯を光らせるために、最後に白色のガラス絵の具で薄くコーティングしている。

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

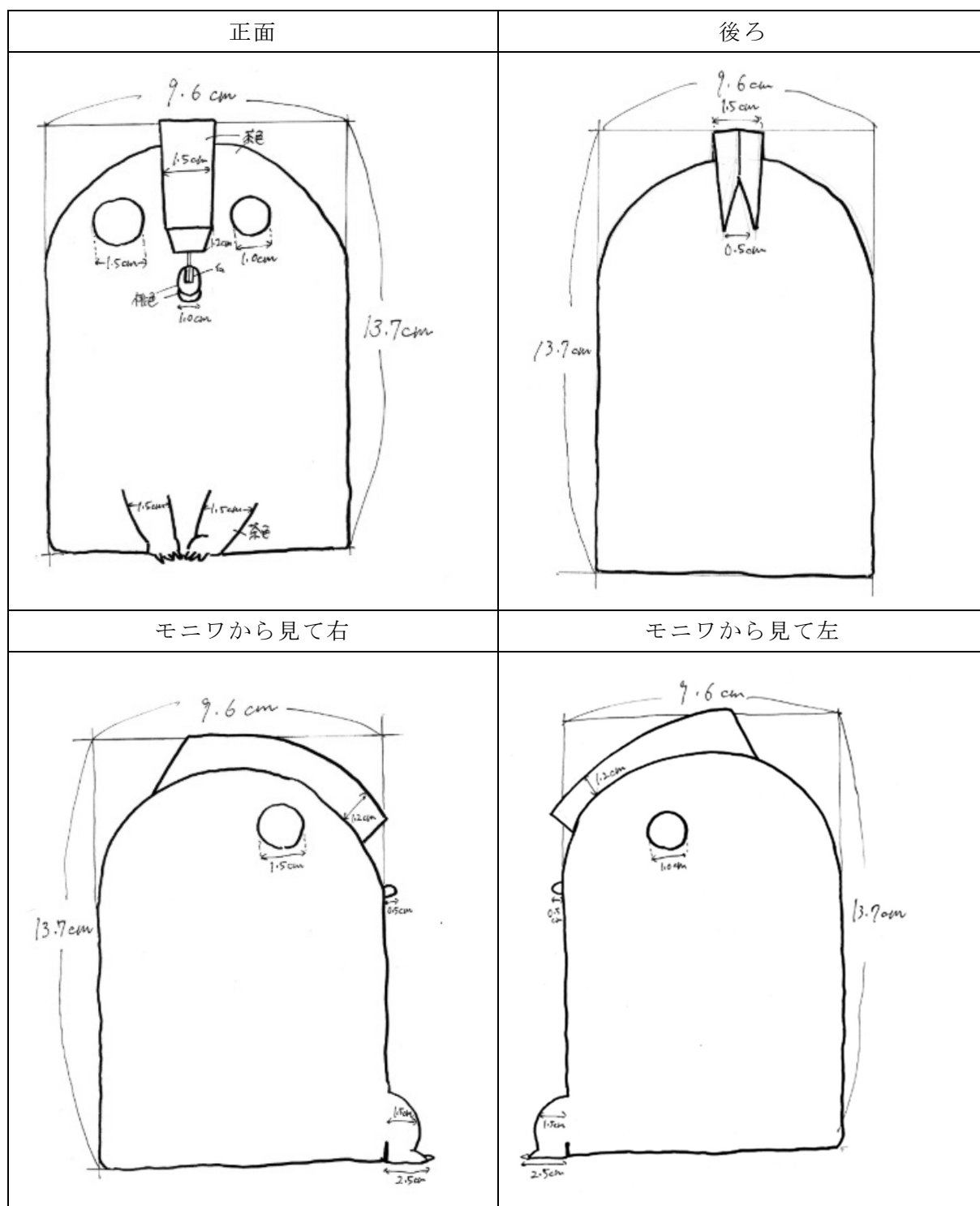
この資料は制作者である藤林ひかるが、「埴輪」と「モルモット」という 2 つの好きなものを合体させたことによって完成した作品である。

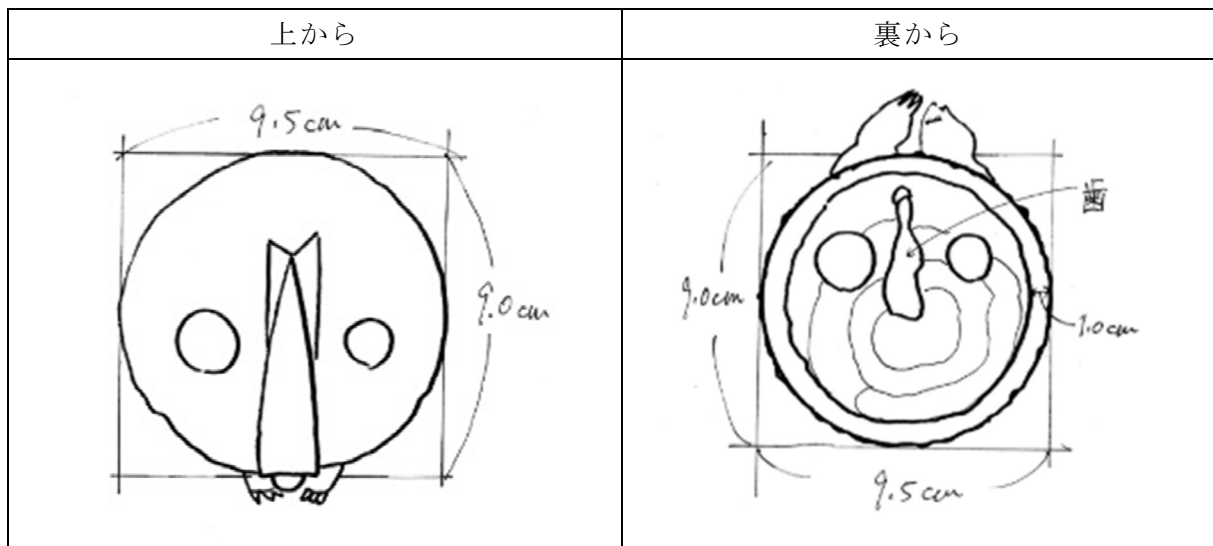
藤林ひかるは埴輪が好きで高校 1 年生の時（2021 年）に、紙粘土で 2 体の手のひらサイズの埴輪を制作した。それから時がたち 2024 年 1 月に自宅にモルモットが来て、モルモットが好きになった。特にモルモット（もっ子）が人間を見上げている姿が好きであった。このようなエピソードからこの資料が完成した。乾燥させる時間を含めなくても、形作り

と塗装で約 10 時間をかけてやっと完成した。

この資料を制作するにあたっては、コンセプトがあった。それは、この資料（モニワ）が誰かに掘り起こされたのではなくモニワ自身が自力で土から出てきたような不思議な世界観を見た人に理解してもらうことである。

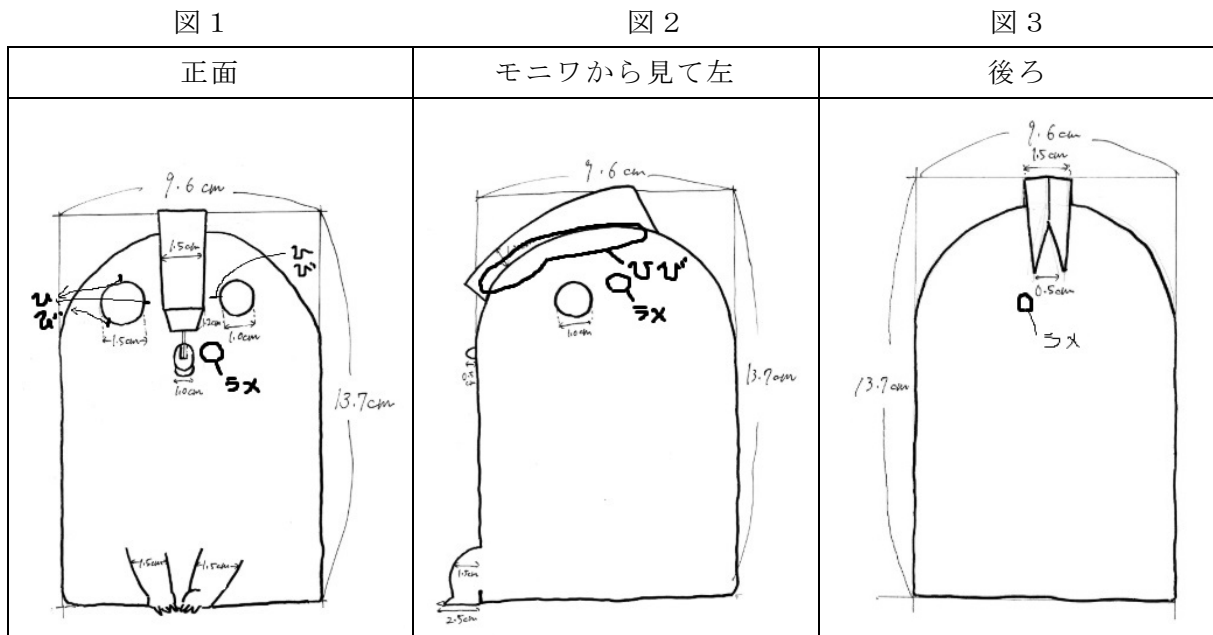
### イラストレーション (Illustration)





——各部位の色——  
 胴体/手/鼻：茶色    唇：桃色    歯：白

**コンディション・レポート (Condition Report)**



- ◆資料の鼻の部分（埴輪から見て左）に少しひびが入っている。このひびは石粉粘土が固まる際にできたものと考えられる。（図2）
- ◆資料の両目の部分にもひびが少し入っている。埴輪から見て右目の縁の12時と3時と7時の位置に3ヶ所と、埴輪から見て左目の縁の9時の位置に1ヶ所のひびが入っている。

- ◆埴輪から見て左目の縁の12時と6時の位置のひびらしきものは、ひびではない。これらは、制作時にできた凹みである。(図1)
- ◆(埴輪から見て左)口の横と、(埴輪から見て左)目の2cm上、後ろの鼻の下の3ヶ所にラメが付着している。これはホコリを払う時に使った筆にラメが付着していたことが原因であると考えられる。(図1、2、3)

### リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

石粉粘土からできているという点から、衝撃が加わると割れてしまう。よって、水平で安全な場所に保存することを推奨する。また、硬い地面に置くと削れて塗装が剥がれる危険性があると考えられる。そのため、マットのような物を下に敷いて設置することを推奨する。

石粉粘土は、ある程度の直射日光による劣化の可能性は低いと考えられるが、塗装については光による色褪せが懸念されるため、日光、および紫外線を発する高い照度の空間での保存や作業を避ける。

塗装では、アクリル絵の具、水彩絵の具、ガラス絵の具と異なる種類の塗料を使用しているため、各塗料の性質を踏まえたうえでの、温度や湿度の管理が必要である。

### ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

石粉粘土でできているため、紙粘土とは違い衝撃が加わると割れる。

コンディション・レポート (Condition Report)で述べたように、この資料は鼻や唇、歯、手は凸凹になっているおり、ひびもいくつかある。落とす、ぶつける、その部分だけを持つ等をするとう部品が取れる可能性が極めて高い。そのため、持ち運ぶ際には埴輪の胴体を両手で持つ必要がある。

口の部分も含めて全体に芸術的な小さな凹みや傷があるという点からホコリが付着すると取り除くのがかなり大変だと考えられる。よって、ホコリが付着しないようにケースに入れて保管・展示をする必要がある。万が一、ホコリが付着した場合は、絶対にウェットティッシュ等の水分のある物では拭いてはいけない。塗装に水彩絵の具が使用されている部分もあることから、塗装が取れたり、滲む可能性があるからである。また、このような理由から人の汗などの水分も付着することを避けるべきである。よって、素手では触らずに手袋を着用することを推奨する。

### エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

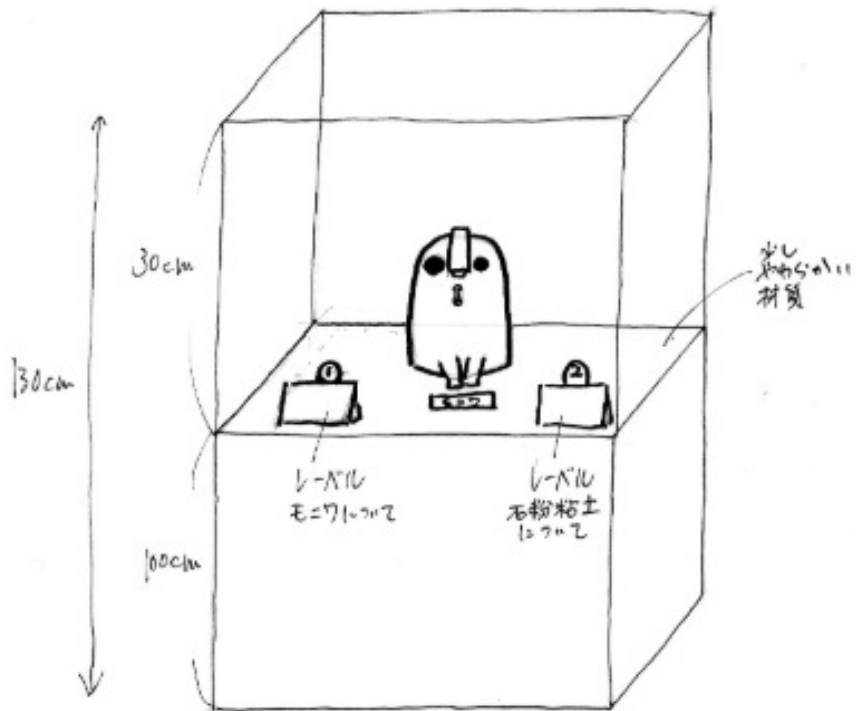
——展示の際の注意事項——

この資料は現代人(藤林ひかる)が制作したものである。よって、実際に土中から埋蔵文化財として発掘されたハニワとは区別して扱わなくてはならない。そのことから、もし

実際に発掘されたハニワと一緒に展示するのであれば、この資料が現代のアート作品であることを見た人が分かるように区別した展示をする必要がある。

この資料の胴体の部分は塗装の濃淡を利用して泥が付着していることを表現しているため、胴体に注目して見ていただきたい。よって、360度からこの資料を見ることが出来る透明ケースを用いることが望ましい。また、リクワイアド・エンバイロメント(Required Environment)で述べたように資料の下にマットを敷くことを推奨する。

この資料の裏を覗くと見ることが出来るモニワの歯の構造も知ってもらうために、資料の裏の写真を添えて展示することを検討する。写真やレーベルには傾斜をつけて見やすいようにする。また、注意点として、資料自体には傾斜はつけない。理由は、資料の転倒防止に加え、平面でないため力加わるところに偏りができて塗装が剥がれたり、削れる、ひびが入る等のリスクを軽減するためである。



展示の台は、誰でも見やすいような高さに設定する。

高温多湿を避けられるように管理しながらの展示が求められる。

展示で資料を見るための光は、強すぎない程度にすることが大切である。資料保護の観点に加え、この資料は凹凸が多いため光の当たり方によっては、影で資料の各部位の詳細が見えにくくなる可能性がある。よって、照度に加え、光の当たり方をよく確認することが大切である。

### レーベル (Label)

説明文の文字は、誰でも読みやすいように飾りのない文字 (UD デジタル教科書体 NP-R) を使用する。色も読みやすさを意識してシンプルにする。また、文字の大きさも比較的多きめにして読みやすくする。

説明文のコンセプトは、説明したいことが沢山あるが、まずは「モニワ」が何なのかを知ってもらうこととする。その後に詳しく知ってもらうためには、まずこの前置き知ってもらうことがとても大切だと考えたからである。

芸術作品を見て、多くの人が気になることの1つとして、それが何でできているのかと

ということが挙げられる。普段粘土を使わない人にとっては、石粉粘土は初めて聞く単語であると考えられる。このことから石粉粘土についての説明を加える。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)でも述べたように、この資料が現代アート作品であることを強調する必要がある際には、以下のレーベルとは別に、そのことが分かるようなレーベルを作成する必要がある。

レーベルのサイズは、「モニワ」、「石粉粘土とは」の両方とも  
〔横：25.5 cm、縦：10.0 cm〕とする。

## モニワ

2024年に藤林ひかるによって制作された、インテリアとして飾ることができるモルモットの埴輪である。

モデルになったモルモットは藤林が飼っている「もっ子」である。

この作品は「もっ子」が飼い主を見上げている姿を表現したもの。

茶色の体が土から発掘されたばかりだということを連想させる。

現所有者：藤林ひかる

## 石粉粘土とは

「モニワ」は石粉粘土で制作されており、塗装は重ね塗りがしやすいアクリル絵の具が用いられている。

石粉粘土とは、石を砕いた粉・水・パルプ・合成糊剤・防腐剤等の成分でできた粘土である。陶器や石膏のような仕上がりになるため、乾燥後に彫刻刀などで模様をつけることが可能である。

現所有者：藤林ひかる

## 博物館資料ドキュメント 『外来生物法許可標章』

法学研究科法律学専攻修士課程1年 加賀谷 朋伽

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

名称：外来生物法許可標章

所有者：加賀谷 朋伽 氏

発行年：北海道地方環境事務所長から令和4年に発行されている

有効期限：平成31年3月18日から令和7年3月17日迄

素材：紙

寸法：縦 6.6cm、横 10.5cm

本資料は、『外来生物法許可標章』である。表面は、青色・水色・白色の3色で構成されており、各色の区画に文字が記載されている。記載内容は、「許可番号」、「許可を受けた者」、「許可を受けた生物」、「個体数」、「許可日」、「有効期限」、「注意事項」、「連絡先」の8つである。観察者から見た右下には、環境省のロゴマークが記載されている。

資料の裏面は、赤色と白色の2色で構成されており、こちらにも文字が記載されている。記載内容は、「カラーレーザー&カラーコピー用 耐 10面 LBP-WP6910 20枚入 使用方法」である。観察者から見た「耐」という文字の右側と「使用方法」という文字の下側が切れていることから、加賀谷氏が所有する『外来生物法許可標章』の部分のみ、第三者によって切り落とされたと考えられる。

また、本資料はシールにもなっており、資料全体のサイズは縦6.6cm、横10.5cmである。シール部分のサイズは縦5.0cm、横8.6cmである。

本資料の素材は紙である。当該資料に記載されている文字や色はパソコンなどの電子機器で作成され、それをプリンターなどの電子機器を通して出力し、紙に印刷したものだと思われる。

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成16年法律第78号。以下、「特定外来生物法」とする。）第5条の規定に基づき、発行されたものである。この法律は、特定外来生物による生態系、人の生命・身体、農林水産業への被害を防止し、生物の多様性の確保、人の生命・身体の保護、農林水産業の健全な発展に寄与することを通じて、国民生活の安全向上に資することを目的としている。そのために、問題を引き起こす海外起源の外来生物を特定外来生物として指定し、その飼養、栽培、保管、運搬、輸入といった取扱いを規制し、特定外来生物の防除等を行うこととしている。

しかし、特定外来生物は、学術研究の目的や、その他主務省令で定められた目的であれば飼養をすることができ、特定外来生物を飼養するためには、北海道地方環境事務所長に飼養等の許可申請をしなければならない。許可が下りると、特定外来生物の飼養許可証と、本資料である外来生物法許可標章が発行され、許可証と許可標章の双方に許可を受けた生物が記載される。許可の有効期限は3年間であり、特定外来生物の飼養をその後も継続して行う場合には、別途、特定外来生物の飼養等の継続許可申請が必要となる。

飼養の際には、許可証と許可標章の双方を保管しておく必要がある。許可標章は、特定外来生物が飼育されている水槽に貼付けなければならない。許可を得ずに飼育をしたり、特定外来生物を野外に放す・逃がす行為を行った場合には、飼養者に罰金を含む罰則が課せられる。

本資料の所有者である加賀谷氏は、自宅でフロリダガーを飼育しており、資料に示された飼養の許可を得た生物もフロリダガーとなっている。

フロリダガーが特定外来生物に指定されたのは、平成30年4月1日のことである。加賀谷氏のように、特定外来生物に指定される以前からフロリダガーを飼育していた場合は、特定の飼育基準を満たした水槽であれば、申請を行うことで、フロリダガーを継続して飼育することができる。

加賀谷氏は上記の申請を行い、フロリダガーの飼養等の許可を、平成31年3月18日に取得した。これに加え、加賀谷氏は、フロリダガーの飼養等の継続許可申請を3年ごとに行っているため、令和7年1月現在の許可の有効期限は令和10年3月17日迄となっている。本レポートで使用した資料の有効期限は、令和7年3月17日迄となっているが、加賀谷氏が、令和6年11月30日付でフロリダガーの飼育継続許可申請を行っていたため、令和7年1月現在、フロリダガーの飼養等の許可の有効期限は令和10年3月17日まで延長されている。

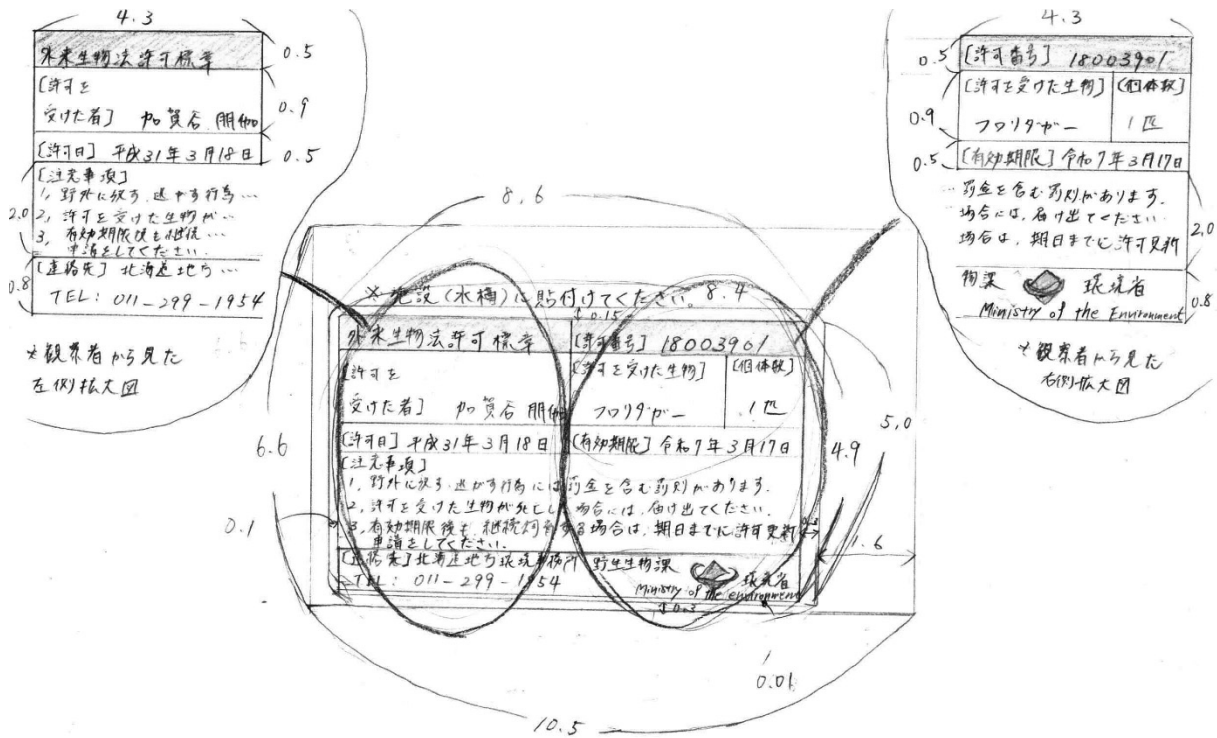
### コンディション・レポート (Condition Report)

全体的に目立つような汚れなどは見られず、資料としての状態は比較的良好であると思われる。

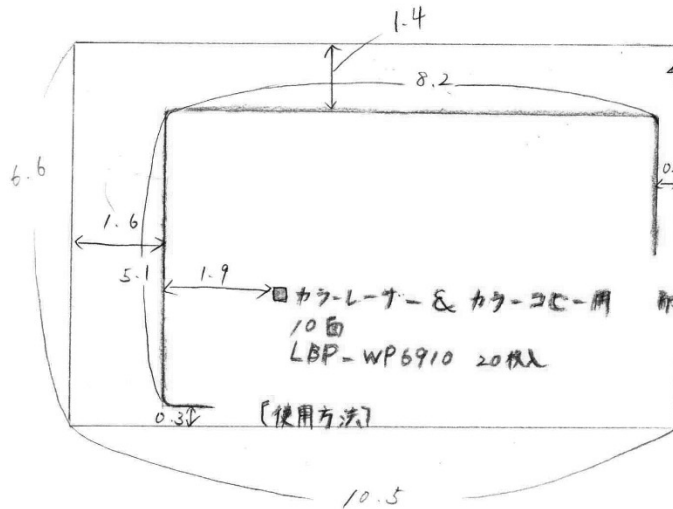
前述したように、本資料である『外来生物法許可標章』は、許可を受けた生物(=フロリダガー)が飼育されている水槽に貼付けなければならない。しかし、所有者である加賀谷氏は、水槽からの水の飛び散りによる許可標章の劣化を懸念し、当該資料を水槽に貼付けず、許可証とともに引き出しの中に保管していた。資料の状態が比較的良好であったのも、この保管方法が要因していたと思われる。

しかし、本資料の素材が紙であるという特徴から、僅かな外的要因で折り目や擦れ、破れが発生しやすく、本資料が完全にきれいな状態・新品の状態であるとは言い難い。

# イラストレーション (Illustration)



【表】



【裏】

単位: cm

縮倍率: 100% (原寸大)

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

繰り返しになるが、本資料とともに特定外来生物の飼養許可証も保管しておかなければならない。しかし、どちらも素材は紙であるため、紙の劣化を防ぎ、長期的に保管するためには、温湿度管理や害虫対策が必要となる。

温湿度管理に関しては、紙の乾燥を防ぐとともに、酸性劣化が発生しやすくなる 25 度以上の温度と、60%以上の湿度は避けるべきである。これに加え、カビや紙害虫の発生にも注意すべきであり、これらすべてのリスクを考えたうえで、温湿度設定をする必要がある。害虫予防には、通気性を確保することも重要となる。

とくに、酸性劣化には注意すべきであり、当該資料を防酸ボックスに入れて保管したり、資料との間に、資料サイズと合う酸性中和紙を挟んだりなどの工夫も必要となる。

照明に関しては、紙を黄変させ、インクや色を退色させる紫外線や強い光は避けるべきである。そのため、直射日光が当たらない場所で保管することが必要となる。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

本資料の取扱いについては、当該標章を博物館資料として取扱う場合は、加賀谷氏のように入水に貼り付けずに（収蔵庫）に保管しなければならない。

前述したように、本資料の素材は紙であるが、紙は僅かな外的要因で折り目や擦れ、破れが発生しやすい。それゆえ、本資料は特に丁寧に扱う必要がある。資料の角を折らないようにしたり、手で強く触れないようにすることが重要となる。これに加え、手袋を着用して取扱うことで、資料に皮脂汚れが付くのを防ぐことも必要である。また、僅かな外的要因で損傷が生じるといふ資料の特徴から、資料に触れる際には、固い金属製のボタンやベルトのバックル等に注意し、時計やアクセサリー等も着用しないことが求められる。これと同様に、ネクタイやパーカーの紐など、資料をひっかけて損傷を生じさせる恐れのある衣服を着用しての取扱いは避けるべきである。

補足であるが、当該資料を博物館資料としてではなく、特定外来生物が飼育されている水槽に貼付けて取扱う場合に於いても、特に、水槽からの水の飛び散りによる資料の損傷に注意しなければならない。水槽の近くに貼付けている紙は、水の飛び散りによって湿気を吸収し、劣化、カビ、インクの滲みなどの問題が起きやすくなる。そのため、資料にラミネート加工を施し、防水対策を行ったり、資料の貼付け位置を変更するなどの工夫が必要となる。

実際の展示においては、資料のレプリカを作成し、原本（オリジナル）は保管し、レプリカを水槽に貼付けることを検討する。

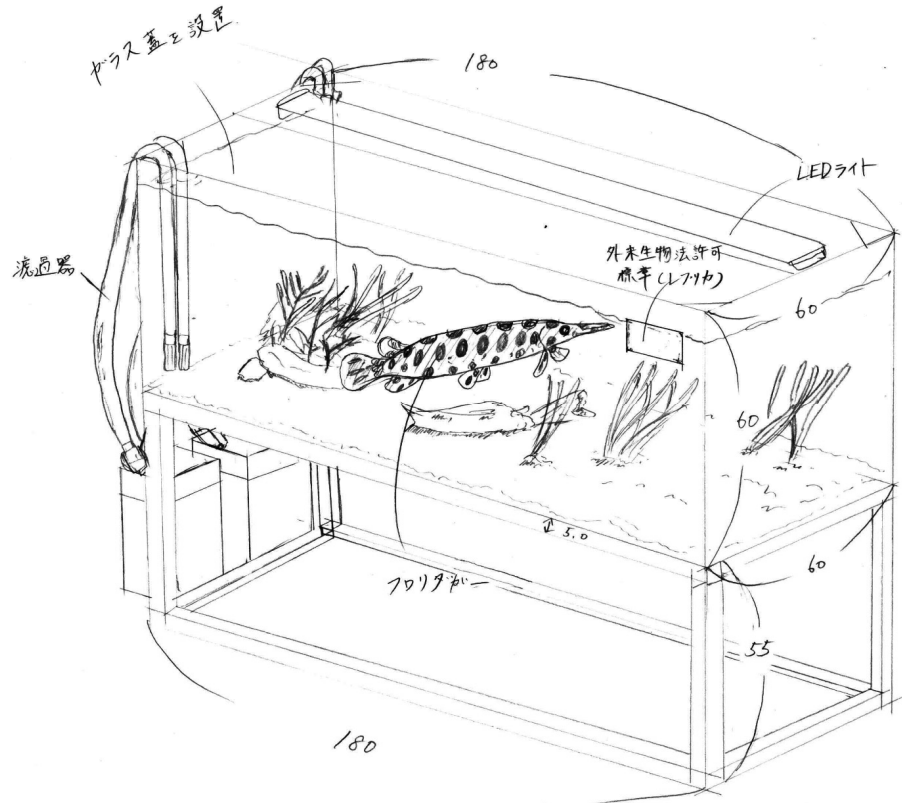
過剰な取扱いを防ぐため、記載内容のみが必要な場合の資料活用は、レプリカ、あるいはデジタル・アーカイブ化したものを使用する。

## エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示の際には、以下の図を参考にする。

本資料については、資料に記載されている特定外来生物の実物も展示されていた方が、資料への理解が深まると考えられるため、資料を水槽に貼付けての展示も考えられる。

しかし、前述したように、本資料の取扱いに関しては、素材が紙であることを考慮しなければならない。資料を水槽に貼付けて展示すると、水槽からの水の飛び散りによる資料の劣化/損傷が発生する。これらのことから、展示の際には、外来生物法許可標章のレプリカを用いる。原本である当該資料については、適切な環境設定のもと、収蔵庫で保管する。



※水槽内のレイアウトは、フロリダガーの生息地である北米の淡水域をモチーフにする

図の表記サイズの単位：cm

### レーベル (Label)

本資料の展示の際には、生体の展示も同時に行うため、作成されるレーベルは水槽サイズに見合ったものでなくてはならない。そのため、展示用レーベルのレプリカは、30%の縮小倍率で作成。

展示レーベルには、外来生物法許可標章とフロリダガーの基本事項の双方について書かれたレーベルと、これらの内容についての詳細について書かれたレーベルの2種を用意する。レーベルを2種用意することで、外来生物そのものに対する理解と、外来生物の適切な管理の重要性への理解の双方が深まることを期待する。

文字や色に関しては、本展示は、生態系の重要性を伝えるものでもあるため、読みやすく、色の主張も激しくないものにする。各レーベルの見出しの大文字には青色を使用する。

青色は落ち着いた色であるとともに、集中力を高める効果もある。そのため、このような展示には最適であると思われる。

## フロリダガーと外来生物法許可標章

英名 Florida Gar

学名 *Lepisosteus platychincus*

生息地 北米(フロリダ半島)

許可番号 18003901

許可日 平成 31 年 3 月 18 日

所有者 加賀谷朋伽 氏 2025 年 1 月 20 日

横 : 26cm 縦 : 16cm

**概要** フロリダガーは、北米の淡水域に生息する古代魚です。その硬い鱗と長い顎は、1 億年以上前の姿をほとんど変えることなく現在まで生き続けてきたことを示しています。この魚は、アメリカ南東部の川や湖に広く分布し、その見た目から「生きた化石」とも呼ばれています。

**特定外来生物法と飼育許可** 日本では、フロリダガーは特定外来生物に指定されています。これは、外来種が日本の自然環境に悪影響を及ぼす可能性があるためです。この魚を飼育・展示するには、特定外来生物法に基づく特定外来生物の飼育許可証が必要です。本展示では、適切な許可を取得し、安全な環境で管理されています。

**展示の目的** この展示は、外来生物が日本の自然環境に与える影響を理解し、適切な管理の重要性を伝えることを目的としています。

横 : 26cm 縦 : 36cm

## 編集後記

2025年2月18日（火）に、本学の学芸員課程実習室で講演会を開催した。奥尻町教育委員会事務局主任学芸員の稲垣森太氏に「奥尻町の文化財行政に関する他機関・団体等との協力・連携と課題」と題して講演をいただいた。稲垣氏は島内の稲穂地区にある稲穂地区の「稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室」と青苗地区にある「奥尻島津波館」で、学芸員として実質的な管理・運営を担当されており、島内の文化・文化財行政に長年にわたって携わってこられた。

おりしも本学は、奥尻町とニセコ町をカウンターパートとして「記憶地図づくりを通じた『地域知』の共有・継承の研究プロジェクト」という計画を実施中である。地域知、あるいは在来知とは、地域の居住者がその土地の自然・風土・歴史のなかではぐくんできた知識であり、「制約の中で豊かさを実現する知恵」であり、「不便で面倒なことが多かった」なかでいかにそれを乗り切るかについての知恵と捉えることもできる。そういう知識を体系化し継承することで、現在の自然・社会環境の劇的な変化のなかで、心豊かに暮らすための知恵として未来の暮らしにも応用可能なものとされており、近年注目を集めている。

奥尻町は北海道南西沖地震から30年以上が経過し、被災経験や教訓の継承が課題となっている。人口が減っても地域のコミュニティに活力を与えるためには、関係人口との緊密な連携・協力を通じた地域の文化・観光資源などの継続的な掘り起こしとそれを活用したまちおこしが欠かせない。このような社会ニーズに対して本学の学芸員課程が貢献できることは何か、また、島内で何世代にわたって伝承されてきた「地域知」を地域内で共有し、防災や減災の取り組み、あるいは地区のコミュニティ活動に役立てるためには、何が求められているかを互いに共有し、今後の指針とすることができたのは、大きな収穫であった。稲垣氏からは、講演会ともかかわる貴重なご論考を頂戴し、今号に収録したのでぜひ一読願いたい。



写真1 講演中の稲垣氏（画像中央）

写真提供 北海学園大学開発研究所